県道那珂川宇美線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告２

御笠の森遺跡II

—第９次調査（2）—

大野城市文化財調査報告書

— 第 65 集 —

2005

大野城市教育委員会

県道那珂川宇美線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告２

御笠の森遺跡II

—第９次調査（２）—

大野城市文化財調査報告書

— 第 65 集 —

２００５

大野城市教育委員会



６区から北東側県道建設予定地を望む



（1）５区 SX15出土遺物



（2）５区 SX45出土遺物

序

御笠の森遺跡は、大野城市山田に所在する市指定文化財「御笠の森」の周囲に広がる遺跡です。

今回報告する第９次調査は、県道那珂川宇美線の建設に伴って、平成13年10月から平成16年２月にかけて発掘調査を実施いたしました。その結果、平安時代から江戸時代のはじめ頃にかけての掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などが数多く発見され、当時の「山田村」に相当する大きな集落が営まれていたことがわかりました。

この「山田村」は、江戸時代の地誌『筑前国続風土記拾遺』に記録があり、古文書の記録と発掘調査の成果が一致する貴重な事例となりました。

もちろん、今回の発掘調査の成果だけでは解決できない問題も山積していますが、この成果が、多くの方々に活用され地域史解明の手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、県道建設の事業主である福岡県那珂土木事務所をはじめ、周辺住民の方々、発掘調査・整理作業に携わられた方々には、多大なご協力を頂きました。心から感謝申し上げます。

平成17年２月15日

大野城市教育委員会
教育長　古賀　宮太

例　言

1．本書は、大野城市教育委員会が県道那珂川宇美線建設に伴って発掘調査を実施した、大野城市山田２・３丁目所在「御笠の森遺跡第９次調査」の報告である。
2．御笠の森遺跡９次調査は１～７区まで調査範囲があり、本書は５区～７区の調査結果を収録している。１～４区までの調査結果は、（『御笠の森遺跡Ⅰ』大野城市文化財報告書60　大野城市教育委員会　2004）に収録している。
3．遺構の分類番号は、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SX：土坑・不明遺構、SP：ピットとしている。
4．遺構写真は、林潤也・平島義孝が撮影した。
5．遺物写真は、フォトハウスOKA（岡紀久雄、埋蔵文化財写真研究会会員）による。
6．遺構図は、5･6区については一部平島・林が作成し、それ以外を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。７区については、平島、藤田和子、吉田香織が作成した。
7．遺物実測図は、西堂将夫が大部分を、それ以外を平島が作成した。
8．製図は、渡部美香が行なった。
9．観察表は、西堂・林が作成した。
10．遺物番号は、通し番号とし、挿図と図版で番号を統一した。
11．木製品の保存処理、石鍋付着物の蛍光X線分析に関しては、福岡市埋蔵文化財センターに、金属器の透過X線撮影については、太宰府市文化ふれあい館にご協力いただいた。
12．第１図は、国土地理院発行の地形図『福岡南部』を基に作成した。
13．本文中の出土遺物（陶磁器）の分類については、次の文献に基づいている。
　太宰府分類：山本信夫 2000『太宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会
　森 田 分 類：森田　勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」
　　『貿易陶磁研究ＮＯ．２』日本貿易陶磁研究会
14．本遺跡の遺物・実測図・写真は全て大野城市教育委員会にて管理・保管している。
15．本書の執筆は、Ⅲ－３を平島・林が行ない、その他の執筆と編集を林が行なった。

本文目次

Ⅰ．はじめに
1．調査に至る経緯…… 1
2．調査体制…… 1
3．調査の経過…… 2
Ⅱ．位置と環境
1．地理的環境…… 3
2．歴史的環境…… 3
3．これまでの調査…… 6
Ⅲ．調査の結果
1．５区の調査
（1）掘立柱建物跡…… 9
（2）井戸跡…… 10
（3）土坑…… 14
（4）溝跡…… 35
（5）その他の遺構…… 41
（6）その他の出土遺物…… 41
（7）小結…… 42
2．６区の調査
（1）土坑…… 44
（2）溝跡…… 45
（3）小結…… 46
3．７区の調査
（1）溝跡…… 47
（2）小結…… 50
4．１区・3区出土の未報告遺物…… 51
Ⅳ．まとめ
1．遺跡の消長…… 52
2．各種遺物について
（1）石臼…… 54
（2）羽子板…… 56
（3）鉛弾…… 58
3．16～17世紀の御笠の森遺跡…… 58
4．文献にみる御笠の森遺跡…… 61

表目次

第１表　御笠の森遺跡調査一覧 …… 6
第２表　御笠の森遺跡出土石臼一覧表 …… 54
第３表　福岡県内出土羽子板一覧表 …… 57
第４表　遺物観察表
５区 …… 63
６区 …… 70
７区 …… 70
１区・３区（補遺） …… 70

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 4
第２図　遺跡周辺旧地図（大正15年作成）（1/25,000） …… 5
第３図　遺跡周辺旧字図（1/10,000） …… 5
第４図　御笠の森遺跡の調査地点と旧村境（1/5,000） …… 7
第５図　『筑前国続風土記付録』にみる御笠の森周辺 …… 8
第６図　５・６区遺構配置図（1/200） …… 折込図１
第７図　５・６区遺構切り合い図（1/200） …… 折込図２
第８図　５区SB01実測図（1/60） …… 9
第９図　５区SE01～04実測図（1/30） …… 11
第10図　５区SE01～05遺物実測図（1/3） …… 12
第11図　５区SE05～07実測図（1/30） …… 13
第12図　５区SE06遺物実測図（1/3） …… 14
第13図　５区SX01実測図（1/30） …… 15
第14図　５区SX02・05・07～10・13実測図（1/30） …… 17
第15図　５区SX06・14・16実測図（1/30） …… 19
第16図　５区SX01・02・06～08・11・13・14遺物実測図（1/2、1/3、1/4） …… 20
第17図　５区SX11・15・17・18実測図（1/30） …… 21
第18図　５区SX15遺物実測図（1/2、1/3、1/4） …… 22
第19図　５区SX19・20・22～24・28実測図（1/30） …… 23
第20図　５区SX16～18・20・22遺物実測図（1/2、1/3） …… 24
第21図　５区SX30・34・39・40実測図（1/30） …… 25
第22図　５区SX30・39・40遺物実測図（1/2、1/3） …… 26
第23図　５区SX41・42実測図（1/30） …… 28

第24図　５区SX43・44実測図（1/30）…… 29
第25図　５区SX41～44遺物実測図（1/3）…… 30
第26図　５区SX45実測図（1/30）…… 31
第27図　５区SX45遺物実測図（1）（1/3）…… 32
第28図　５区SX45遺物実測図（2）（1/3、1/4）…… 33
第29図　５区SX46～48実測図（1/30）…… 34
第30図　５区SX46遺物実測図（1/3、1/4）…… 34
第31図　５区SD01～05土層断面図（1/30）…… 36
第32図　５区SD01・03遺物実測図（1/3）…… 37
第33図　５区SD04遺物実測図（1）（1/3）…… 37
第34図　５区SD04遺物実測図（2）（2/3、1/2、1/3、1/4）…… 38
第35図　５区SD05～07遺物実測図（1/2、1/3）…… 40
第36図　５区SP282・354・364実測図（1/20）…… 42
第37図　５区ピット遺物実測図（1/2、1/3）…… 42
第38図　６区SX01～04実測図（1/30）…… 44
第39図　６区SD01～03土層断面図（1/30）…… 45
第40図　６区SD01・03遺物実測図（1/3）…… 46
第41図　７区遺構配置図（1/200）…… 折込図３
第42図　７区遺構切り合い図（1/200）…… 折込図４
第43図　７区SD01・05・06土層断面図（1/30）…… 47
第44図　７区SD08～10土層断面図（1/60）…… 49
第45図　７区SD01・05・06・08～10遺物実測図（1/2、1/3）…… 50
第46図　１区・３区未報告遺物（1/2、1/3）…… 51
第47図　石臼分画数の全国分布（三輪1978を一部改変）…… 55
第48図　県内出土羽子板実測図（1/3、1/6）…… 57
第49図　３・４・８・９次調査区画溝配置図（1/1,500）…… 59
付図１　御笠の森遺跡第９次調査遺構配置図（１区～３区）（1/200）
付図２　御笠の森遺跡第９次調査遺構配置図（４区～６区）（1/200）

図版目次

巻頭図版１　６区から北東側県道建設予定地を望む
巻頭図版２　(1) ５区SX15出土遺物　(2) ５区SX45出土遺物
本文図版　(1) 昭和15年頃の御笠の森　(2) 現在の御笠の森
図版１　(1) ５区北側全景（南西から）　(2) ５区東側全景（南西から）
図版２　(1) ５区南東側全景（南西から）　(2) ６区全景（南西から）
図版３　(1) ５区SB01完掘状況（南西から）　(2) ５区SE02完掘状況（北から）

(3) ５区SE03完掘状況（北東から）
図版４ (1) ５区SE04完掘状況（東から） (2) ５区SE05井筒部材出土状況（南東から）
(3) ５区SE05完掘状況（南西から）
図版５ (1) ５区SE06完掘状況（北西から） (2) ５区SX01完掘状況（北西から）
(3) ５区SX11完掘状況（北から）
図版６ (1) ５区SX14完掘状況（北西から） (2) ５区SX16完掘状況（北東から）
(3) ５区SX17完掘状況（北東から）
図版７ (1) ５区SX15遺物出土状況１（南東から） (2) ５区SX15遺物出土状況２（南東から）
(3) ５区SX15遺物出土状況３（北から）
図版８ (1) ５区SX15完掘状況（北東から） (2) ５区SX20完掘状況（南東から）
(3) ５区SX28完掘状況（東から）
図版９ (1) ５区SX30完掘状況（北西から） (2) ５区SX34完掘状況（南東から）
(3) ５区SX39・40完掘状況（西から）
図版10 (1) ５区SX41完掘状況（北東から） (2) ５区SX42・43完掘状況（北から）
(3) ５区SX44完掘状況（北西から）
図版11 (1) ５区SX45完掘状況（北から） (2) ５区SX47・48完掘状況（北から）
(3) ５区SD01・02完掘状況（南東から）
図版12 (1) ５区SD01完掘状況（北東から） (2) ５区SD01完掘状況（南西から）
(3) ５区SD04土層堆積状況（南から）
図版13 (1) ５区SD04完掘状況（北西から） (2) ５区SD04完掘状況（南西から）
(3) ５区SD04下駄出土状況（北から）
図版14 (1) ５区SD05完掘状況（東から） (2) ５区SD05土層堆積状況（西から）
図版15 (1) ５区SD06完掘状況（北東から） (2) ５区SD07完掘状況（南西から）
(3) ５区SP282礫出土状況（南西から）
図版16 (1) ５区SP354礫出土状況（西から） (2) ５区SP366礫出土状況（南西から）
(3) ５区調査風景（北から）
図版17 (1) ６区から御笠川方向を眺む（南西から） (2) ６区SX01完掘状況（北東から）
図版18 (1) ６区SX03完掘状況（南から） (2) ６区SX04完掘状況（西から）
(3) ６区SD01完掘状況（北西から）
図版19 (1) ７区全景（北東から） (2) ７区SD08～10周辺（南東から）
図版20 (1) ７区SD10完掘状況（北から） (2) ７区SD10完掘状況（南から）
(3) ７区SD06土層堆積状況（南から）
図版21 (1) 体験発掘風景１ (2) 体験発掘風景２
(3) 体験発掘風景３
図版22～図版31 ５区出土遺物
図版32 ３区・５区・７区出土遺物

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

御笠の森遺跡は、1988年に福岡県教育委員会により発掘調査が行なわれて以来、これまで共同住宅建設などに伴い10次にわたる調査が実施され、弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。

今回の調査（第９次調査）に至る経緯については、昨年度刊行された『御笠の森遺跡Ⅰ』に示したとおりであり、県道那珂川宇美線の建設に伴って発掘調査を実施することとなった。この県道那珂川宇美線建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、まず平成13年５月に福岡県那珂土木事務所、本市街路課、本市教育委員会との協議を行い、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を早急に実施することとなった。試掘調査は、用地買収が完了した区域において６月27日から７月３日にかけて実施し、この結果広範囲にわたり遺構･遺物が確認された。これを受けて那珂土木事務所と教育委員会は、早期に発掘調査に着手することで合意し、予算措置の決定を待ち平成13年９月21日に委託契約を締結し、10月１日より本調査を開始した。調査期間中、構造物の撤去等で長期間の中断があったものの、平成16年２月20日に本調査を終了した。

なお、出土遺物の整理･報告書作成については、平成15年度と16年度に分け整理・報告を行うこととなり、平成16年３月には１区から４区までの調査結果を収録した『御笠の森遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第63集）を刊行した。本書『御笠の森遺跡Ⅱ』は５区から７区の調査結果を収録したものである。

２．調査体制

平成13年～平成16年の発掘調査時および整理作業時の体制は、次のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	堀内　貞夫（～平成15年５月）
		古賀　宮太（平成15年５月～）
	教育部長	青木　克正（～平成14年２月）
		鬼塚　春光（平成14年３月～）
	社会教育課長	片岡　　猛（～平成14年３月）
		秋吉　正一（平成14年４月～）
	社会教育係長	舟山　良一
	主査	徳本　洋一（試掘調査担当）
	〃	石木　秀啓
	〃	緒方　一幹（平成16年４月～、庶務担当）
	主任主事	大道　和貴（～平成16年３月、庶務担当）
	主任技師	丸尾　博恵
	〃	林　　潤也（本調査・整理担当）

主任技師	早瀬　賢	（平成16年４月～）
嘱託	元吉　知子	（～平成15年３月）
〃	平島　義孝	（～平成16年３月、本調査・整理担当）
〃	島田　拓	（平成14年４月～15年６月）
〃	上田　恵	（平成14年４月～15年４月）
〃	岸見　泰宏	（平成14年４月～16年３月）
〃	西堂　将夫	（平成15年４月～、整理担当）
〃	一瀬　智	（平成15年12月～）
〃	井上　愛子	（平成16年４月～）
〃	北川　貴洋	（平成16年４月～）

発掘作業員

高木冴子、藤田和子、西田幸子、那波幸子、吉田香織、前田チエ子、三原ひろみ、寺垣みゆき、馬場孝子、田中照子、中垣　親、松山洋子、日野律子、釣屋種利、田浦秀子、山口きく代、溝口　忍、川岸晶子、金沢好子、飯田三治、吉村秀子、松尾純子、末永　勝、安達はるみ、西本福雄、田中悦子、田野和代、岩切ふえ、宮原ゆかり、江上正高（別府大学大学院）

整理作業員

松岡信子、町井裕子、渡辺直美、鬼塚穂子、高群朱美、白井典子、村山律子、橋本悦子、渡部美香、井上理香

なお、今回の発掘調査・報告書作成に関して、福岡県那珂土木事務所には多大なご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。また、下記の方々および諸機関には、発掘調査および遺物整理の過程で様々なご教示・ご協力を頂きました。合わせて感謝申し上げます。

松井　章（奈良文化財研究所）　大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
森本朝子（福岡市埋蔵文化財調査指導員）　横田義章（元九州歴史資料館）
狭川真一（元興寺文化財研究所）　藤田由仁（日本独楽博物館）
赤司岩雄（大野城市史跡対策委員会会長）　城野一郎（㈱ 埋蔵文化財サポートシステム）
比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）　中村昇平（春日市教育委員会）
山村信榮・中島恒次郎・井上信正・下川可容子（太宰府市教育委員会）
福岡市埋蔵文化財センター　太宰府市文化ふれあい館

３．調査の経過

調査の経過については、『御笠の森遺跡Ⅰ』に記述しているので、ご参照いただきたい。

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

御笠の森遺跡は、大野城市山田２・３丁目に所在する。御笠川西岸の沖積平野上に立地し、遺構面の標高は13.8～14.1ｍを測る。近世集落の廃絶後、長らく水田地帯として利用（第２・５図、写真１）され、戦後になって急激に宅地化が進展した地域である。

遺跡は、市指定文化財「御笠の森」の周囲に広がっており、今回の調査地点の小字名は、「御笠森」を主体に「木ノ下」「境」にまたがる（第3図）。また小字名に残らないが、以前この辺りを「古屋敷」と呼称していたといい、遺跡の存在を強くうかがわせている。

２．歴史的環境

これまでの調査により、御笠の森遺跡では、弥生時代から江戸時代までの遺物・遺構が確認されている。中でも、平安時代から江戸時代前期には質・量ともに充実した資料を得ることができており、この時代を中心に周辺遺跡を概観してみたい。（第１図）

まず奈良・平安期の遺跡としては、人面墨書土器を出土した仲島遺跡（7）や井相田Ｃ遺跡（8）、奈良時代の集落遺跡である南八幡遺跡（12）、麦野Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡（9・10・11）、集落と官衙的遺構群が検出された雑餉隈遺跡（13）、平安時代の集落である御供田遺跡（17）、８世紀中頃～後半の火葬墓を出土した石勺遺跡（15）などが挙げられる。なお、当該期の官道は、水城西門および東門を通る２ルートが推定復元されており、そのうち東門ルートは御笠の森遺跡を横断するように想定されている（註１）。

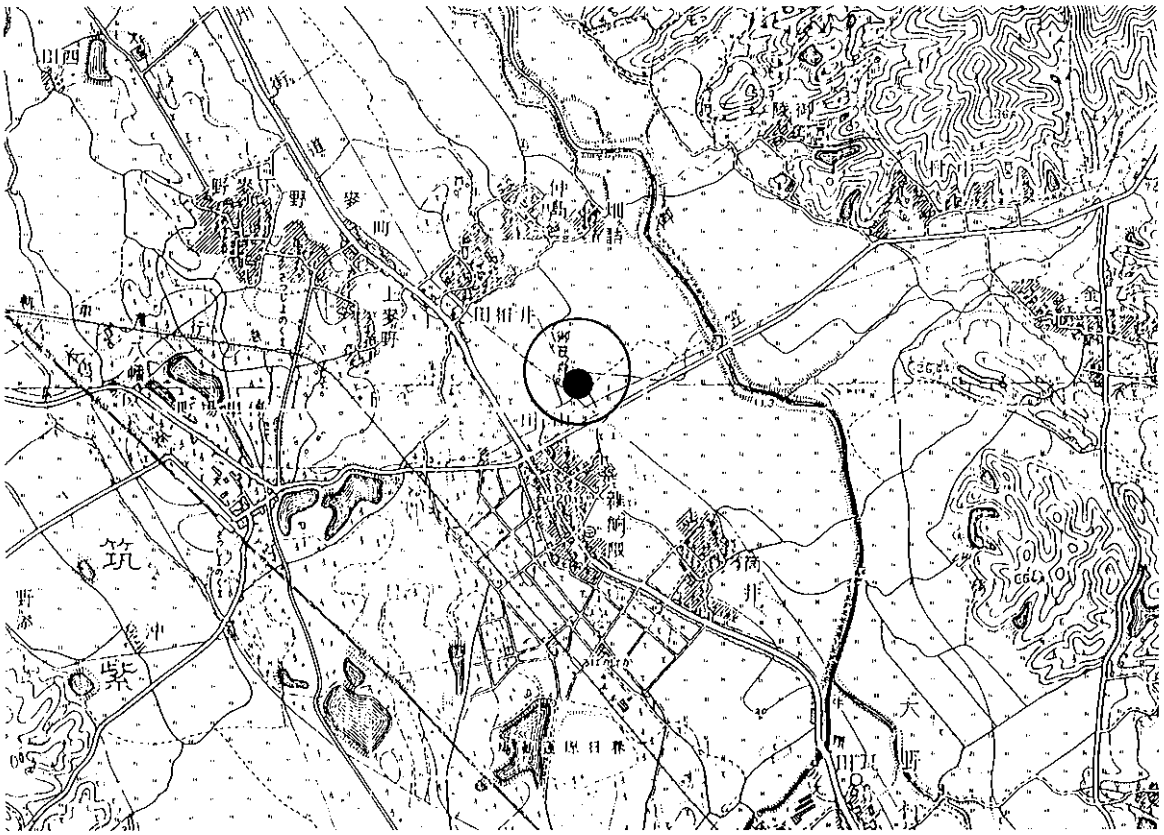
中世の遺跡では、集落遺跡としては13世紀代を中心とした薬師の森遺跡（6）、15～16世紀の麦野Ａ遺跡（9）が挙げられ、墓地遺跡としては、森園遺跡（12世紀）(5)で土坑墓３基、中・西コモリ遺跡（12～13世紀）（註２）で木棺墓１基、塚口遺跡（10～13世紀）(3)で土坑墓・木棺墓５基が検出されている。15世紀の墨書木札類を多量に出土した井相田Ｃ遺跡も注目される。また、やや離れるが、北西約7.1kmには中近世の都市遺跡である博多遺跡群、北西約2.7kmに14～16世紀の館跡である諸岡遺跡、南西約4.0kmに12～18世紀の館跡・集落跡である上白水館跡が位置し、中世集落の構造を比較検討するうえで興味深い。なお、戦国期の山城では、唐山城が北東に約2.5km、岩屋城が東に約４km、不動城が南へ約５kmに位置する。

近世の遺跡としては、後原遺跡（16）の調査成果が特筆される。この遺跡は近世白木原村の一集落「本村」に相当することが知られ、21次にわたる調査の結果、近世村落の景観を復元する上で興味深い成果を得ている。また、本遺跡の近くでは、雑餉隈遺跡（14）（註３）でVOC銘の染付皿をはじめ近世後半期の遺構遺物が出土している。なお当時の街道は、日田街道が遺跡の東側を通っており、何らかの関連も想定できよう。

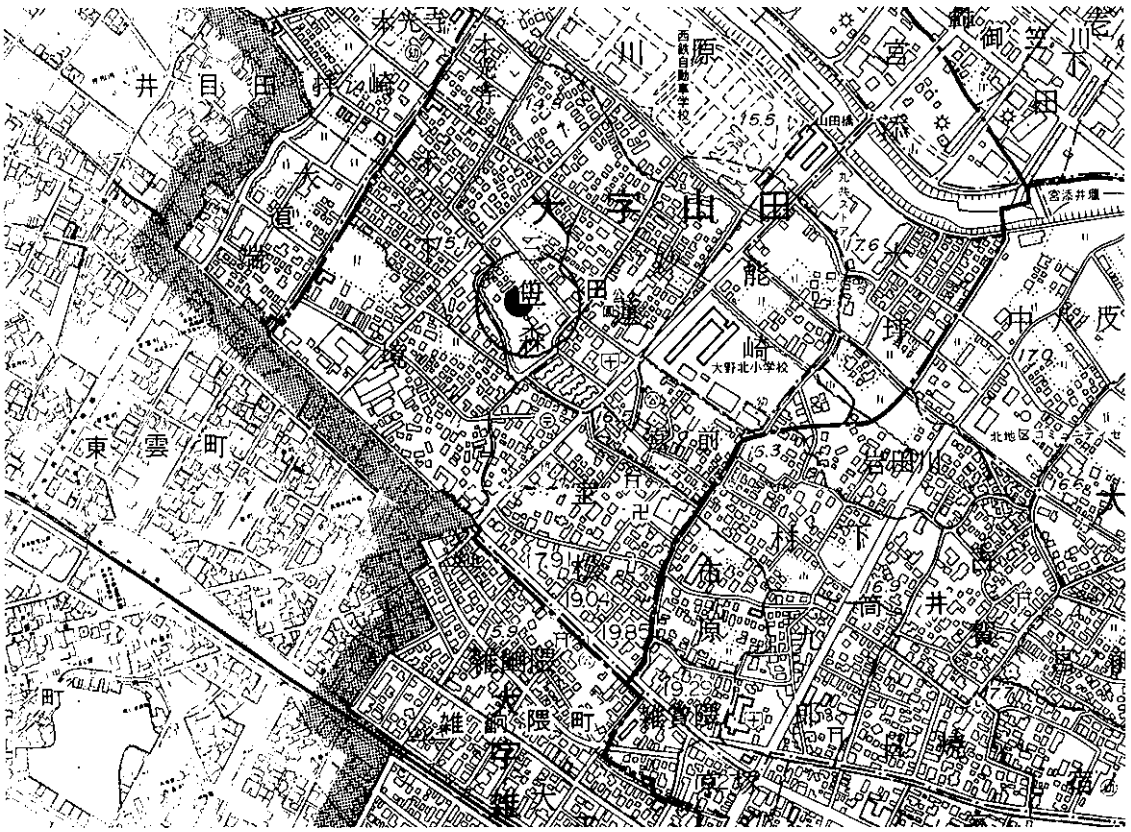


1．**御笠の森遺跡**　2．持田ヶ浦古墳群C群　3．塚口遺跡　4．森園遺跡　5．中・寺尾遺跡　6．薬師の森遺跡　7．仲島遺跡　8．井相田C遺跡　9．麦野A遺跡　10．麦野B遺跡　11．麦野C遺跡　12．南八幡遺跡　13．雑餉隈遺跡（福岡市）　14．雑餉隈遺跡（大野城市）　15．石勺遺跡　16．後原遺跡　17．御供田遺跡　18．先ノ原遺跡　19．春日公園内遺跡　20．九州大学構内遺跡　21．池ノ上遺跡　22．谷川遺跡　23．水城跡

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　遺跡周辺旧地図（大正15年作成）（1/25,000）※ドットは「御笠の森」



第３図　遺跡周辺旧字図（1/10,000）※ドットは「御笠の森」

3．これまでの調査

御笠の森遺跡１～８次調査の一覧は第１表、調査地点は第4図のとおりである。

名　称	調査時名称	調査地番	調査期間	調査面積	内　容	備　考
御笠ノ森	御笠ノ森遺跡	山田２丁目 235-1	1988.4	552㎡	掘建柱建物３棟 （古代？）	県教委調査 県報告88集（註４）
欠番						
御笠の森遺跡 第３次調査	御笠の森遺跡	山田２丁目 227－１	1989.9～10	300㎡	ピット・土坑多数（平安・鎌倉）、溝（江戸）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第４次調査	御笠の森遺跡	山田２丁目 227－２	1990.6～7	529㎡	土坑（鎌倉） 溝（江戸）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第５次調査	御笠の森遺跡	山田２丁目 484－3･5	1991.4	238㎡	掘建柱１棟（時期不明）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第６次調査	御笠の森遺跡	山田２丁目 505－1･3	1993.11	150㎡	溝・土坑（中世？）	市教委調査 未報告
川原遺跡 (遺跡名変更)	御笠の森遺跡 第７次調査	山田１丁目 520－１	1998.9～11	359㎡	溝･土坑（弥生・古墳）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第８次調査	御笠の森遺跡 第８次調査	山田２丁目 232－2･3	1999.4～ 2000.1	1767㎡	竪穴住居（奈良）、 土坑･ピット多量、溝 （江戸）屈曲	市教委調査 未報告（註５）
御笠の森遺跡 第９次調査	御笠の森遺跡 第９次調査	山田2・3 丁目	2001.10～ 2004.2	5152㎡	掘立柱建物、井戸跡 土坑、溝跡（弥生～江戸）	市教委調査 市報告63集（註６） **本報告**
御笠の森遺跡 第10次調査	御笠の森遺跡 第10次調査	山田２丁目 228-1	2002.11～12	98㎡	掘立柱建物、井戸跡 土坑	市教委調査 未報告

第１表　御笠の森遺跡調査一覧

註

（註１）山村信榮氏の推定復元ルートによれば、御笠の森遺跡９次調査６区と７区の間を横断することになる。当該地については、試掘調査の結果、遺構を確認することができなかった。

山村信榮 1993 「太宰府周辺の古代官道」『九州考古学 第68号』 九州考古学会

（註２）森園遺跡の一角に位置する。　副島邦弘 1978『中・西コモリ遺跡』大野城市教育委員会

（註３）近世雑餉隈村は日田街道に面し、宿場（間宿）として栄えていたことが知られている。

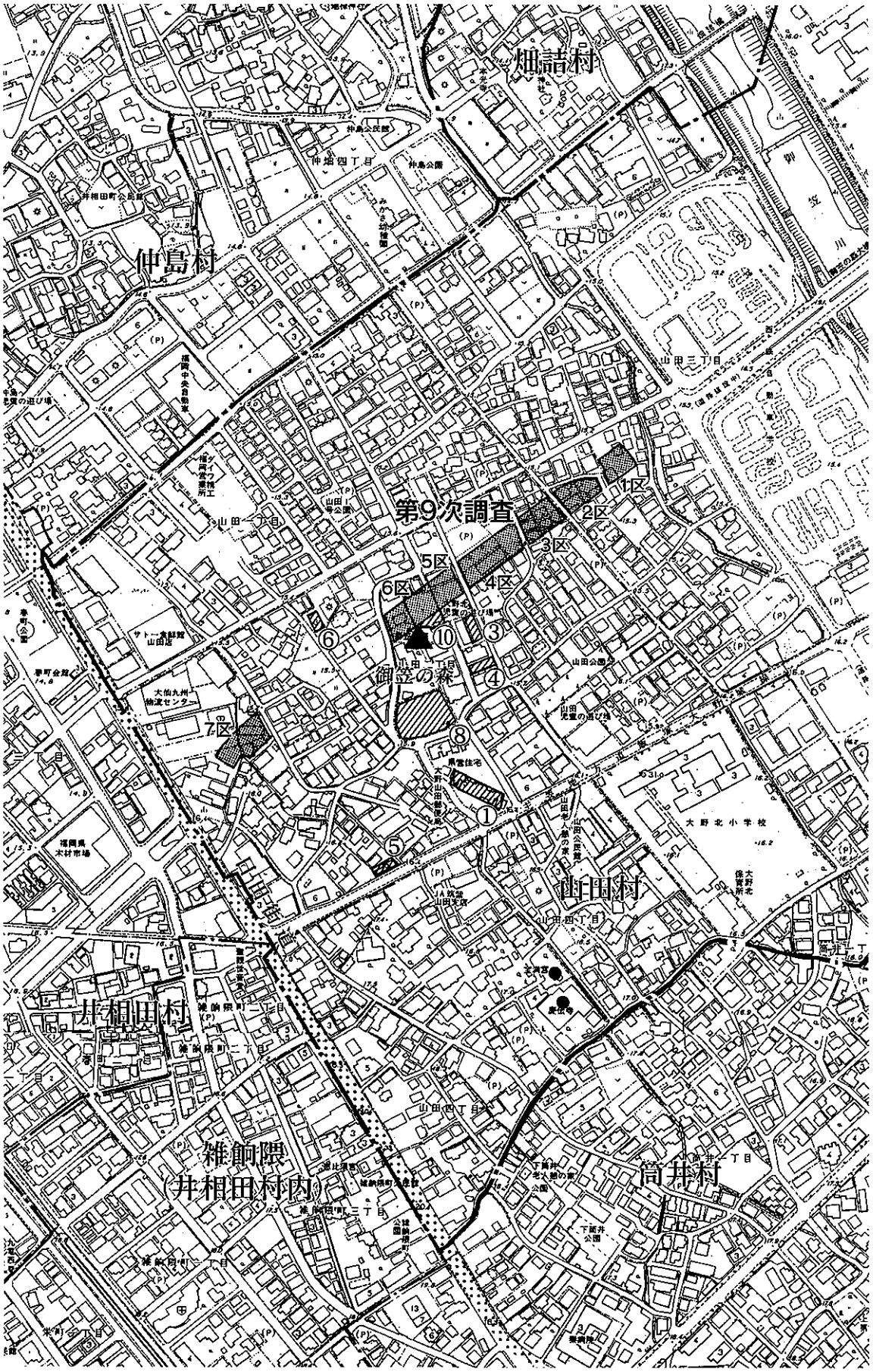
（註４）浜田信也　1989　『御笠ノ森遺跡』　福岡県教育委員会

（註５）大野城市教育委員会　2001　『大野城市の文化財 第33集』　大野城市教育委員会（88集）

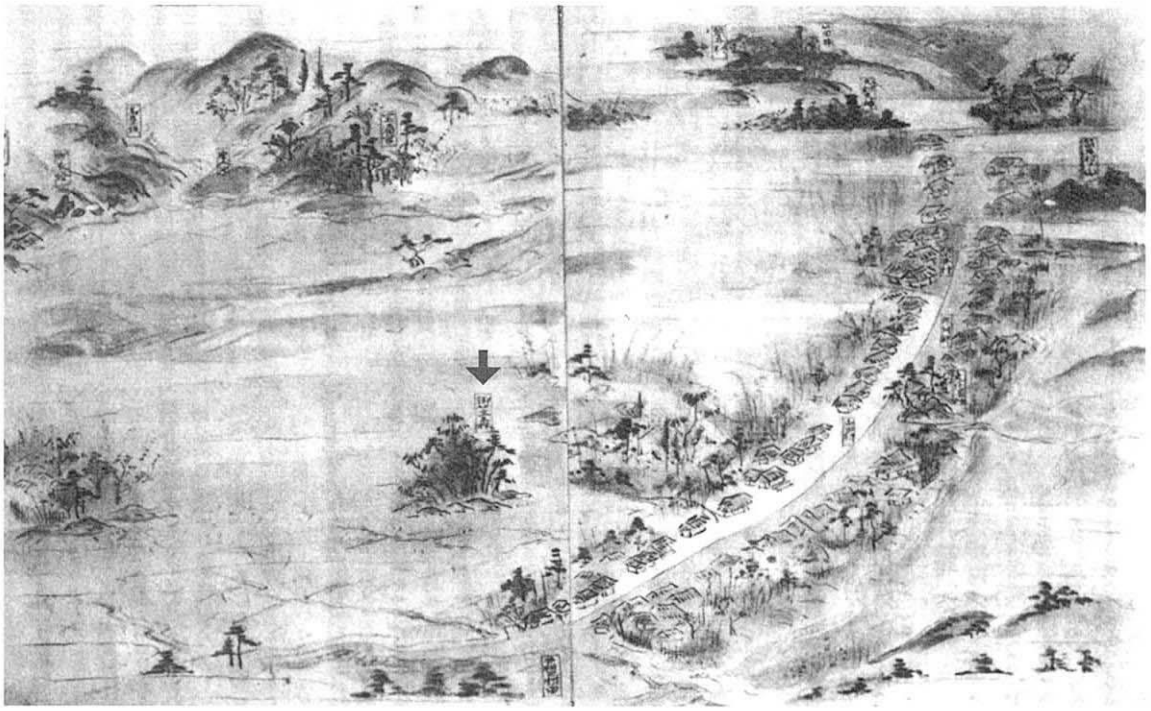
石木秀啓　2001　「御笠の森遺跡」『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報-平成11年度-』

福岡県教育委員会

（註６）林潤也　2004　『御笠の森遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会（63集）



第４図　御笠の森遺跡の調査地点と旧村境（1/5,000）（丸囲い内は調査次数）



第５図　『筑前国続風土記付録』にみる御笠の森周辺



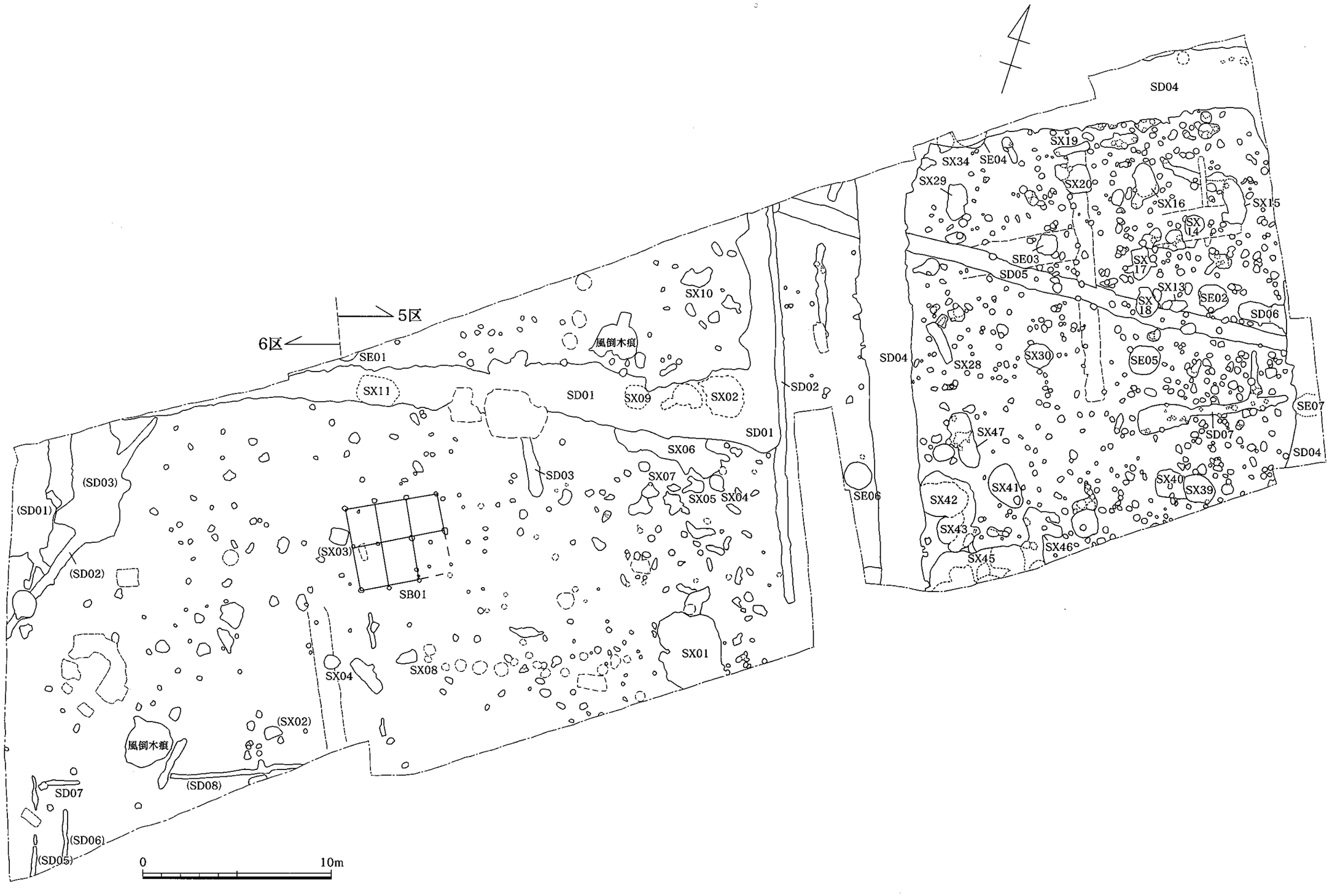
本文図版(1)
昭和15年頃の御笠の森
(赤司岩雄氏撮影)



本文図版(2)
現在の御笠の森



第6図　5・6区遺構配置図（1/200）



第７図　５・６区遺構切り合い図（1/200）

Ⅲ．調査の結果

１．５区の調査

市指定文化財「御笠の森」の北側にあたる。構造物の撤去の問題などから、３度に分け調査をおこなった。調査面積は1181㎡。検出面の標高は14.2ｍ～14.4ｍを測り、調査区内での明確な高低差はない。また南西側に接する６区とは、調査が完了した段階で遮るものがなく、合わせて遺構配置図等（第６・７図）を示した。掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが確認された。調査区北東側（４区側）では遺構密度が高く、南西側（６区側）に向かうにつれ、遺構密度は低くなる。

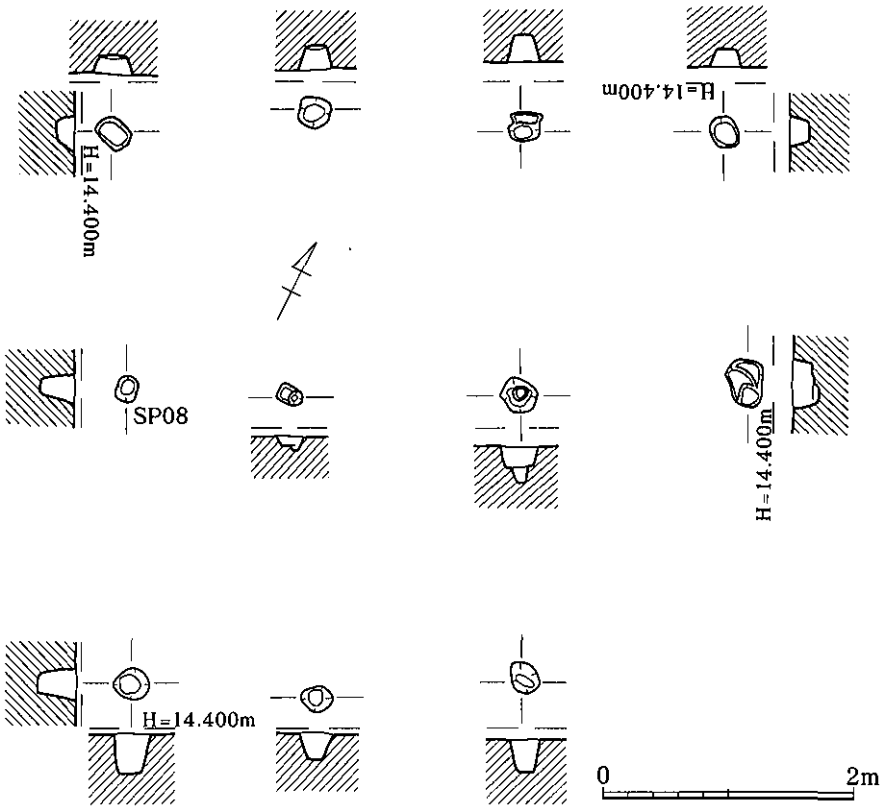
（１）掘立柱建物跡

本調査地区では、北東側を中心に多数のピットが検出されたが、確認できた掘立柱建物は、１棟のみである。当然、確認できていない掘立柱建物の存在も予想される。

SB01（第８図）　調査区南西側から６区にかけての遺構密度の低い部分で検出した。２間×３間の東西棟の総柱建物である。遺構配置図を見てわかるように、建物南東隅でも、柱穴状の痕跡が確認されたが、その埋土は周辺に多数存在する撹乱の埋土と同一であることから、建物に伴わない痕跡であると判断し、図示していない。

規模は桁行約4.4m、梁行約4.9m、身舎面積約21.6㎡になる。柱間は桁行2.1～2.4m、梁行1.4～1.7mを測る。柱穴は平面形が円形あるいは楕円形を呈し、長径20～38cm、深さ12～32cmで総じて小形といえる。２段掘りになる柱穴も３基確認される。

遺物は、黒色土器と思われる土器片が出土したが、図化に堪えることができない。



第８図　５区SB01実測図（1/60）

（2）井戸跡

７基を確認することができた。

SE01（第９図）　調査区東隅位置し、遺構の大部分は調査区外に続いている。現状での最大径は1.05m程で、本来、約1.2m前後の円形あるいは楕円形プランを呈していたものと考えられる。現状での深さは約1.7mを測る。壁面は比較的垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積によるもので、下部には粘質土が堆積していた。

遺物（第10図）　１は瓦器椀。体部に稜を持つ。これ以外に白磁片が１点出土した。

SE02（第９図）　調査区北東側に位置し、複数のピットに切られる。平面形は約1.65m×1.5mの楕円形を呈し、深さ約1.5mを測る。底部から約0.5m上位にテラスが形成され、断面形は、上端に向かってやや開く形状をなす。埋土は大きく２層に分層でき、上層は粗砂を含む黒褐色土、下層は黒色粘質土であった。

遺物（第10図）　２～５は土師器小皿。いずれも底部ヘラ切り。口径10.0cm前後に集中する。６は丸底坏。コテ当て痕らしき痕跡が残る。７・８は瓦器椀。７は直線的に開き、８は内湾しながら立ち上がる。９･10は白磁椀。９は太宰府分類Ⅳ類に相当する。10は瓦玉に転用したものか。

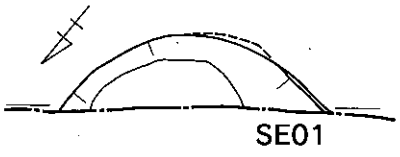
SE03（第９図）　調査区北東側、SE02の西側に位置する。平面形は約1.1mの円形を呈し、深さ約1.2mを測る。遺構中位より下部の壁面は、使用時の湧水によるものか、大きくオーバーハングしている。埋土は、上層に暗茶灰色土、下層に多量に砂を含む黒色粘質土が堆積していた。遺物の取り上げの際に、砂層としたものは、下層に相当する。

遺物（第10図）　11は土師器小皿。復元径はやや確証を欠く。12～14は瓦器椀。12は高台高が比較的高く、作りもしっかりしている。内底面に重ね焼きの痕跡が確認できる。13は遺存状態が極めて良く、外面は高台付近までミガキ、内面は内底部を磨いた後、体部を５分割して磨いた状況が観察できる。これ以外には、青磁片、白磁片、焼土塊などが出土した。

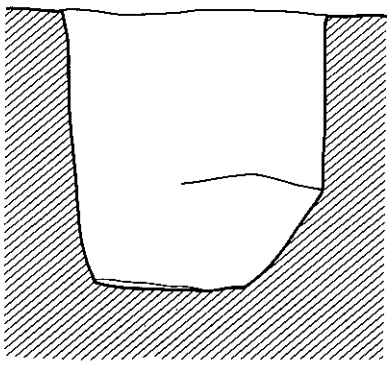
SE04（第９図）　調査区北側に位置し、約半分が調査区外に続く。当初はSX33として調査を行ったが、掘り進めた結果、井戸と判断した。SD04に切られる。平面形は現状で、直径約1.5mの円形あるいは楕円形を呈すると想定され、深さは約1.2mを測る。埋土は12層（土層図４～15層）に分離でき、底面付近（11～14層）には粘質土が堆積していた。遺物は土層図でいう７層以上を上層、８層以下を下層として取り上げている。

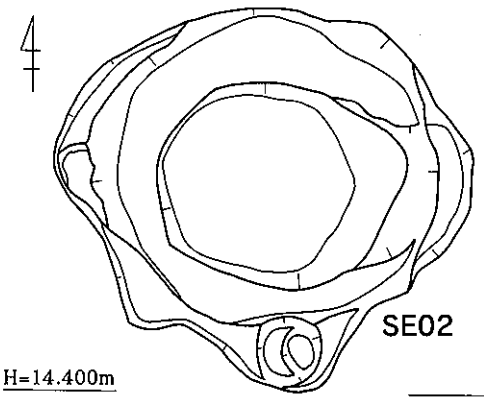
遺物（第10図）　15・16は土師器小皿。15は底部糸切り、16はヘラ切りである。17～19は瓦器椀。17は図化していないが内底部にミガキが観察される。18はやや粗いミガキが施され、体部下半には板状圧痕も微かに観察できる。20は土師器坏。コテ当て痕が残る。21・22は白磁椀。21は太宰府分類Ⅳ類、22は同分類Ⅱ類あるいはⅣ類であろう。これら以外に、滑石片などが出土した。

SE05（第11図）　調査区東側、SE02の南西3.5mに位置する。平面形は約1.55mの円形を呈し、深さ1.24mを測る。壁面は比較的垂直に立ち上がる。埋土は、上層に多量に橙色土・砂質土を含む黒褐色土、下層に細砂を含む黒灰色粘質土が堆積していた。なお、下層からは、腐食した板状の木製品片が出土しており、井筒の部材であった可能性がある。

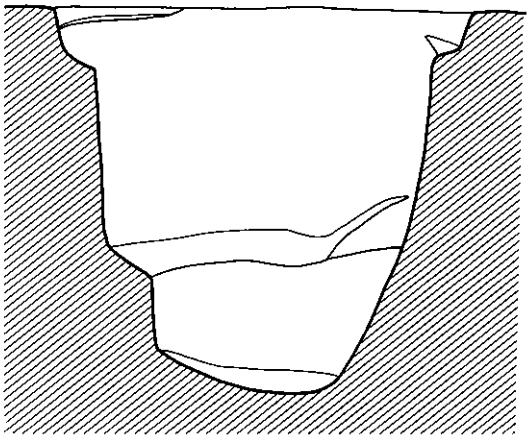


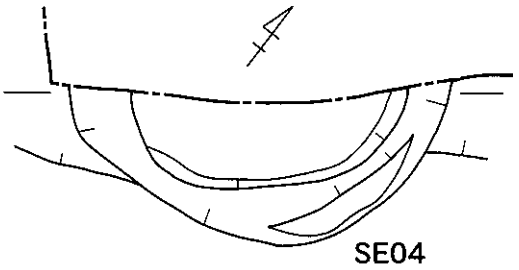
H=14.400m



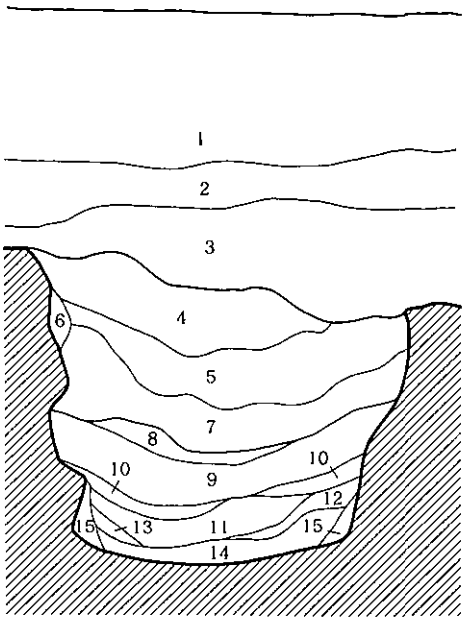


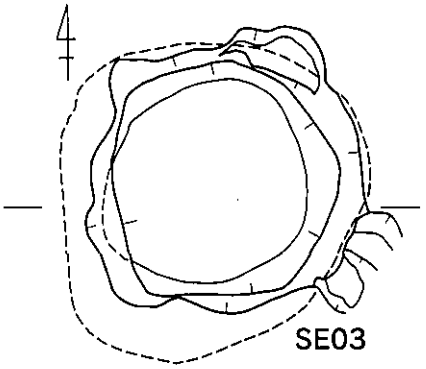
H=14.400m



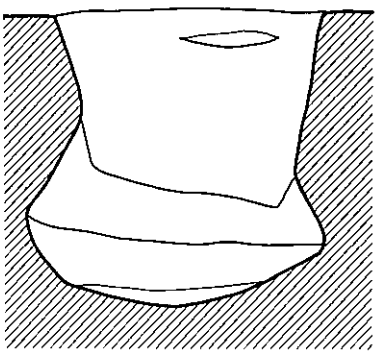


H=14.300m





H=14.200m



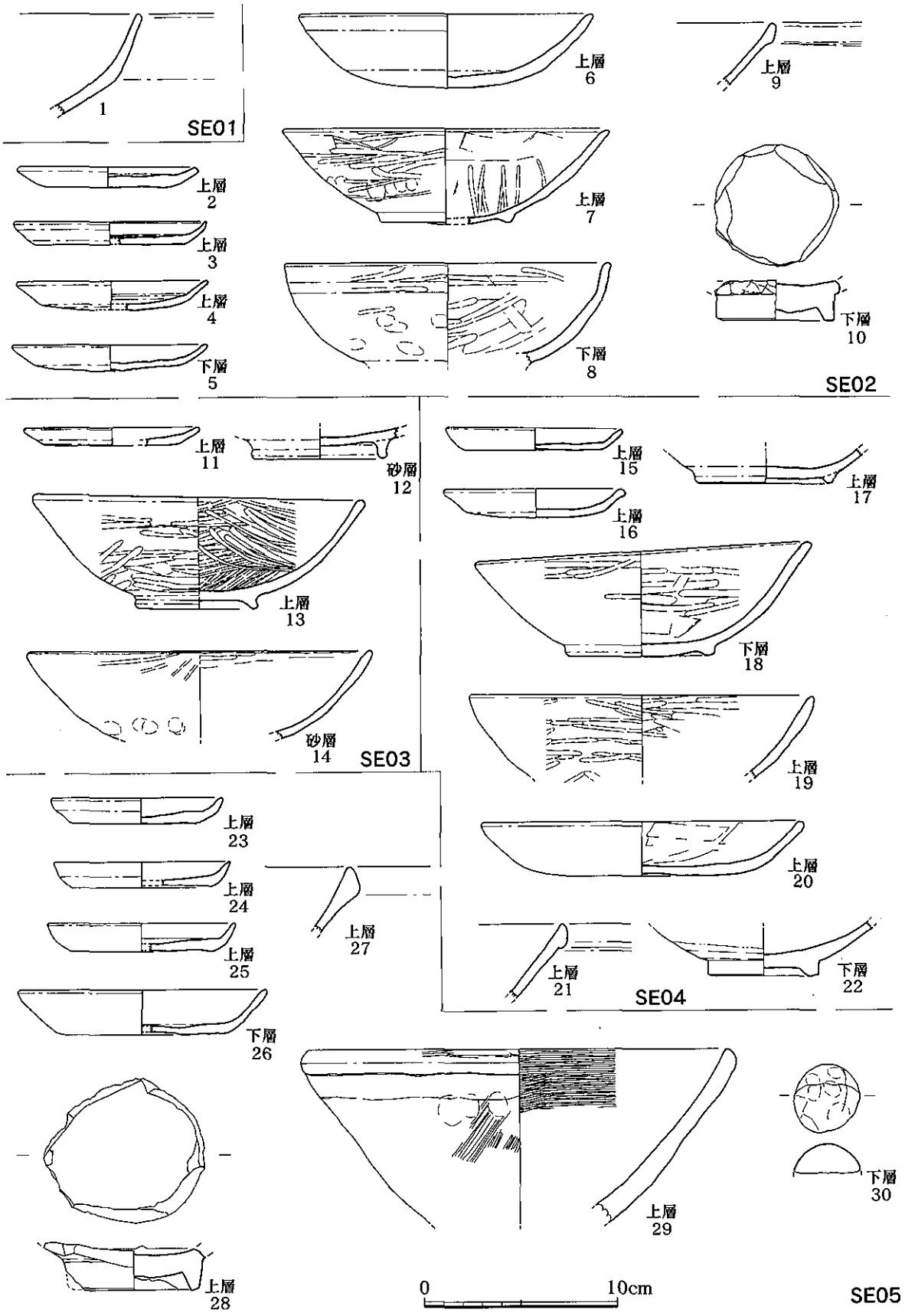
SE04

1. 明黄褐色土 (10YR7/6) 真砂土、現代整地層
2. 褐灰色土 (10YR5/1) やや粘質、耕作土
3. 黒褐色土 (10YR3/1) SD04 埋土
4. 黒色土 (7.5YR2/1) しまりあり
5. 黒色土 (7.5YR1.7/1) にぶい黄褐色土ブロックやや多量含む。しまりあり
6. にぶい黄褐色土 (10YR7/3) しまりあり。地山崩落土
7. 黒色土 (10YR2/1) にぶい黄褐色土・黄橙色土ブロック多量含む。しまりあり
8. 褐灰色土 (10YR5/1) 灰白色土ブロック多量含む。ややしまりあり
9. 暗灰～黒色粘質土 (N3/～2/) 黄橙色土・灰白色土ブロック少量含む。しまりなし
10. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) ややしまりあり
11. 黒色粘質土 (N2/) 黄橙色土・灰白色土ブロック多量含む。しまりなし
12. 黄灰色土 (2.5Y5/1) 細砂少量含む。しまりなし
13. 明黄褐色粘質土 (10YR7/6) 細砂少量含む。しまりなし
14. 暗灰色粘質土 (N3/) 黄橙色土・灰白色土ブロック少量含む
15. にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 砂質土。灰白色粘土少量含む。

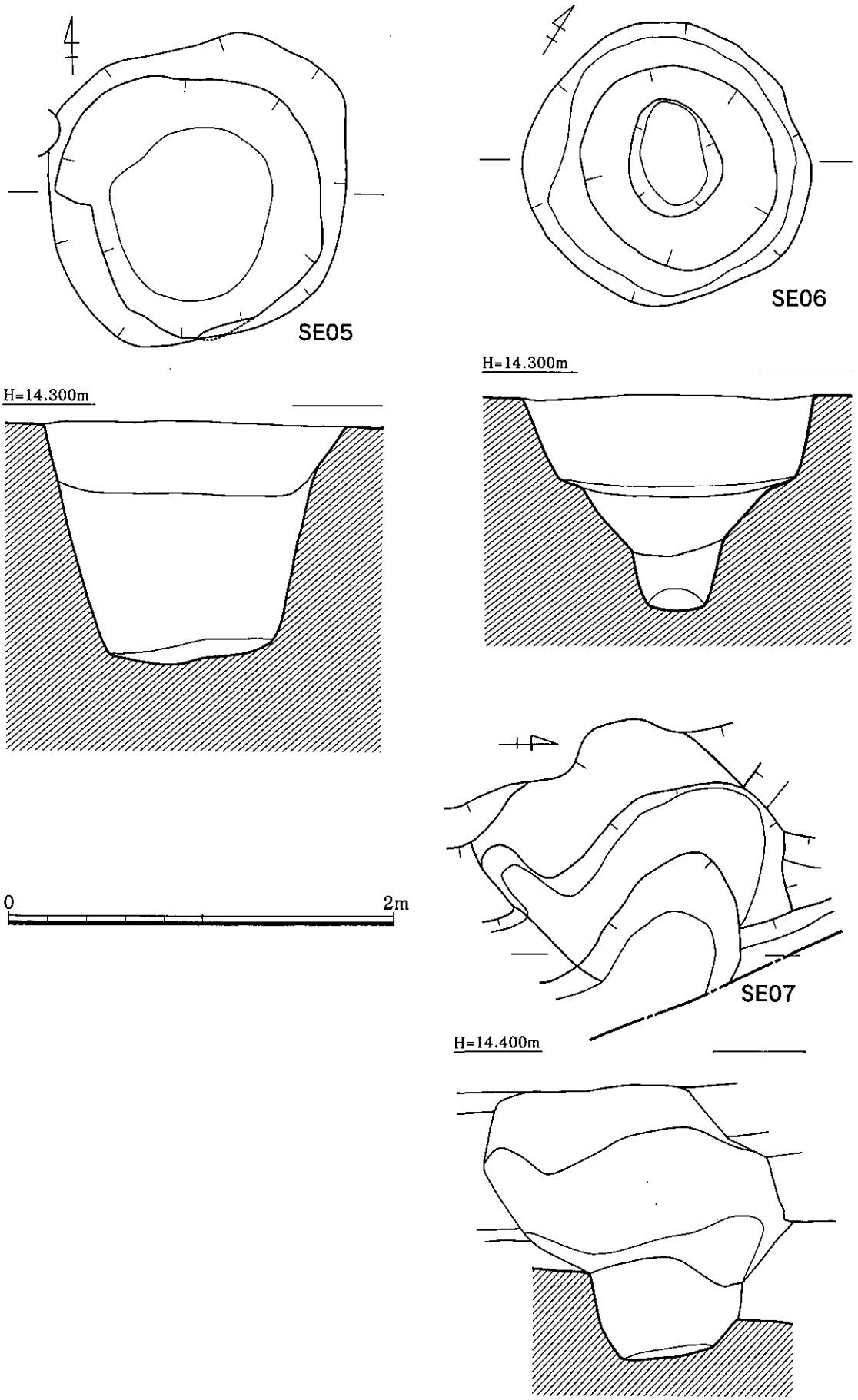
※4～7層：上層、8層～15層：下層として遺物取上げ

0 2m

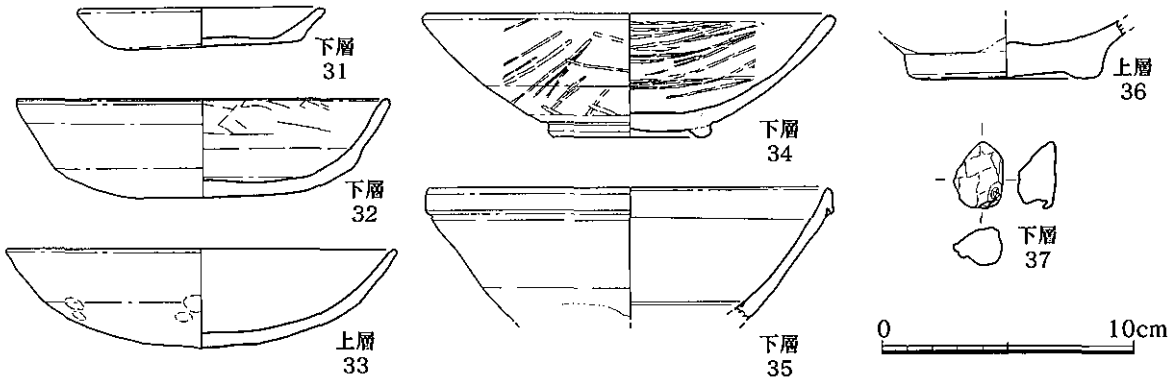
第９図　５区SE01～04実測図（1/30）



第10図　5区SE01～05遺物実測図（1/3）



第11図　5区SE05～07実測図（1/30）



第12図　5区SE06遺物実測図（1/3）

遺物（第10図）　23～25は土師器小皿。26は土師器坏。小皿・坏とも底部糸切り。27は須恵質のこね鉢。東播系。28は白磁椀。太宰府分類Ⅴ類に相当するものか。瓦玉に転用された可能性がある。29は瓦質の鉢。内面体部は磨耗しており、こね鉢として利用した痕跡か。30は球状土製品。約半分を欠く。割れ口の状況から、接合痕であった可能性がある。やや歪んだ細沈線を直交して施しているように観察できるが、人為的であるという確証に欠しい。これら以外に、同安窯系青磁片、施釉陶器片、須恵器片などが出土した。

SE06（第11図）　調査区のほぼ中央に位置し、SD04にかすかに切られる。平面形は約1.5mの円形を呈し、深さ約1.1mを測る。三段掘り状になり、底面積は狭く、断面形は漏斗形に近い。埋土は、上層に橙色土ブロックを多量に含む黒褐色土、下層に細砂を含む暗灰色粘質土が堆積していた。下層からは、土器類のほかに腐食した木片が少量出土した。

遺物（第12図）　31は土師器小皿。外底面の切り離し痕跡がナデ消されており、ヘラ切り・糸切りの判断ができない。32・33は土師器丸底坏。小皿・丸底坏とも底部ヘラ切り。34は瓦器椀。内外面に粗雑な斜め方向のミガキが確認できる。35･36は白磁椀。太宰府分類Ⅳ類か。37は鉄滓。これら以外に、滑石片などが出土した。

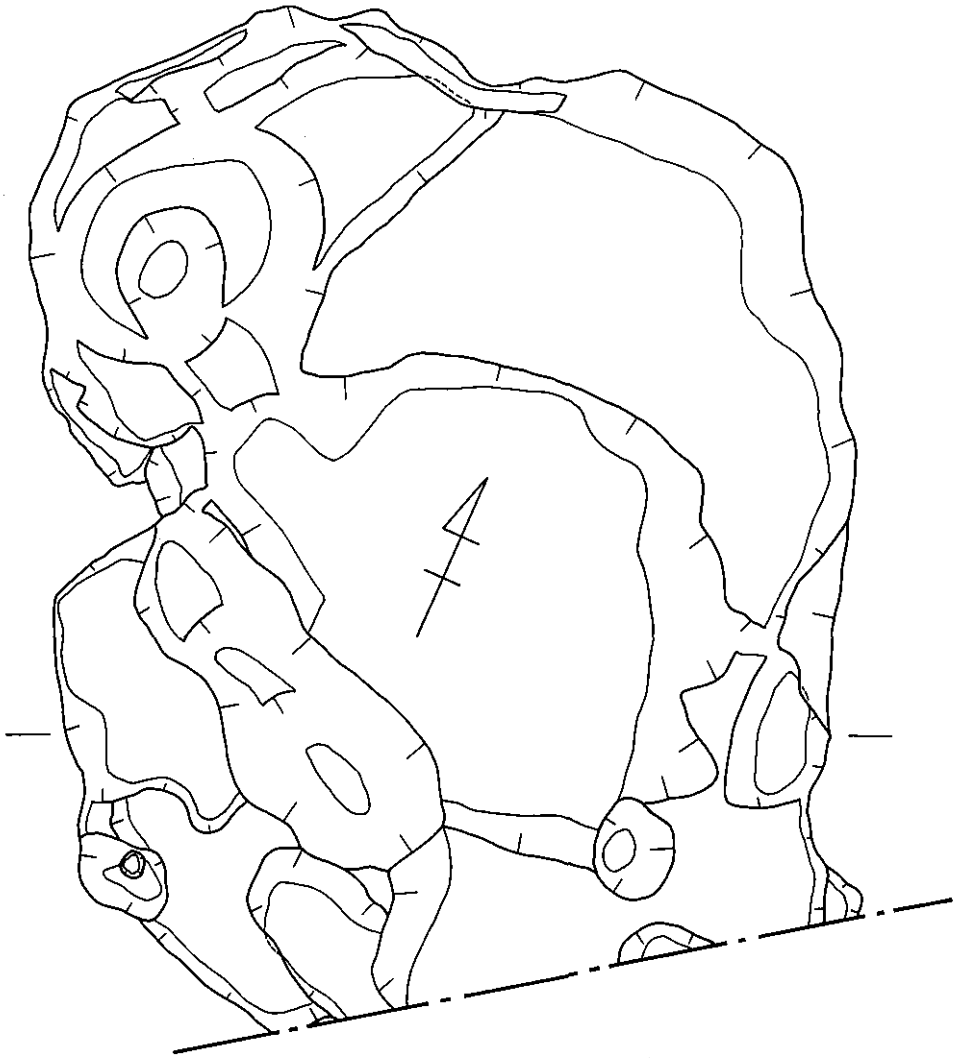
SE07（第11図）　調査区北東壁に接して位置し、ほぼ全てをSD04に切られる。当初その存在に気づかず、SD04の完掘間際になって確認した。調査区北東壁の土層観察や偶然設定していたSD04用の土層ベルトの状況から、SD04との先後関係に間違いはない。平面形態は明らかにできないが、直径1.5m以上の規模で、深さ1.42mを測る。最下層の埋土は、砂層を帯状に含む黒褐色粘質土であった。

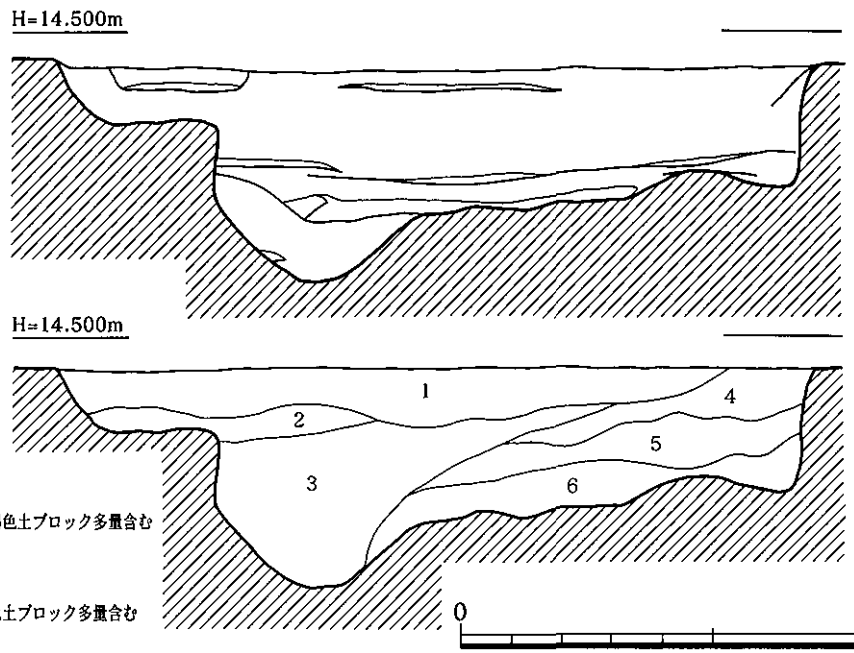
遺物は、図化できない土師質土器が1点出土したのみであった。

（3）土坑

SX01（第13図）　調査区南側に位置し、調査区外（第10次調査地：未報告）に続く。現状で4.0m（10次調査の結果を合わせると4.7m）×3.2mの楕円形を呈し、最深部の深さは82cmを測る。平面・断面の形状、土層観察の結果から幾度かの掘り返し、あるいは複数の遺構が切りあっている可能性がある。

遺物（第16図）　38～40は白磁椀。38は太宰府分類Ⅴ類、39は太宰府分類Ⅱ類あるいはⅣ類。40は内面に櫛目文を施す。41は白磁皿。太宰府分類Ⅵ類。42は中国産陶器壷。太宰府分類Ⅰ類。43は中国産陶器鉢。太宰府分類Ⅰ類。44は中国産陶器甕。45は東播系こね鉢。復元径は不確かで





SX01

1. 黒褐色土 (7.5YR2/2)
2. 黒褐色土 (10YR3/1) 黄橙色・灰黄褐色土ブロック多量含む
3. 黒褐色土 (7.5YR3/1)
4. 黒褐色土 (10YR2/2)
5. 黒色土 (7.5YR2/1)
6. 黒色土 (10YR2/1) 黄橙色・灰黄褐色土ブロック多量含む

第13図　5区SX01実測図（1/30）

ある。46は平瓦。凸面に格子目叩き、凹面に布目圧痕を残す。

これら以外に、土師器、瓦器、同安窯系青磁、滑石製石鍋などが出土した。

SX02（第14図）　調査区ほぼ中央部に位置する。SD01の底面で確認された。4.86m×3.0mの不整な楕円形を呈し、深さ42cmを測る。底面は凹レンズ状に窪み、壁面の立ち上がりは緩やかである。

遺物（第16図）　47は白磁皿。高台底部から高台内は露胎。48は鉛玉。火縄銃の弾丸であろう。平面図上部左の欠損は発掘調査によるもので、上部中央の切り込み状の痕跡は当時のものと考えられる。また要因は不明であるが、鉄分（錆）の付着が観察できる。

これら以外には、土師器、瓦器などが出土した。

SX05（第14図）　調査区ほぼ中央、SX02の南側に位置する。1.6m×1.3mの不整形を呈し、深さ11cmを測る。

遺物は、土師器片が出土したが、図化に堪えることができない。

SX06（第15図）　調査区ほぼ中央に位置し、SD01の南側上端に切られる。現状で5.92m×2.0m以上の不整形を呈し、深さ10cmを測る。底面にはピット状の窪みが多数検出したが、総じて浅い。

人為的な痕跡でない可能性が高い。

遺物（第16図）　49は土師器小皿。これ以外には、白磁、同安窯系青磁などが出土した。

SX07（第14図）　調査区やや西側、SX05の南西1.5mに位置する。1.24m×1.1mの不整形を呈し、底面は西側が深い。最深部の深さは15cmを測る。

遺物（第16図）　50は白磁椀。口縁部外面は沈線状にやや窪む。遺物はこの一点のみであった。

SX08（第14図）　調査区南側に位置する。1.52m×0.86mの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。一部にテラスを持つものの、壁面の立ち上がりは急で、底面は比較的平坦である。出土状況を図化していないが、ほぼ完形で出土した瓦器椀は底面から浮いた状態で出土した。

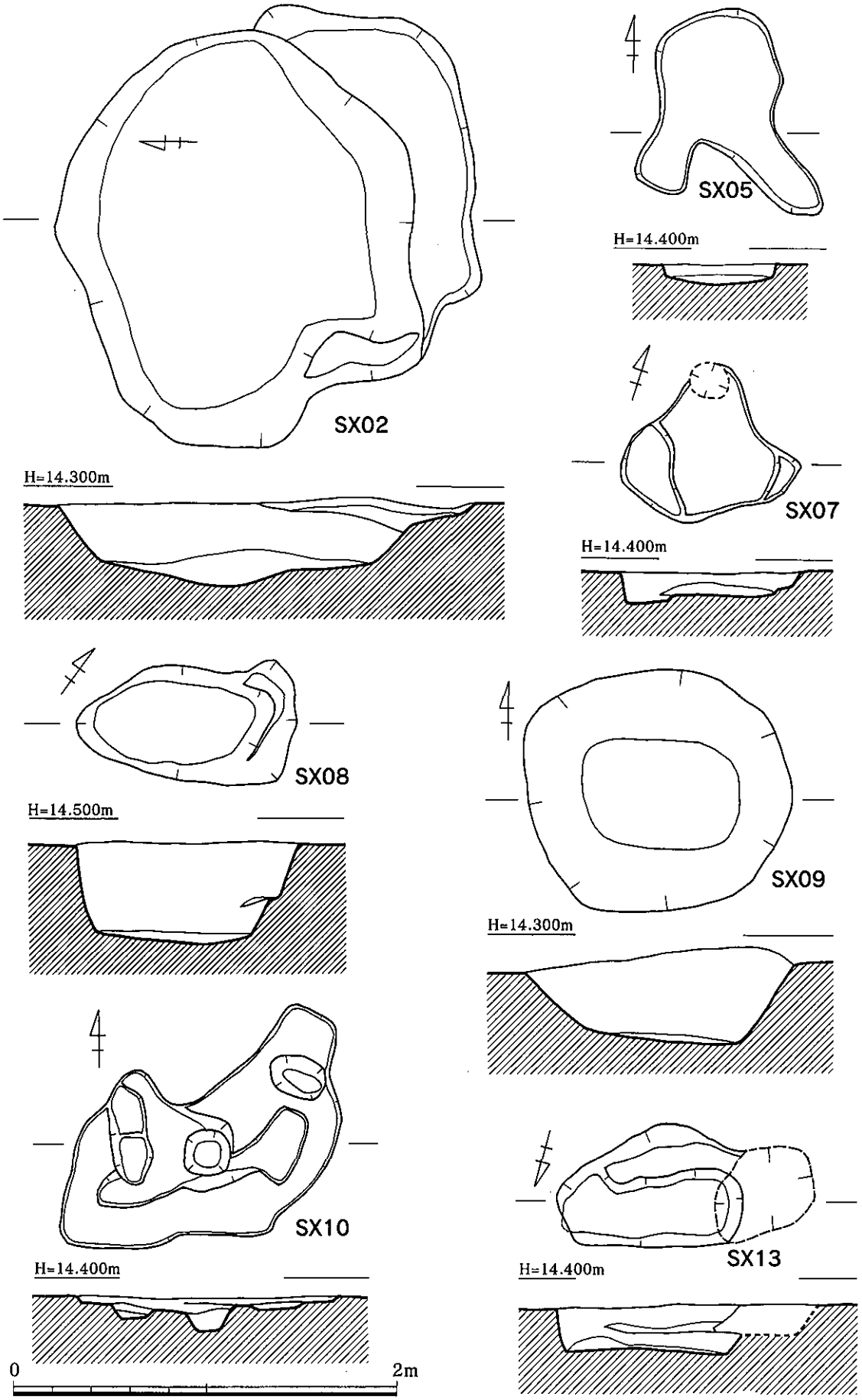
遺物（第16図）　51～54は瓦器椀。このうち51～53はほぼ完形で出土した。51は焼成良好で、やや雑なミガキが外面体部下位まで施される。52は一部ミガキが確認されるが、調整は雑で体部中位まで板状圧痕が微かに残る。53は器面の風化により、ほとんど調整が確認できない。
これ以外には土師器片などが出土した。

SX09（第14図）　調査区やや西側、SX02の西側約3.0mに位置する。SD01の底面で確認された。1.36×1.25mの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。底面は東側に向かい深くなる。壁面は西壁の方が緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

SX10（第14図）　調査区やや北東側に位置する。約1.35m×1.18mの不整形を呈し、深さ7cmを測る。底面には複数のピットが認められるが、別遺構の可能性が高い。

遺物は、白磁椀（太宰府分類Ⅳ類）、土師器、瓦器が出土した。

SX11（第17図）　調査区北西隅近くに位置し、SD01の底面で検出された。2.16m×1.66mの楕円形を呈し、深さ128cmを測る。壁面はやや緩やかに立ち上がる。埋土は、砂を多量に含む暗灰色粘質土であった。SD01との土層の連続性は確認できなかったが、埋土に滞水の痕跡があること、軸方向がSD01と同一であること、当遺跡の他調査区（1区・4区）でも類似の遺構がある



第14図　5区SX02・05・07～10・13実測図（1/30）

ことから、水溜のような溝に付随した遺構と考えたい。

遺物（第16図）　55は東播系こね鉢。56は青磁盤。口縁部に稜花を巡らし、内底面に片彫りで草花を描く。釉は高台内を除き、全体的に厚く施される。

これら以外に、土師器、瓦器などが出土した。

SX13（第14図）　調査区北東側、SE02の西側に位置する。長軸の一端（西側）をピットに切られ欠くが、現状で0.96×0.64mの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。南側にテラスを持ち、底面は比較的平坦である。

遺物（第16図）　57は白磁椀。太宰府分類Ⅳ類。これ以外に、土師器片が出土した。

SX14（第15図）　調査区北東側、SX15とSX17の中間に位置する。1.15m×1.05mの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。テラスを有するが、壁面から底面は、総じて断面凹レンズ状になる。

遺物（第16図）　58は染付椀。産地は判然としない。これ以外に、白磁、瓦器、土師器、黒曜石製剥片などが出土した。

SX15（第18図）　調査区北東側、SX15とSX17の中間に位置する。2.45m×1.05mの歪な楕円形を呈し、深さ40cmを測る。南壁の立ち上がりは比較的急であるが、他の壁面は総じて緩やかに立ち上がる。埋土中部から上部にかけて（１・２層の境付近）、多量の遺物が面的に出土した。遺物は供膳具（土師器小皿・坏）が圧倒的に主体であるが、土師器小皿の上に置かれるように鉄刀も出土した。さらに、遺物が集中的に出土したレベルで、漆器碗らしき塗膜と圧痕を確認でき、漆器碗が土師器供膳具とともに廃棄された可能性が高い。

なお、青磁・白磁、土師器の大形器種も出土しているが、小片で、一括廃棄されたような状況ではない。

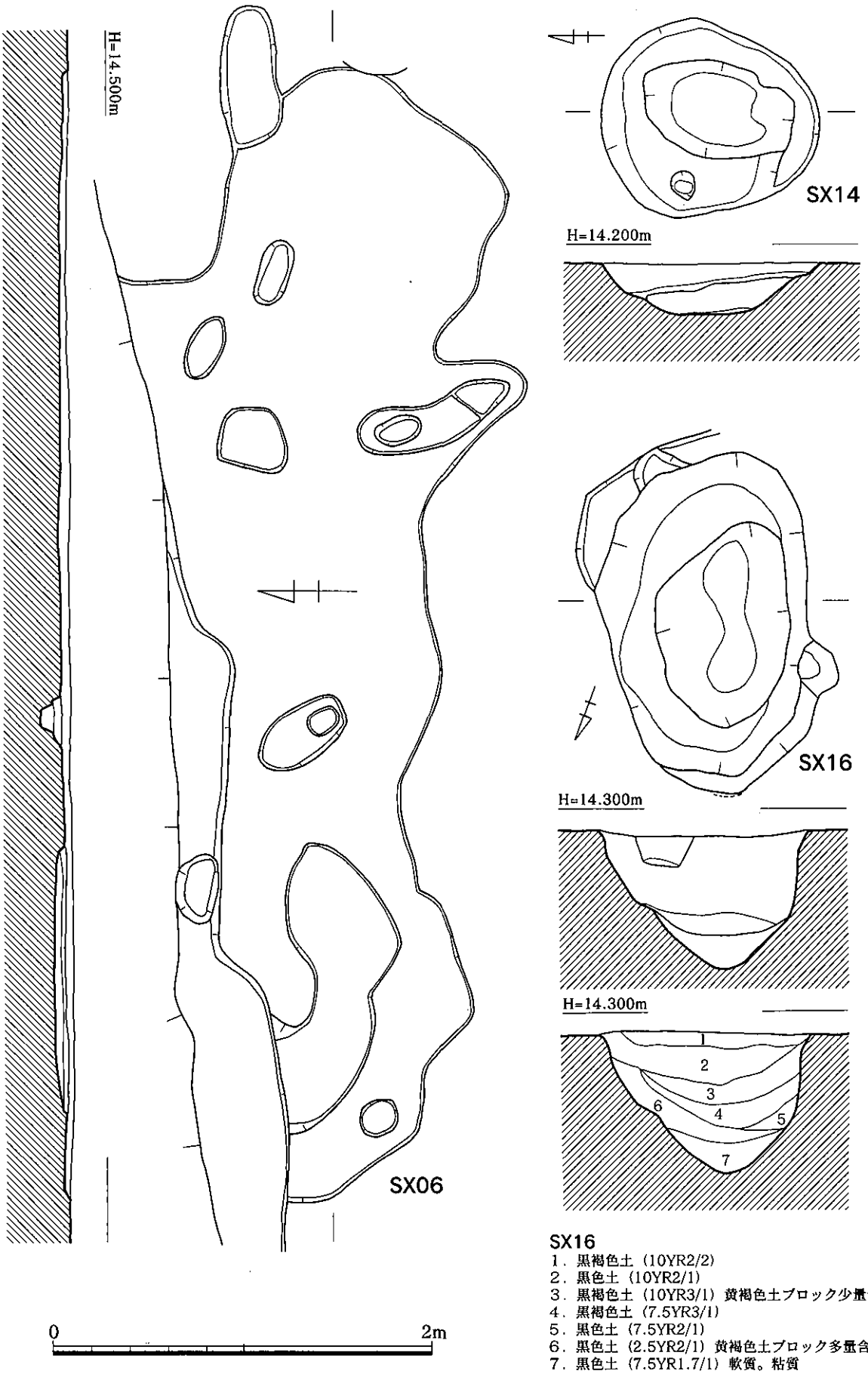
遺物取り上げは、土層図の１・２層を上層、３層を下層として取り上げた。なお、平面図に記録した遺物は全て上層に含まれ、第18図の土師器小皿・杯も全て上層の遺物である。

遺物（第19図）　59～83は土師器小皿。口径は8.4～8.6cmを中心に8.1cm～9.0cm、器高は1.6cm～1.85cmを中心に1.25cm～2.0cmに法量分布する。84～92は土師器坏。口径は12.0cm～13.85cm、器高は2.85cm～3.2cmに法量分布する。小皿、坏とも法量による同一器種内での明確なグルーピングはできない。93は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅱ類。94は白磁椀。太宰府分類Ⅸ類。95は碁石。白色を呈する。石英製。96は丸瓦。凸面は単位の大きい格子目タタキ、凹面は布目痕が確認できる。97は鉄刀。身部から茎部にかけて緩やかに反り、茎部には木質が残る。身部の最大厚は3.5mmで薄い。現存長21.4cmを測り、また接合できない切先付近も出土しているが、全長30cmを超えるものではなく、短刀に相当するものであろう。なお、切先付近が出土していることからも、本来完形の状態で廃棄されたものと推測される。

これら以外には、当遺構からは土師器鍋類片、滑石片、瓦器片、施釉陶器片（壺類？）、焼土塊などが出土した。

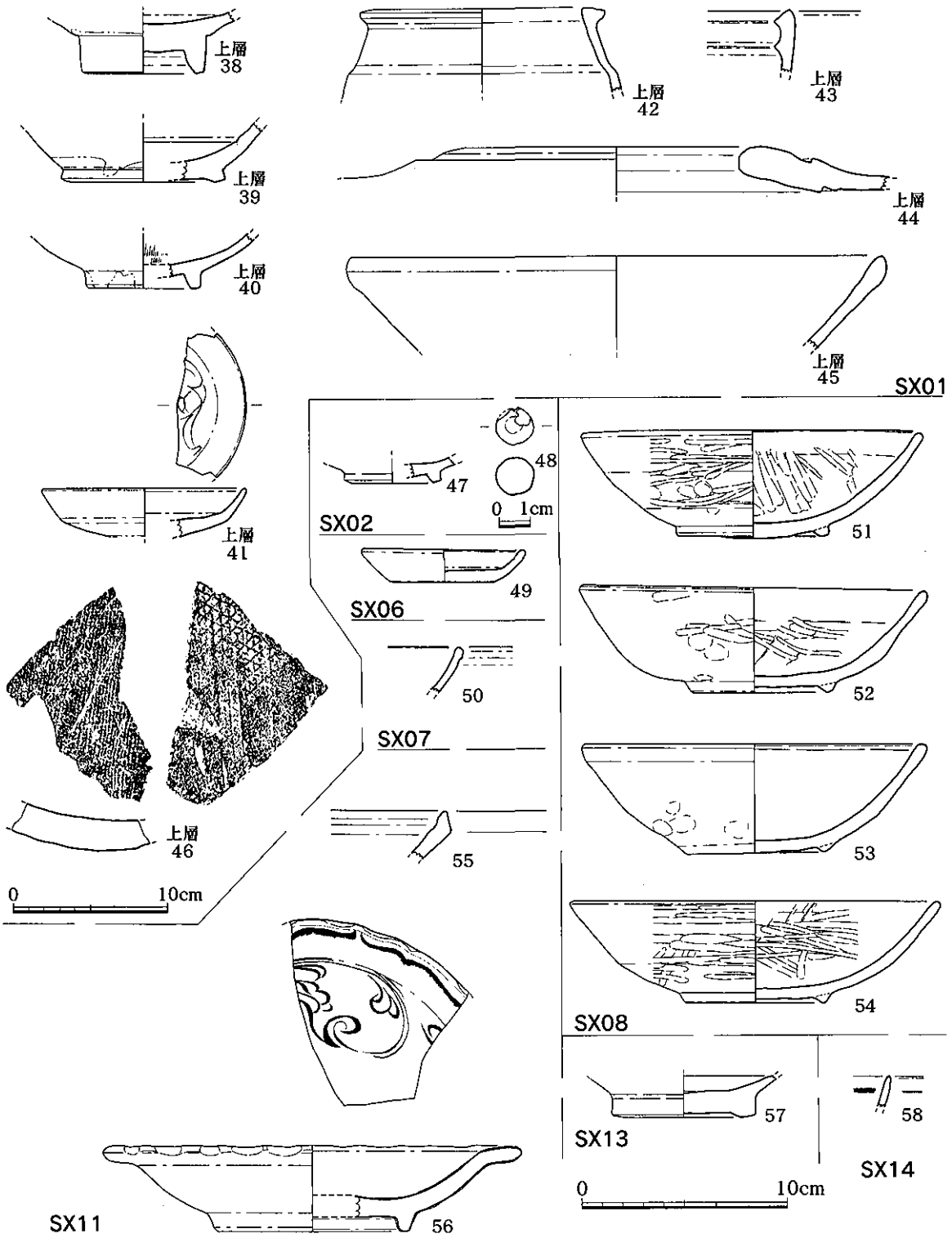
SX16（第15図）　調査区北東側、SX17の北側に位置する。2.4m×1.5mの楕円形を呈し、深さ74cmを測る。底面は細長く、横断面形は歪な「V」字形に近い。

遺物（第20図）　98は土師質鍋。口縁部上面には、不明瞭ながら工具で押さえたような圧痕が連続して確認できる。99・98は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅱ類。101は白磁椀。太宰府分類Ⅸ類。

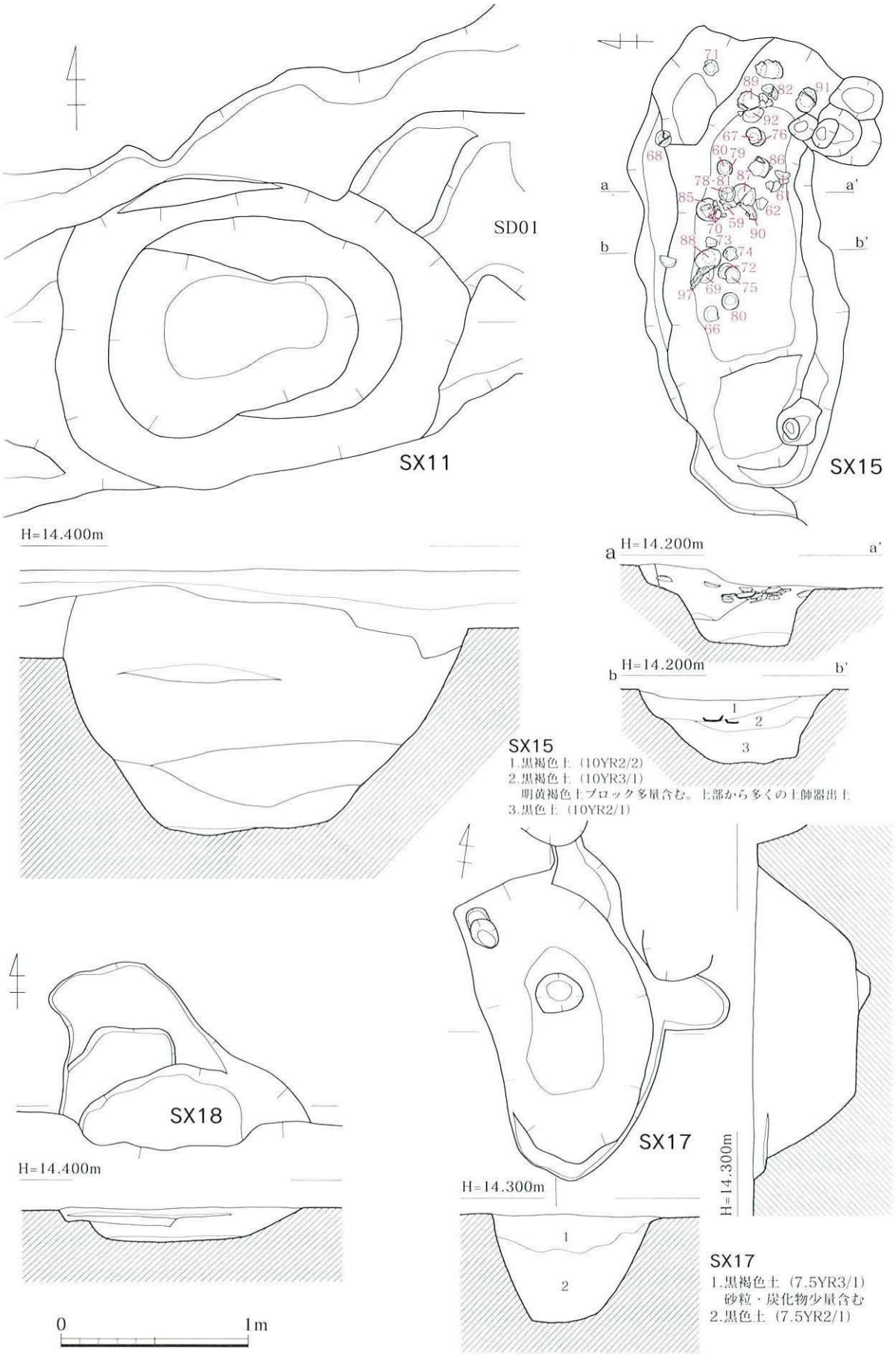


SX16
1．黒褐色土（10YR2/2）
2．黒色土（10YR2/1）
3．黒褐色土（10YR3/1）黄褐色土ブロック少量含む
4．黒褐色土（7.5YR3/1）
5．黒色土（7.5YR2/1）
6．黒色土（2.5YR2/1）黄褐色土ブロック多量含む
7．黒色土（7.5YR1.7/1）軟質。粘質

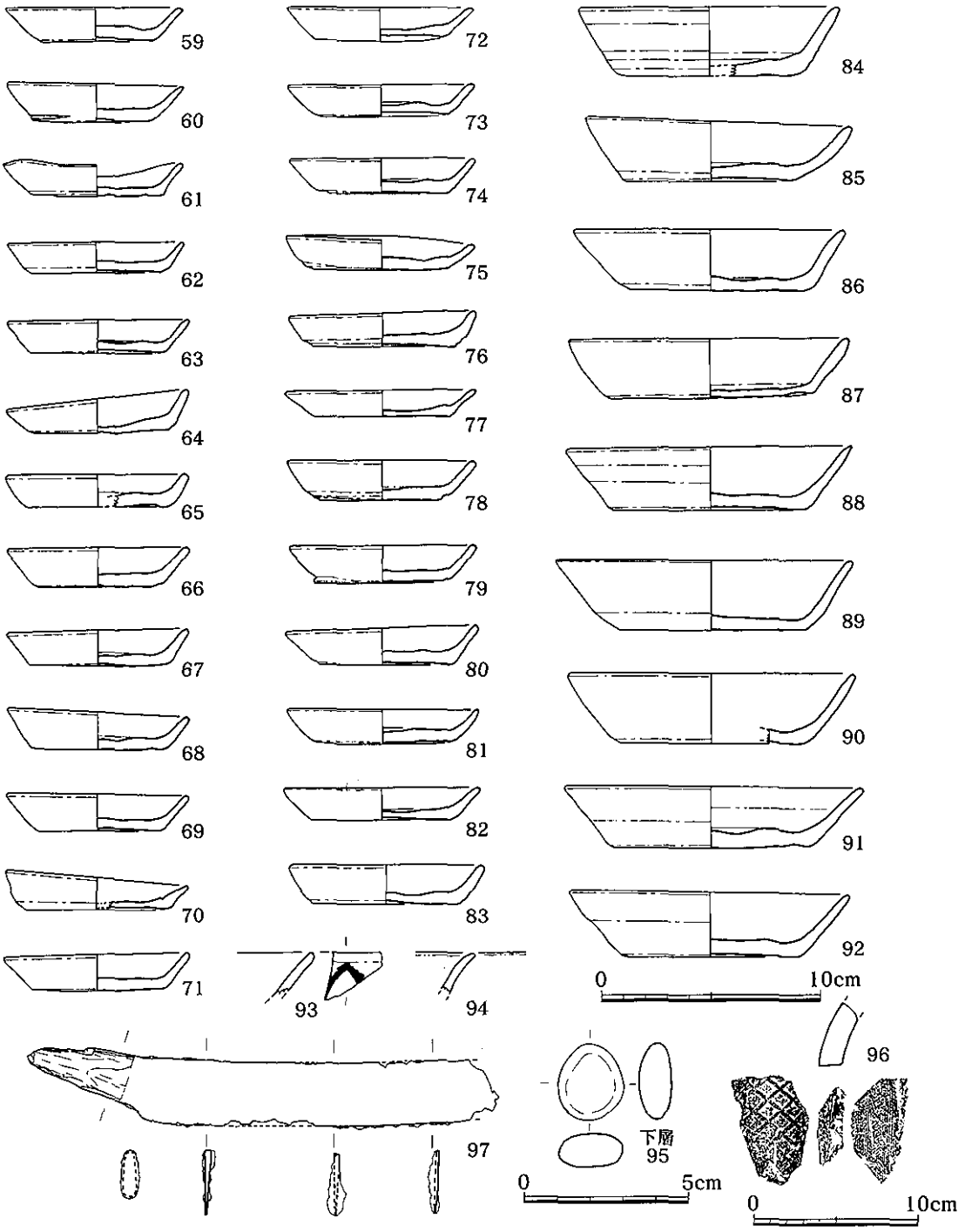
第15図　5区SX06・14・16実測図（1/30）



第16図　5区SX01・02・06～08・11・13・14遺物実測図（46:1/4、48:1/2、その他:1/3）



第17図　5区SX11・15・17・18実測図（1/30）



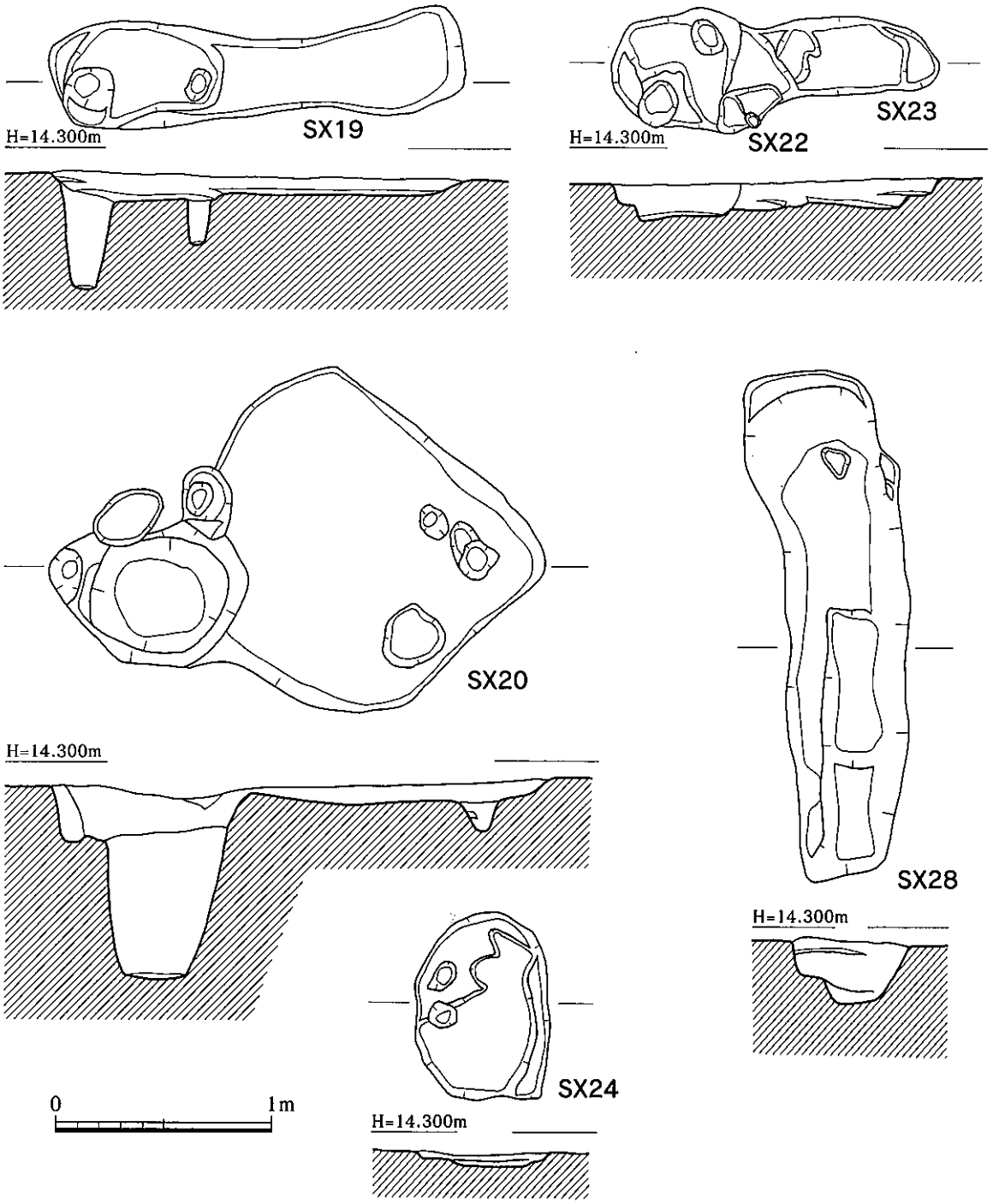
第18図　5区SX15遺物実測図（95:1/2、96:1/4、その他:1/3）

102は碁石か。白色を呈する。石英製。他の碁石と比べ明らかに小ぶりである。

これら以外に、土師器片、瓦器片、施釉陶器片などが出土している。

SX17（第17図）　調査区北東側、SX16とSX18の中間に位置する。1.65m×0.93mの歪な楕円形を呈し、深さ58cmを測る。底面は比較的平坦であるが、一部ピット状に深くなる。東西壁面の立ち上がりは比較的急である。

遺物（第20図）　103・104は土師器小皿。105～108は土師器坏。口径は12.0cm～12.95cm、

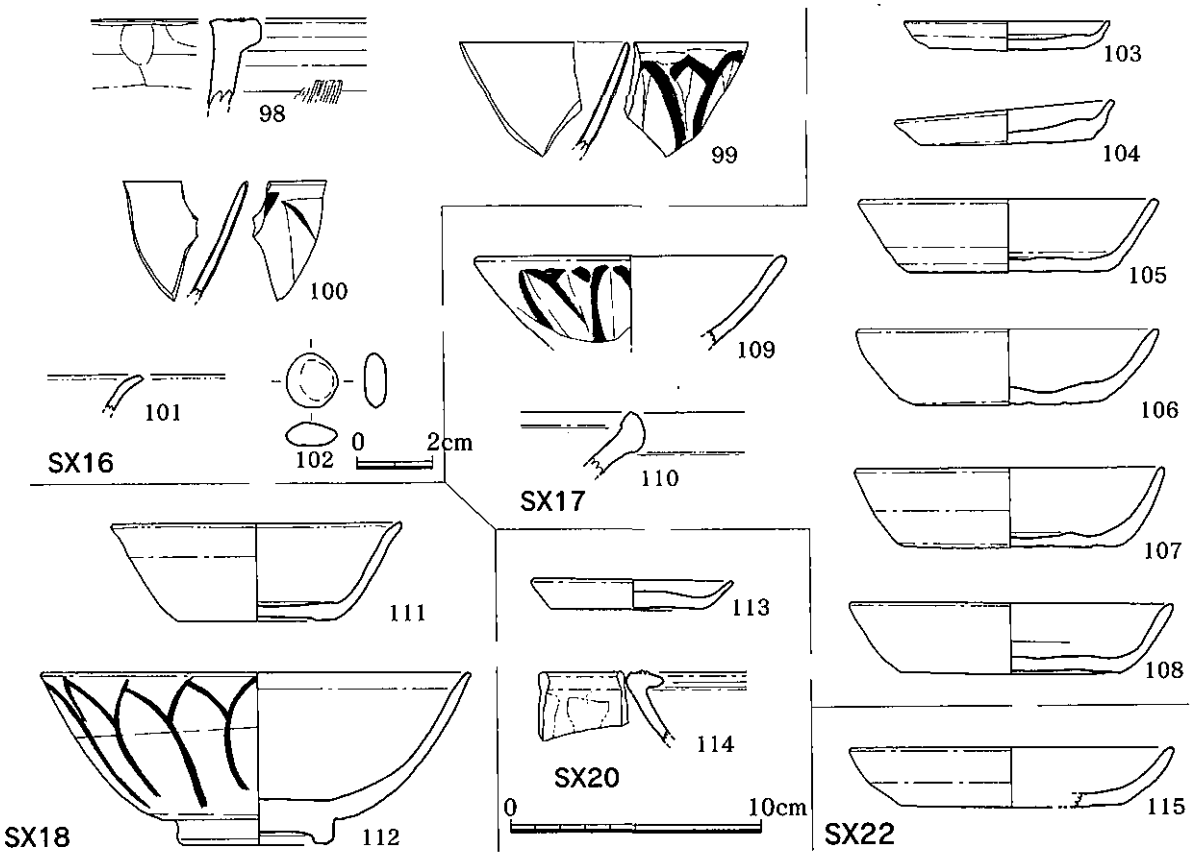


第19図　5区SX19・20・22～24・28実測図（1/30）

器高は2.9cm～3.2cmを測る。109は竜泉窯系青磁小椀。太宰府分類II類。110は東播系こね鉢。

これら以外に、無釉陶器片、焼土塊などが出土した。

SX18（第17図）　調査区西側、SX17とSE05の中間に位置する。SD05を切る。検出段階で切り合い関係は把握でき、当然SX18を先行して掘下げたが、遺憾ながら当遺構のみを完掘した図を作成していない。本来約1.5m×1.2mの歪な楕円形を呈していた。深さは18cmを測り、壁面の立ち上がりは緩やかである。



第20図　5区SX16～18・20・22遺物実測図（102:1/2、その他:1/3）

遺物（第20図）　111は白磁皿。太宰府分類Ⅸ類。112は竜泉窯系青磁椀。やや退化した蓮弁を施す。太宰府分類Ⅳ類。

これ以外に、土師器片、瓦器片、同安窯系青磁片、無釉陶器片、焼土塊、鉄器片、鉄滓などが出土した。

SX19（第19図）　調査区北東側、SX20の北0.5mに位置する。1.9m×0.51mの長楕円形を呈し、深さ13cmを測る。底面でピットを検出したが、別遺構であろう。

遺物は、土師器、瓦器、須恵質土器などが出土したが、図化に堪えることができない。

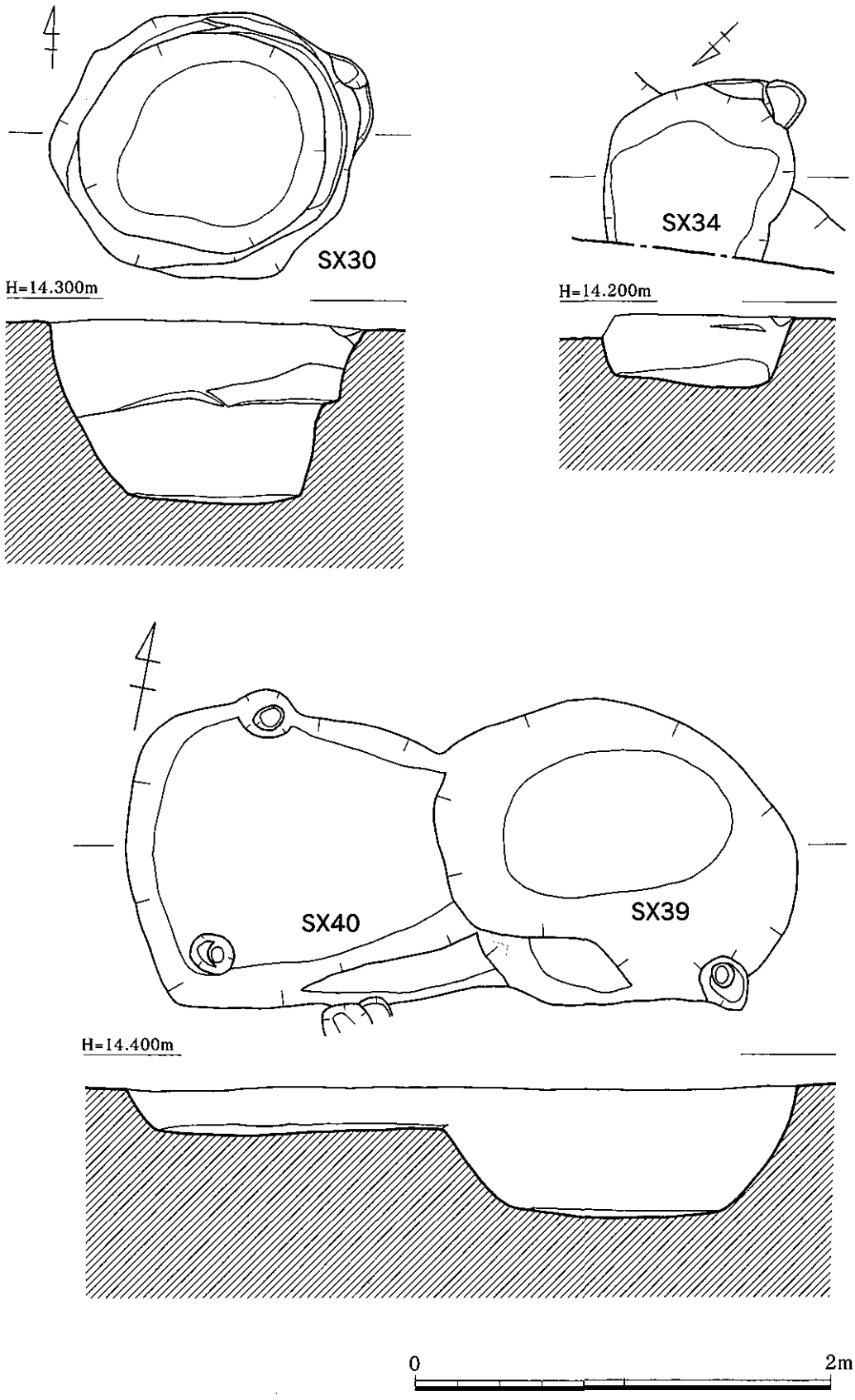
SX20（第19図）　調査区北東側、SX19の南側に位置する。切り合い関係は確認できなかったが、本来別遺構と考えられる1.52m×0.46mの隅丸方形土坑と、0.75×0.68mのピット状土坑を合わせて図示している。隅丸方形土坑は深さ８cmで壁面の立ち上がりは緩やか、楕円形土坑は深さ85cmで壁面の立ち上がりは急である。遺物はいずれもSX20として取り上げている。

遺物（第20図）　113は土師器小皿。114は中国産陶器壷。外面全体に黒褐色釉が施され、内面にも一部釉垂れが認められる。

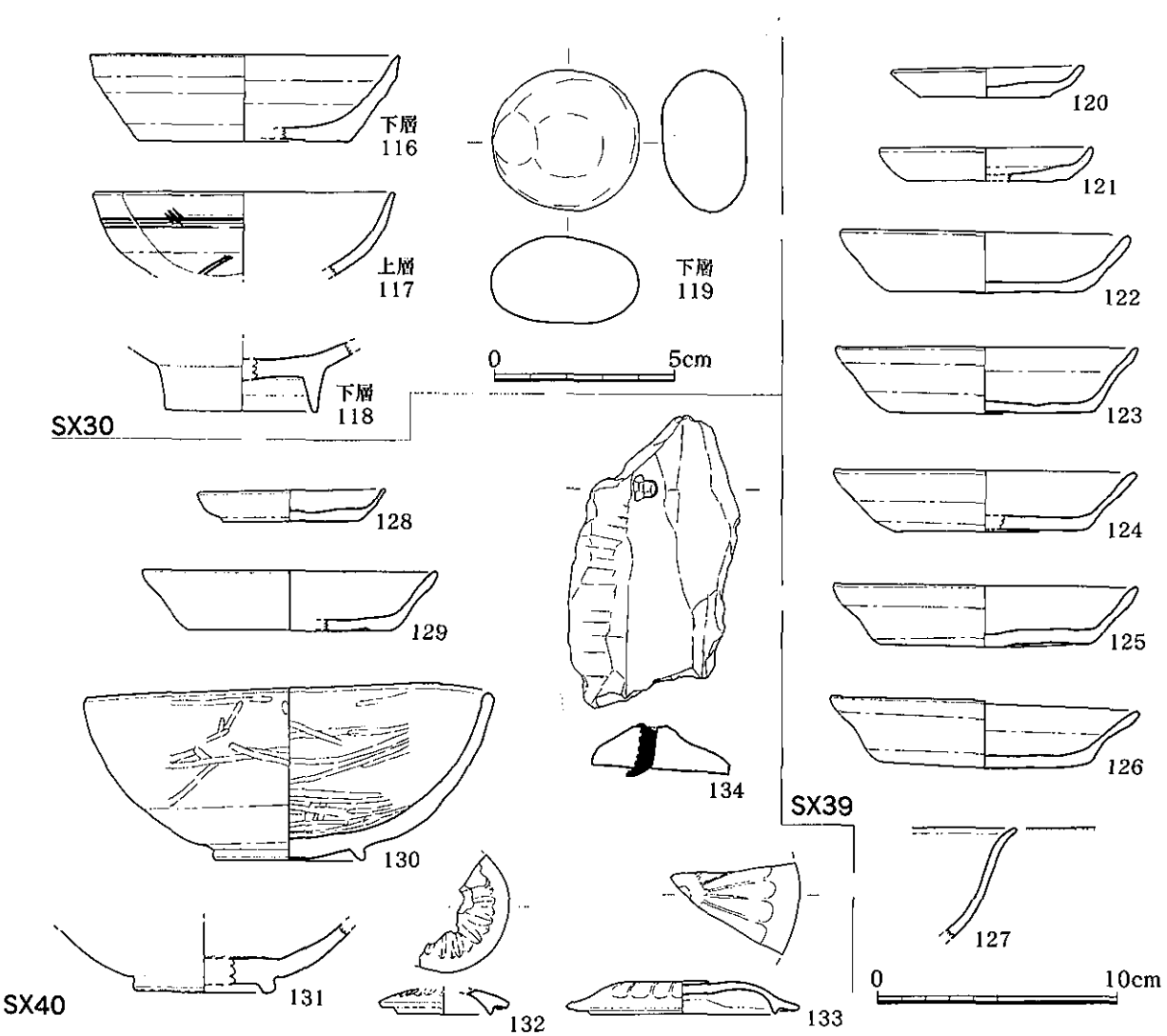
これら以外に、土師器片、瓦器片、白磁片が出土した。

SX22（第19図）　調査区北東側、SE04とSX19の中間に位置する。SX23を切る。0.85m×0.55mの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。

遺物（第20図）　115は土師器坏。これ以外には、土師器片、瓦器片が出土した。



第21図　5区SX30・34・39・40実測図（1/30）



第22図　5区SX30・39・40遺物実測図（119:1/2、その他:1/3）

SX23（第19図）　調査区北東側、SE04とSX19の中間に位置する。SX22に切られる。SX22により一部を欠くが、0.74m以上×0.36mの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。

遺物は、土師器片、瓦器片が出土したが図化に堪えることができない。

SX24（第19図）　調査区北東側、SX16の南西0.5mに位置する。0.86m×0.61mの楕円形を呈し、深さ6cmを測る。

遺物は、土師器片、瓦器片、焼土塊が出土したが図化に堪えることができない。

SX28（第19図）　調査区やや北東側、SX30の西側約5mに位置する。2.37m×0.7mの長楕円形を呈し、深さ25cmを測る。テラスを有するが、短軸の壁面の立ち上がりは比較的急である。

遺物は、土師器片、瓦器片、施釉陶器片（黒褐色釉）が出土したが、図化に堪えることができない。

SX30（第21図）　調査区東側、SE05とSX28の中間に位置する。1.5m×1.28mの楕円形を呈し、深さ88cmを測る。底面はわずかに凹レンズ状にくぼみ、壁面の立ち上がりは急である。埋土は、上層から、暗灰色土、灰色砂、灰色砂と灰色粘質土の混土の順に堆積していた。遺物は暗灰

色土を上層、灰色砂以下を下層として取り上げている。井戸の可能性もあるが、深さおよび埋土の状況から、積極的には肯定できない。

遺物（第22図）　116は土師器坏。底部糸切りで、器高が高い。117は青磁椀。外面に片彫りで文様を施す。竜泉窯系か。118は白磁椀。内底面に櫛目文が確認できる。太宰府分類Ⅴ類。119は円礫である。石英製で白色を呈する。明確な研磨痕が確認できないため、確実に人為的な加工があったとはいえないが、極めて滑らかな肌触りである。

これら以外には、土師器片、瓦器片、無釉陶器片、須恵器片、焼土塊などが出土した。

SX34（第21図）　調査区北側SE04の西側に接して位置する。SD04に切られ、遺構北側は調査区外に続く。現状で0.84m以上×0.9mの楕円形を呈し、深さは34cmを測る。壁面の立ち上がりは比較的急である。

遺物は、土師器片、瓦器片、白磁片が出土したが、図化に堪えることができない。

SX39（第21図）　調査区東隅近くに位置し、SX40を切る。1.71m×1.47mの楕円形を呈し、深さ62cmを測る。底面は凹レンズ状にわずかに窪み、東壁は比較的急に立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層であった。

遺物（第22図）　120・121は土師器小皿。122～126は土師器坏。口径は12.2cm～13.0cm、器高は2.6cm～3.0cmを測る。中でも123と124は、口径・器高・底径とも同一法量である。127は白磁椀。太宰府分類Ⅸ類。

これら以外には、青磁椀（同安窯、竜泉窯）、白磁（Ⅳ類ほか）、施釉陶器（内面黄褐色釉盤ほか）、東播系こね鉢、瓦器、須恵器、焼土塊などが出土した。

SX40（第21図）　調査区東隅近くに位置し、SX39に切られる。遺構東端を欠くが、現状で1.5m×1.45mの隅丸方形を呈し、深さ22cmを測る。底面は比較的平坦である。埋土は、上層が灰黄褐色土を含む黒褐色土、部分的に堆積した下層は褐灰色土であった。

遺物（第22図）　128は土師器小皿。129は土師器坏。130は瓦器椀。器高が高く、丸みのある特徴的な器形。131は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅰ類。132・133は青白磁蓋。壷類とセットになるものか。いずれも、身受け部を有しており、132は外面天井部に蓮弁文、133は菊花文を施している。134は滑石製品。石鍋の転用品か。穿孔が1ヶ所認められ、そこには棒状の鉄製品が挿入されている。

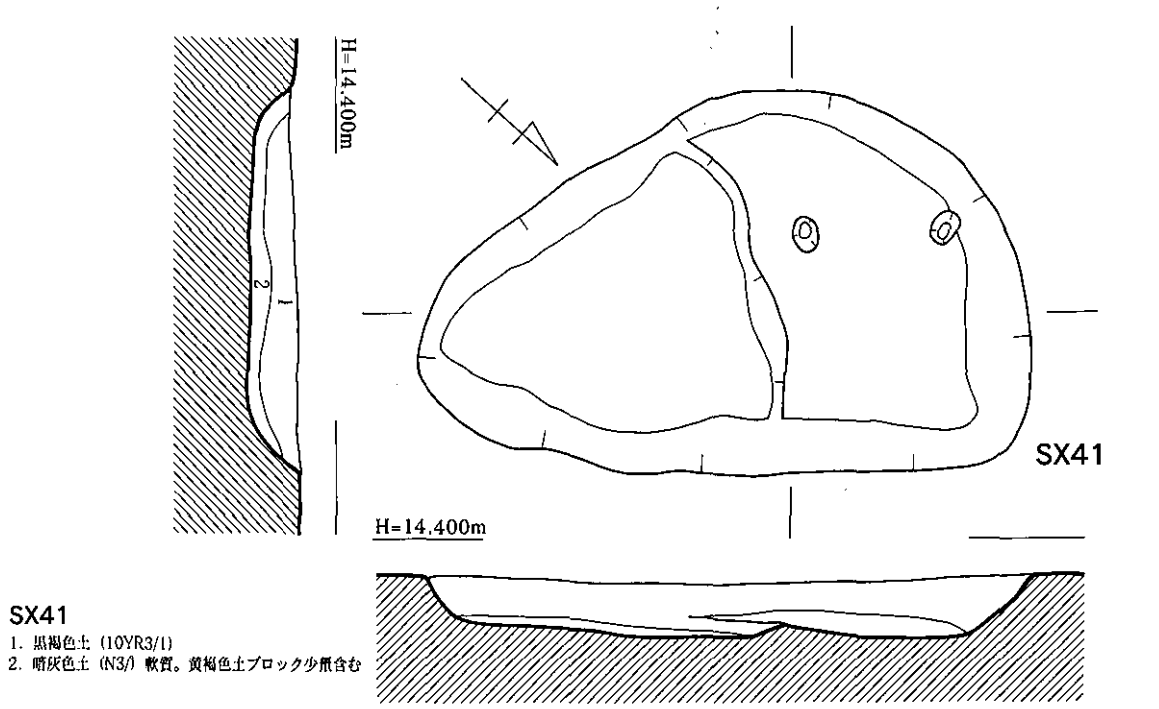
これら以外には、同安窯系青磁片、施釉陶器壷類片、須恵質土器片、焼土塊などが出土した。

SX41（第23図）　調査区やや東側、SX46とSX47の中間に位置する。2.43m×1.51mの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。底面南西側は二段掘り状にやや深くなる。

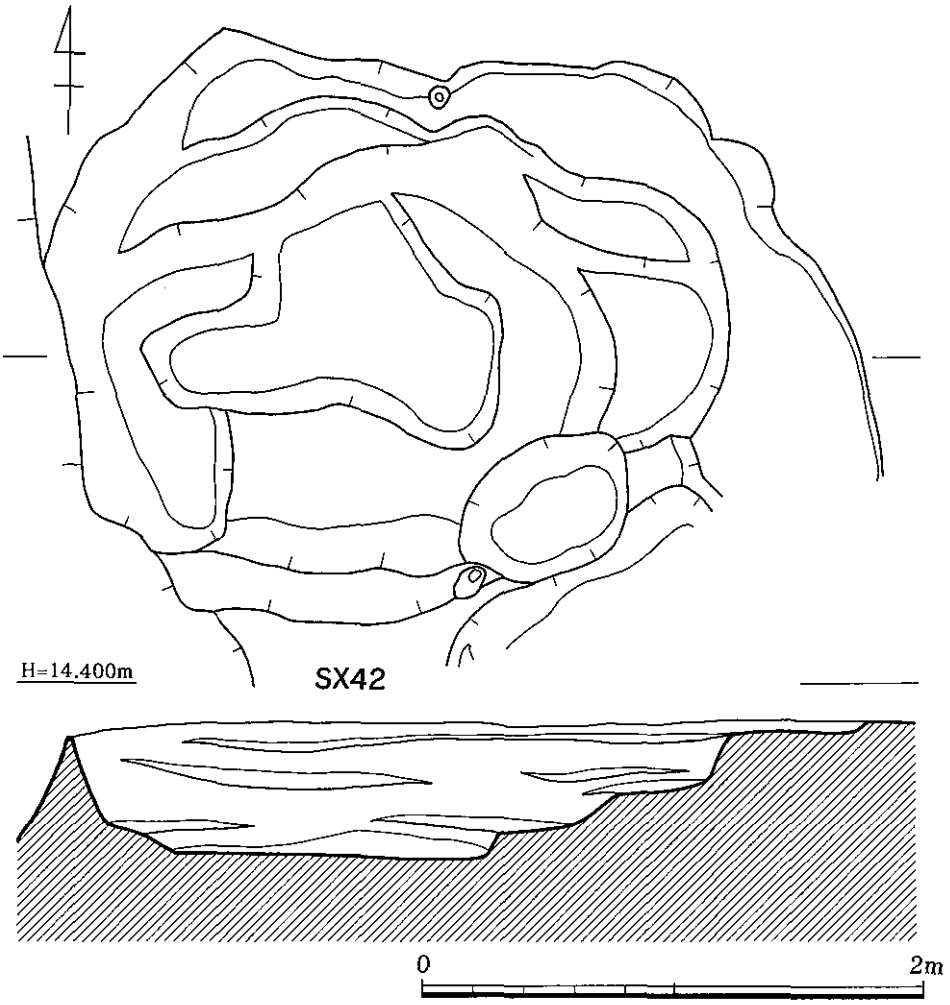
遺物（第25図）　135～137は土師器小皿。135・136には底部ヘラ切り痕が残る。138は瓦器小皿。139は土師器丸底坏。140は白磁椀。太宰府分類Ⅳ類に相当する。141は有孔石製品。滑石製。上面は比較的平滑に仕上げ、底面・側面には加工痕が残る。穿孔部分には、鑿状の工具痕が上下方向に認められる。

これら以外に、土師器片、瓦器片、滑石製石鍋片、焼土塊などが出土した。

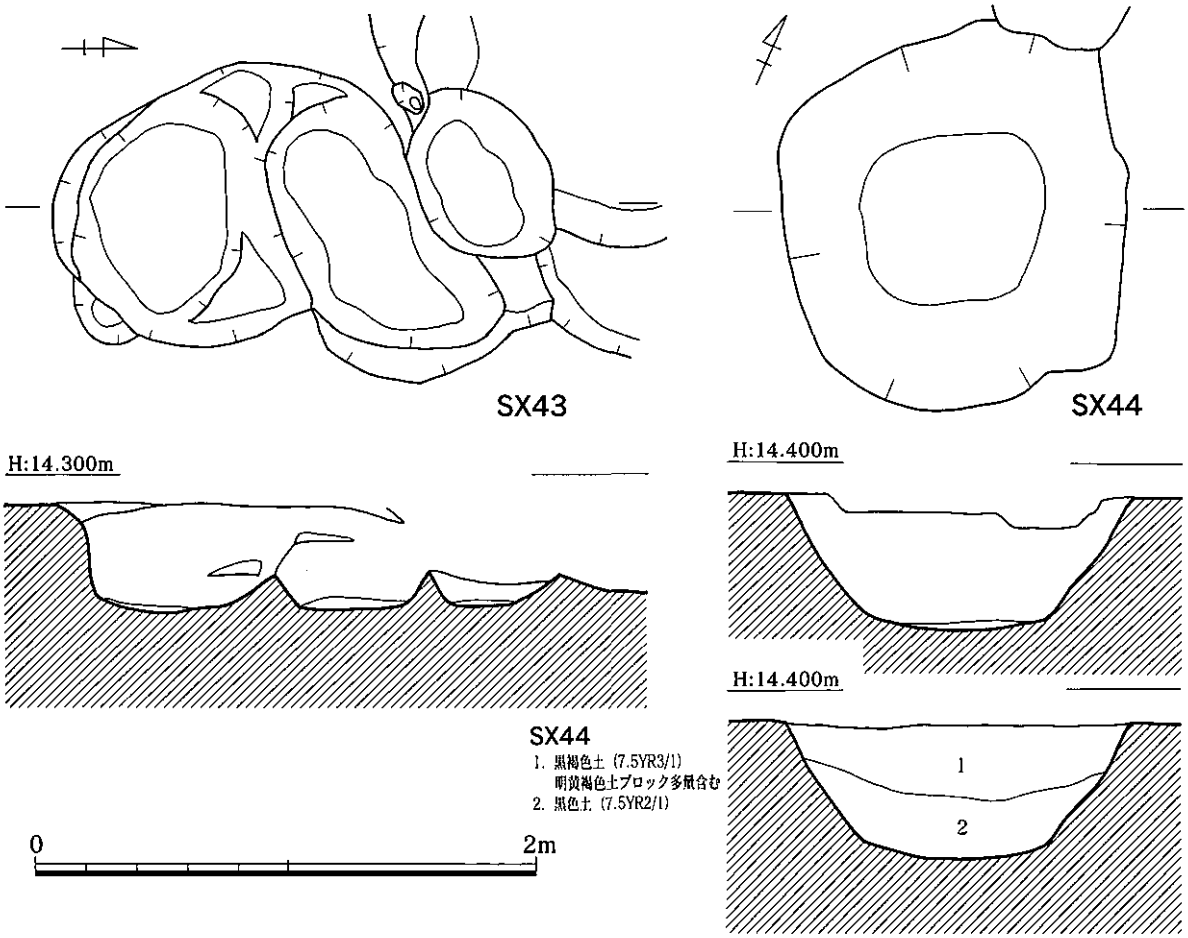
SX42（第23図）　調査区やや東側、SX41の東約1m、SX48の南約0.5mに位置する。SD04



SX41
1. 黒褐色土 (10YR3/1)
2. 暗灰色土 (N3/) 軟質。黄褐色土ブロック少量含む



第23図　5区SX41・42実測図（1/30）



第24図　5区SX43・44実測図（1/30）

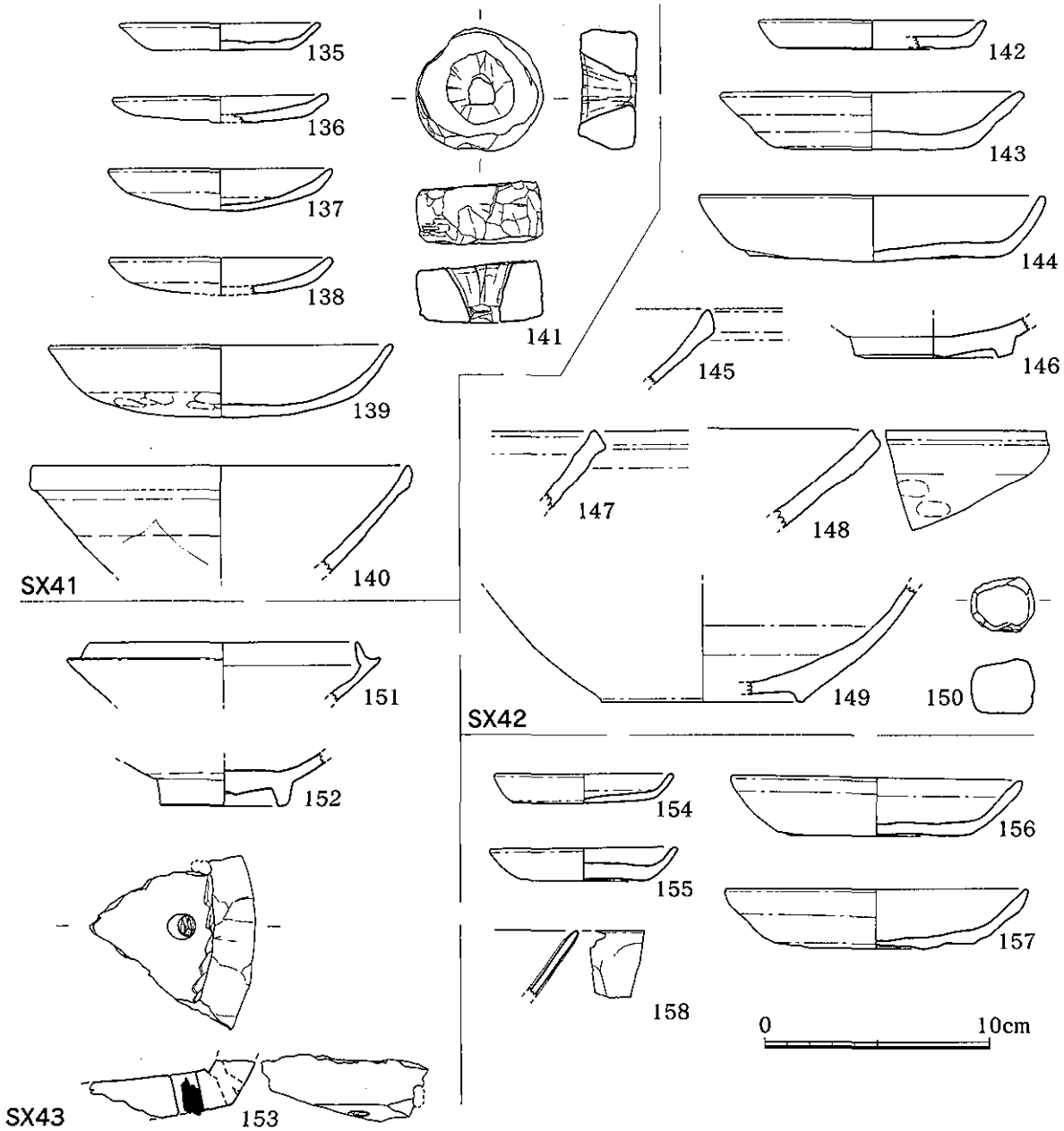
に切られる。SD04により西端を欠くが、現状で3.12m×2.25mの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。底面は比較的平坦であり、壁面は複数のテラスにより階段状に立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層であった。SX43との先後関係については、土層観察の結果、SX43の上層の埋土と同一であったことから、SX43に先行することはなく、SX43の掘削後間もない時期に掘削された可能性が高い。

遺物（第25図）　142は土師器小皿。143・144は土師器坏。145・146は白磁椀。145は太宰府分類Ⅳ類。147・148は須恵質こね鉢。東播系。149は陶器鉢類か。碁笥底状の底部から、大きく膨らみながら立ち上がる。内面に使用痕は認められない。150は瓦玉。土師質土器片の側縁を面取り状に加工し成形している。

これら以外には、瓦器片、青磁片、焼土塊、鉄滓などが出土した。

SX43（第24図）　調査区やや東側、SX42の南側に接し、SX45の北0.5mに位置する。現状で1.96m×1.12mの歪な楕円形を呈し、深さ44cmを測る。完掘すると、長軸に沿って３基の小形土坑が並んでいるように見える。埋土は上層が黒褐色土、下層は黒色土であり、先述したとおり、上層の埋土はSX42と同一であった。

遺物（第25図）　151は須恵器坏身。小田編年のⅣ期に相当する。152は白磁椀。153は滑石製石鍋。底面に径1.3cm程の補修孔とみられる穿孔があり、この中に棒状の鉄器片が認められる。また上面図の上方の破面には、「X」字状に交差した穿孔の痕跡があり、この部分にも鉄錆が付着



第25図　5区SX41～44遺物実測図（1/3）

しており、補修のための鉄器が挿入されていたことが想定できる。

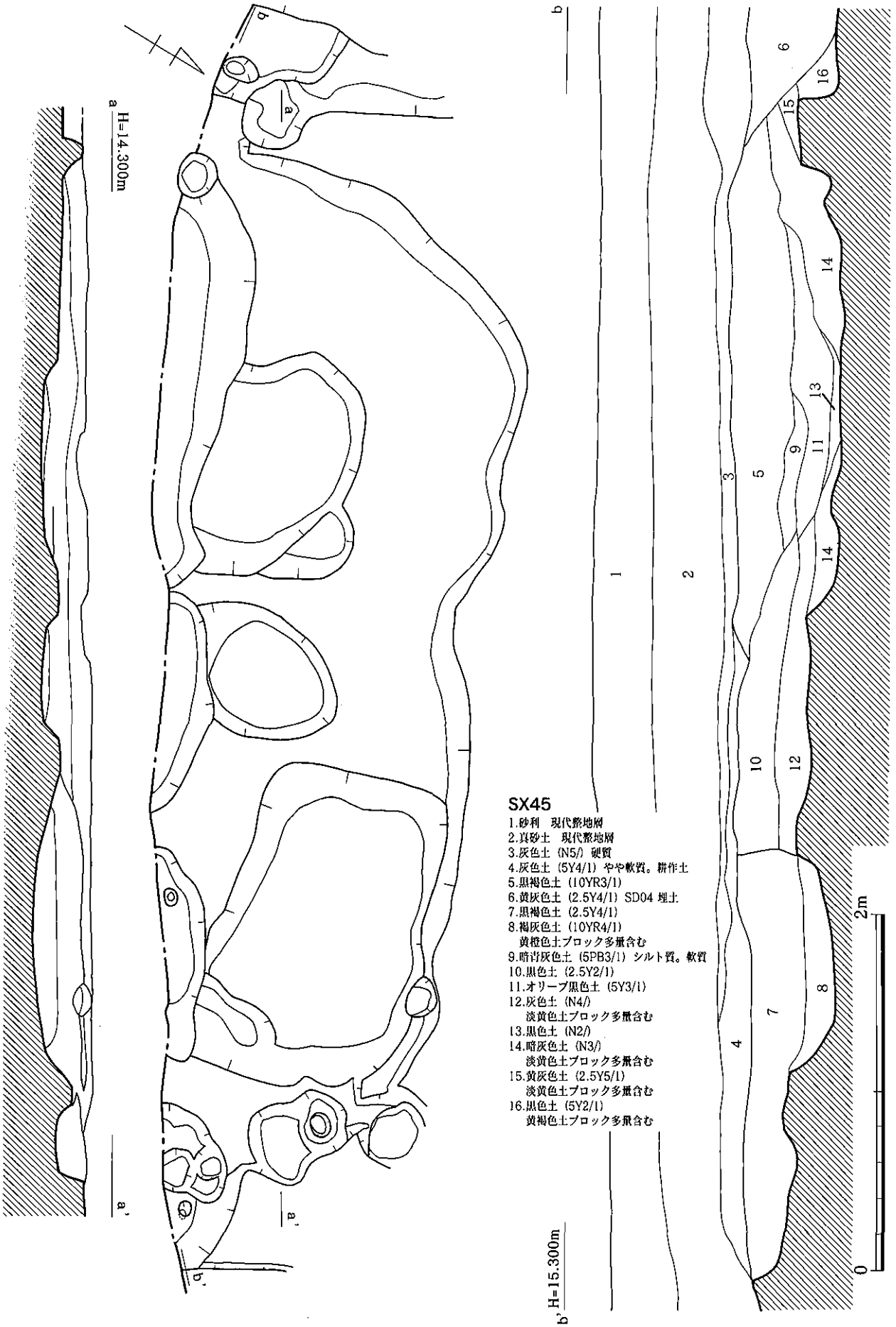
これら以外には、土師器、瓦器などが出土した。

SX44（第24図）　調査区東側、SX46の東約１mに位置する。1.54m×1.36mの隅丸方形を呈し、深さ55cmを測る。底面は凹レンズ状にやや窪み、壁面は比較的緩やかに立ち上がる。

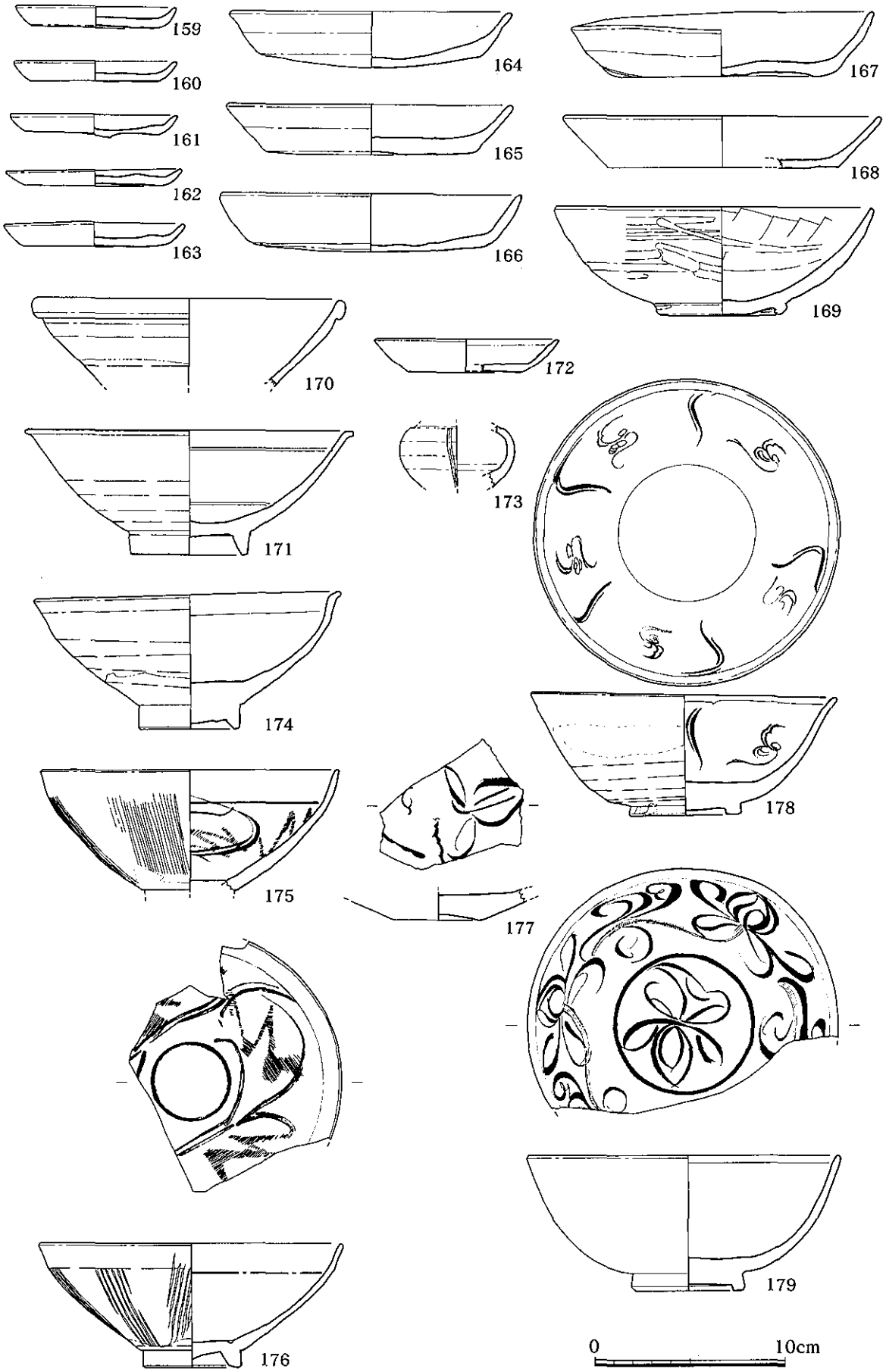
遺物（第25図）　154・155は土師器小皿。156・157は土師器坏。いずれも底部糸切り。158は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅱ類。

これら以外には、瓦器片、白磁片、同安窯系青磁片、施釉陶器片（盤体部片ほか）、砂岩製砥石片などが出土した。

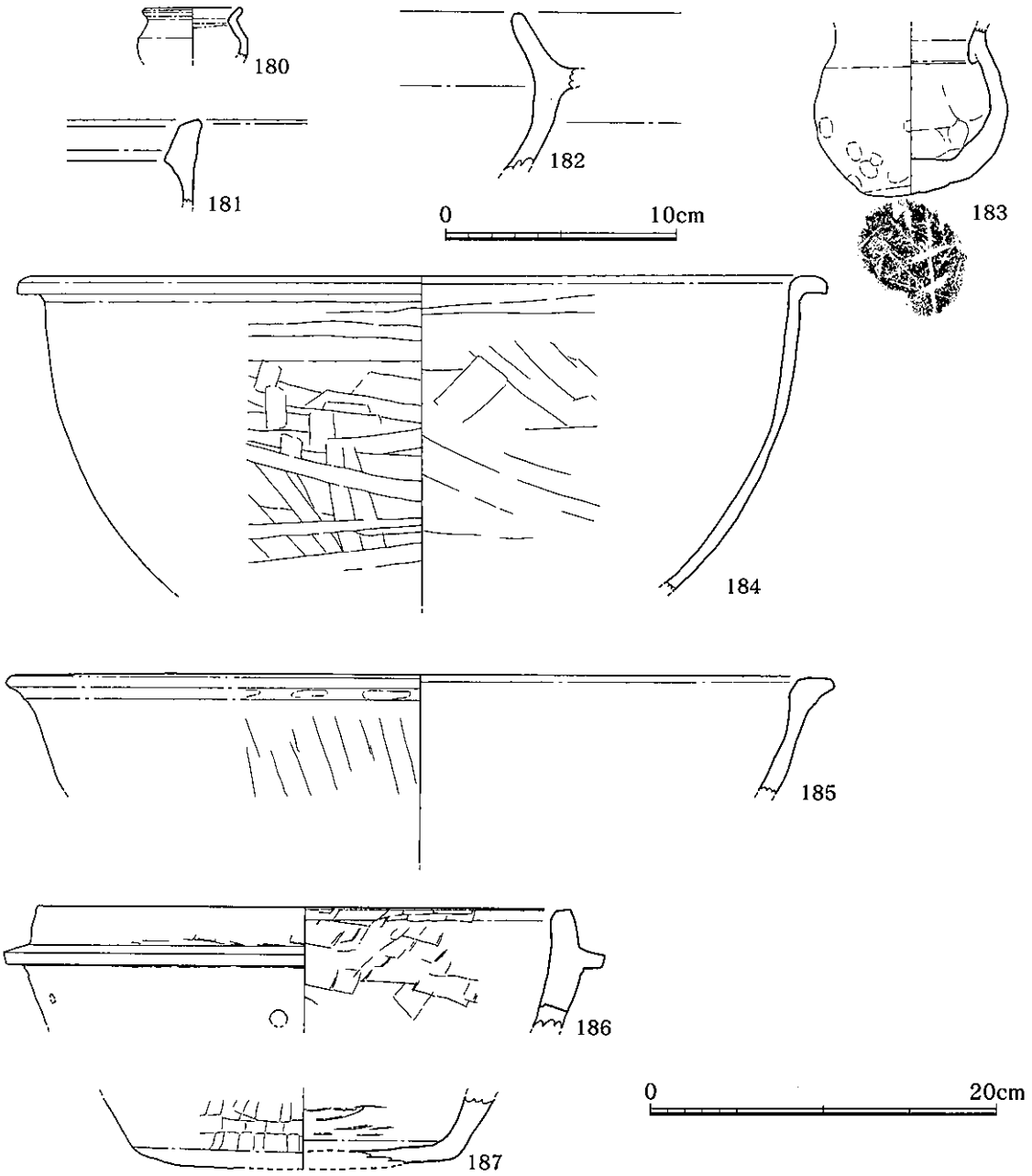
SX45（第26図）　調査区やや東側、SX41やSX43の南側に位置する。遺構は調査区外に続く



第26図　5区SX45実測図 (1/30)



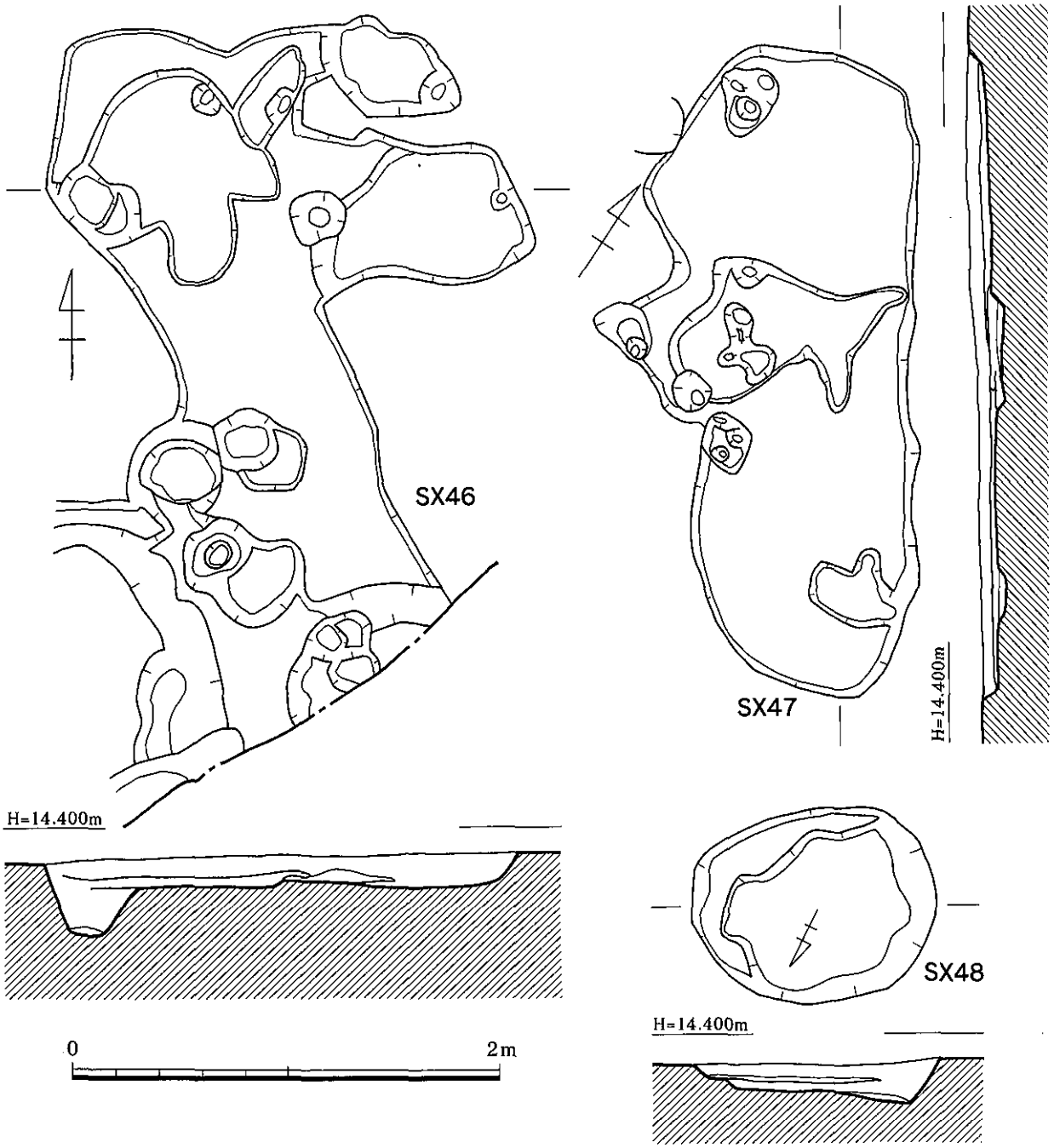
第27図　5区SX45遺物実測図（1）（1/3）



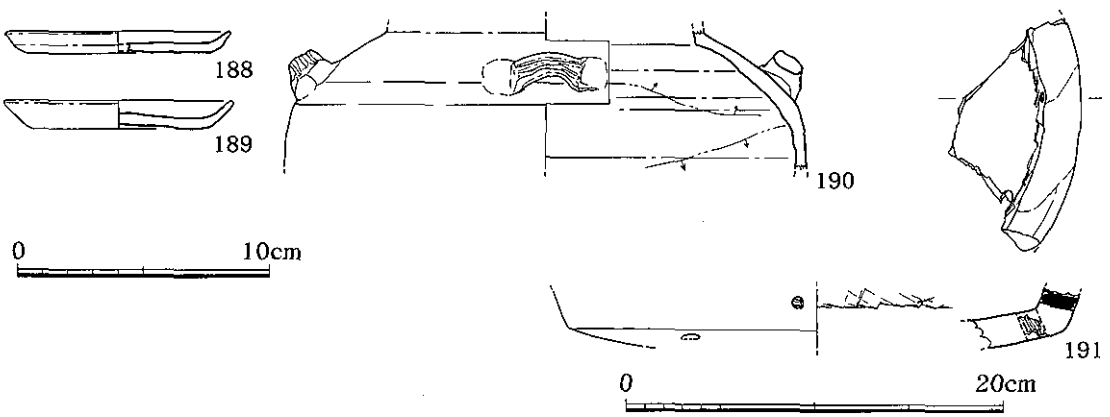
第28図　5区SX45遺物実測図（2）（180～183:1/3、その他:1/4）

が、現状で6.3m×2.02m以上の歪な楕円形を呈し、深さ50cmを測る。土層図を見て分かるように幾度かの掘り返し、および切り合いが認められるようであるが、埋土上面では確認することができず、分離して掘り下げていない。SX46との関連については、検出時の平面形態から、別遺構になる可能性が高いと考え、平面・土層図の破線の東西でSX45とSX46に分け、遺物を分離して取り上げた。結果として、埋土の状況からは別遺構とする根拠はないが、一応個別に報告する。

遺物（第27図）　159～163は土師器小皿。口径は8.5cm～9.55cm、159～161と162・163では法量差が認められる。164～168は土師器坏。口径は復元径に不安のある168を除くと、164・165と166・167では約1cmの差異が認められる。169は瓦器椀。器面調整が粗く、ミガキ



第29図　５区SX46～48実測図（1/30）



第30図　５区SX46遺物実測図（191:1/4、その他:1/3）

もやや疎らである。170・171は白磁椀。170は太宰府分類Ⅳ類、171は太宰府分類Ⅴ類に相当する。172は白磁皿。太宰府分類Ⅸ類。破片が小さく、復元径はやや不安である。173は白磁小壷か。SX45の底面の窪み（SX52）から出土した。174～176は同安窯系青磁椀。174は太宰府分類Ⅱ類、175・176は太宰府分類Ⅰ類に相当する。177は竜泉窯系青磁皿。片彫花文を施す。太宰府分類Ⅰ類。178・179は竜泉窯系青磁椀。178は二又片刀によって体部内面を５分割しその中に花文を、179は内面に片彫蓮花文を施す。いずれも太宰府分類Ⅰ類。180は陶器小壷。外面～口縁部内面まで褐釉を施す。181は陶器鉢。胎土に粗い白色砂を多く含む。182は土師器鍋。滑石製石鍋を模したような特徴的な形態で、口縁部直下に鍔がめぐる。鍔の下面以下には煤が付着する。183は土師器鉢。手づくねで成形したと考えられ、底部には葉脈圧痕らしき痕跡が認められる。184・185は土師器鍋。いずれも口径が大きく、器高がやや低いタイプである。184は口縁部直下に煤が顕著に付着し、胴部下半は二次被熱のため器面の剥落が著しい。186・187は滑石製石鍋。186には２ヶ所に補修孔と考えられる穿孔が確認できる。鍔の下面以下には煤が付着している。

これら以外には、白磁椀Ⅳ類、施釉陶器（壷類ほか）など出土した。

SX46（第29図）　調査区やや東側、SX45の東側に接し、SX41とSX44の中間に位置する。長軸が調査区外に続くが、現状で3.24m以上×1.8mの不整形を呈し、深さ14cmを測る。底面は細長く、横断面形は歪な「V」字形に近い。底面では複数のピットが確認されているが、これらは別遺構の可能性が高い。SX45との関連については、先述のとおりである。

遺物（第30図）　188・189は土師器小皿。190は白磁四耳壷。191は滑石製石鍋。底部に径1.0cm、体部最下位に径0.6cmの穿孔が認められ、いずれにも棒状の鉄器片が挿入されている。

これら以外には、土師器、瓦器、白磁（Ⅴ類ほか）、同安窯系青磁片、施釉陶器片、須恵器甕片、須恵質土器片などが出土した。

SX47（第29図）　調査区やや東側、SX48の北側に接し、SX42の北約１mに位置する。3.0m×1.32mの歪な楕円形を呈し、深さ16cmを測る。底面は比較的平坦であるが、一部やや深くなる。

遺物は、土師器片、瓦器片、須恵器片、滑石製石鍋片などが出土した。

SX48（第29図）　調査区やや東側、SX47の南側に接し、SX42の北約0.5mに位置する。1.12m×0.9mの楕円形を呈する。底面は西側に向かい深くなり、深さは19cmを測る。

遺物は、土師器片、瓦器片、無釉陶器片などが出土した。

（４）溝跡

大小合わせ７条検出した。

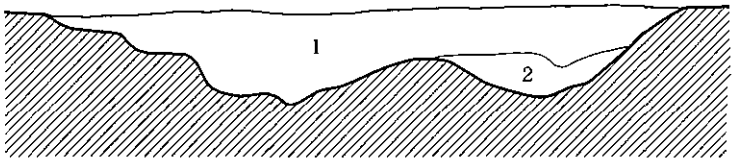
SD01（第６・31図）　調査区中央から北側にかけて「L」字形に検出され、遺構の北側、西側は調査区外に続いている。SX06やSD02を切る。最大幅3.7m、最小幅0.8mを有し、深さは最大0.5mを測る。底面は東側が総体的に深くなっている。断面形は、北側にテラスを有し、壁面が緩やかに立ち上がる凹レンズ形を呈する部分が多い。

これまでの事例から、本来、方形にめぐる区画溝であると想定でき、この場合、一辺35m以上を図ることが予測される。

遺物（第32図）　192は中国産染付椀。モチーフは判然としないが、雲と植物を描いているよ

a H=14.500m　　a'

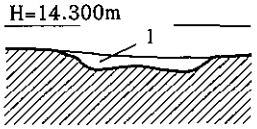
SD01(1)



SD01 (1)
1.褐灰色土(10YR4/1) 黒色土・褐灰色土ブロック多量含む
2.黄灰色土 (2.5Y4/1)

SD02

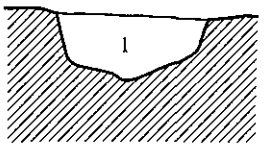
H=14.300m



SD02
1.黒褐色土 (10YR3/2)

SD03

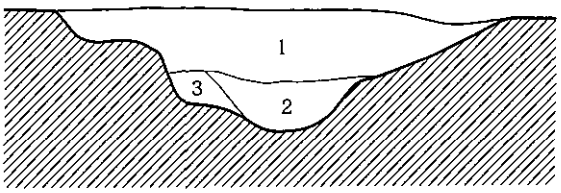
H=14.500m



SD03
1.黒色土 (2.5Y2/1) 軟質

b H=14.500m　　b'

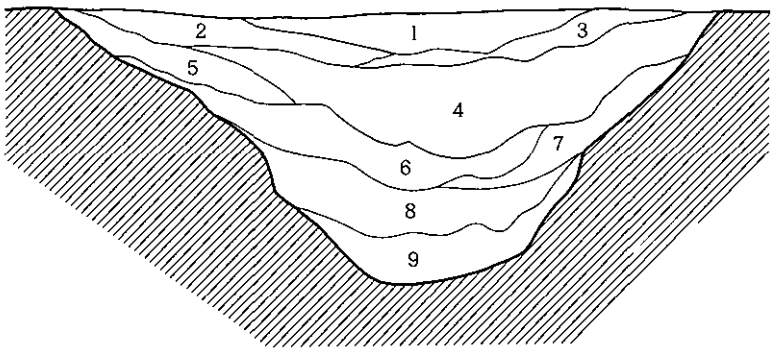
SD01(2)



SD01 (2)
1.黒褐色土 (7.5YR3/1) 黄橙色土ブロック少量含む
2.黒色土 (10YR2/1)
3.黒褐色土 (10YR2/2) 明黄色土ブロック多量含む

a H=14.500m　　a'

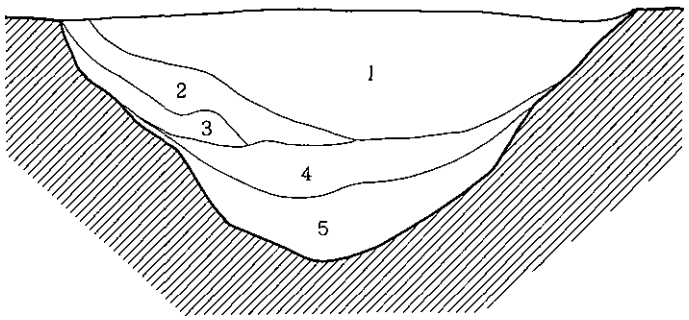
SD04(1)



SD04 (1)
1.褐灰色土 (10YR4/1)
2.黒褐色土 (10YR3/1)
3.灰色土 (5Y4/1)
4.褐灰色土 (10YR5/1)
5.にぶい黄橙色土 (10YR5/1) と灰色土 (N4/) の混土。
黒色土ブロック多量含む
6.黄灰色土 (2.5Y5/1) 粘質。軟質
7.黄灰色土 (2.5Y4/1)
粘質。軟質。黄橙色土・黒色土ブロック多量含む
8.灰色土 (N5/)
粘質。軟質。黄橙色土・黒色土ブロック多量含む
9.暗灰色土 (N3/) 粘質。軟質
※1～7層：上層、8･9層：下層として遺物取上げ

b H=14.500m　　b'

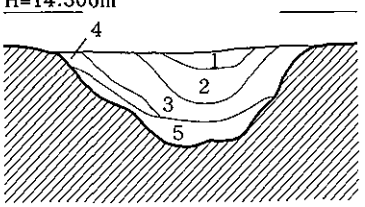
SD04(2)



SD04 (2)
1.黒褐色土 (7.5YR3/1)
2.褐灰色土 (10YR4/1)
3.黒褐色土 (10YR2/2)
4.黄灰色土 (2.5Y4/1)
5.灰色土 (N5/)
※1～4層：上層、5層：下層として遺物取上げ

SD05

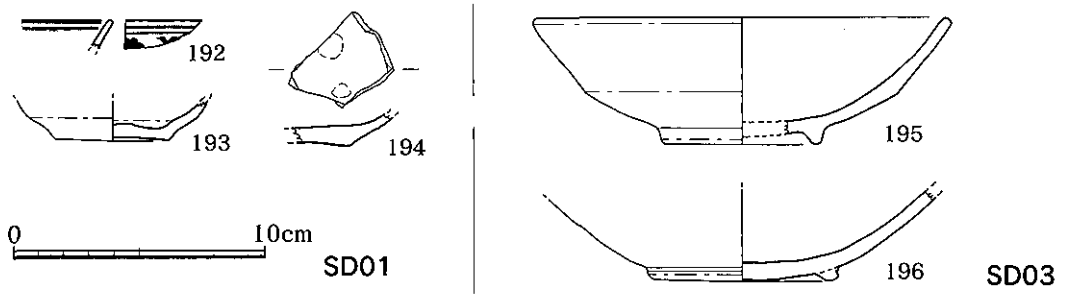
H=14.300m



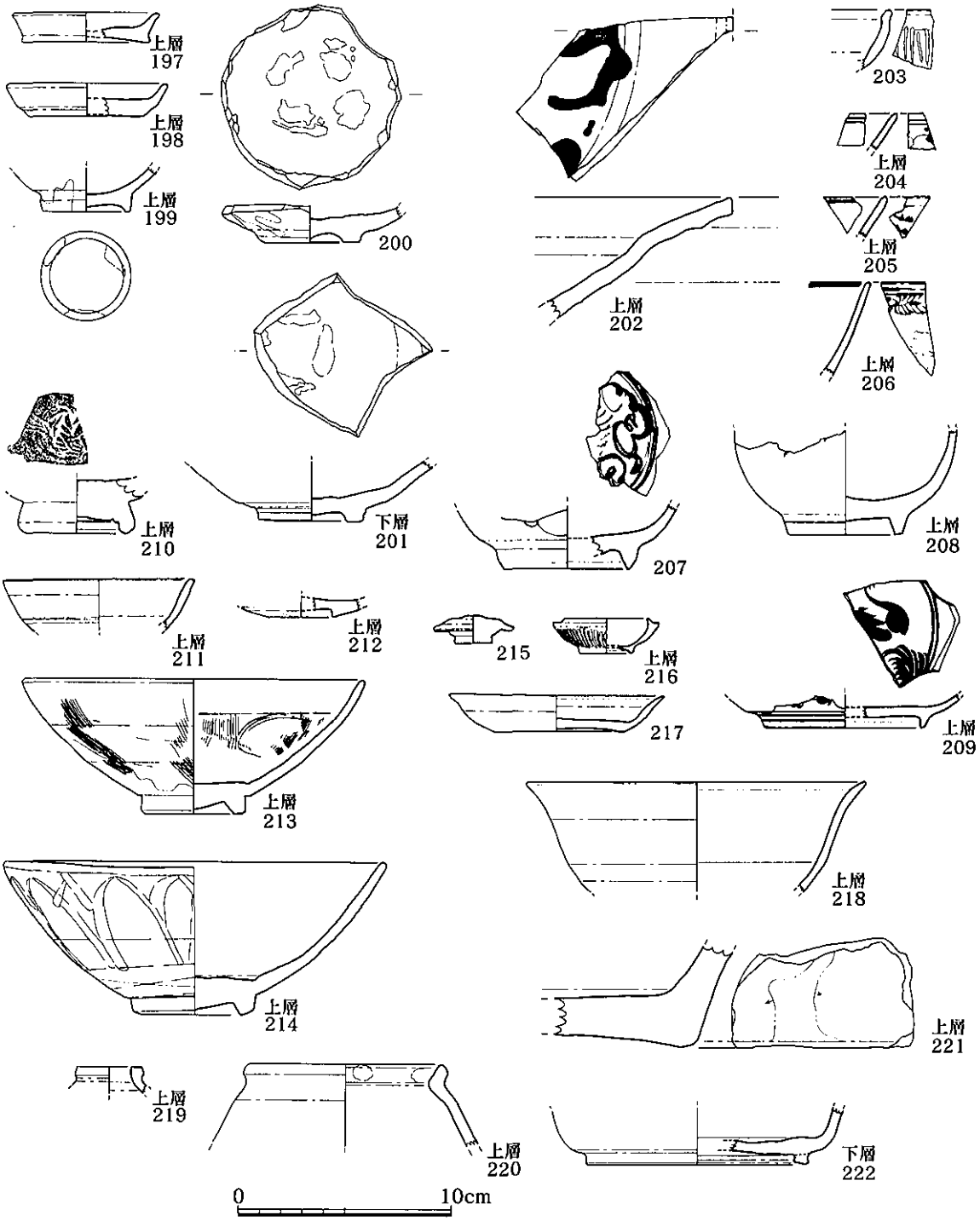
SD05
1.黒褐色土 (7.5YR3/1) シルト質
2.黒褐色土 (10YR3/2) シルト質
3.黒褐色土 (10YR2/3) シルト質。
黒褐色土ブロック少量含む。
4.灰黄褐色土 (10YR4/2) シルト質
5.褐灰色土 (5YR4/1) シルト質

0　　2m

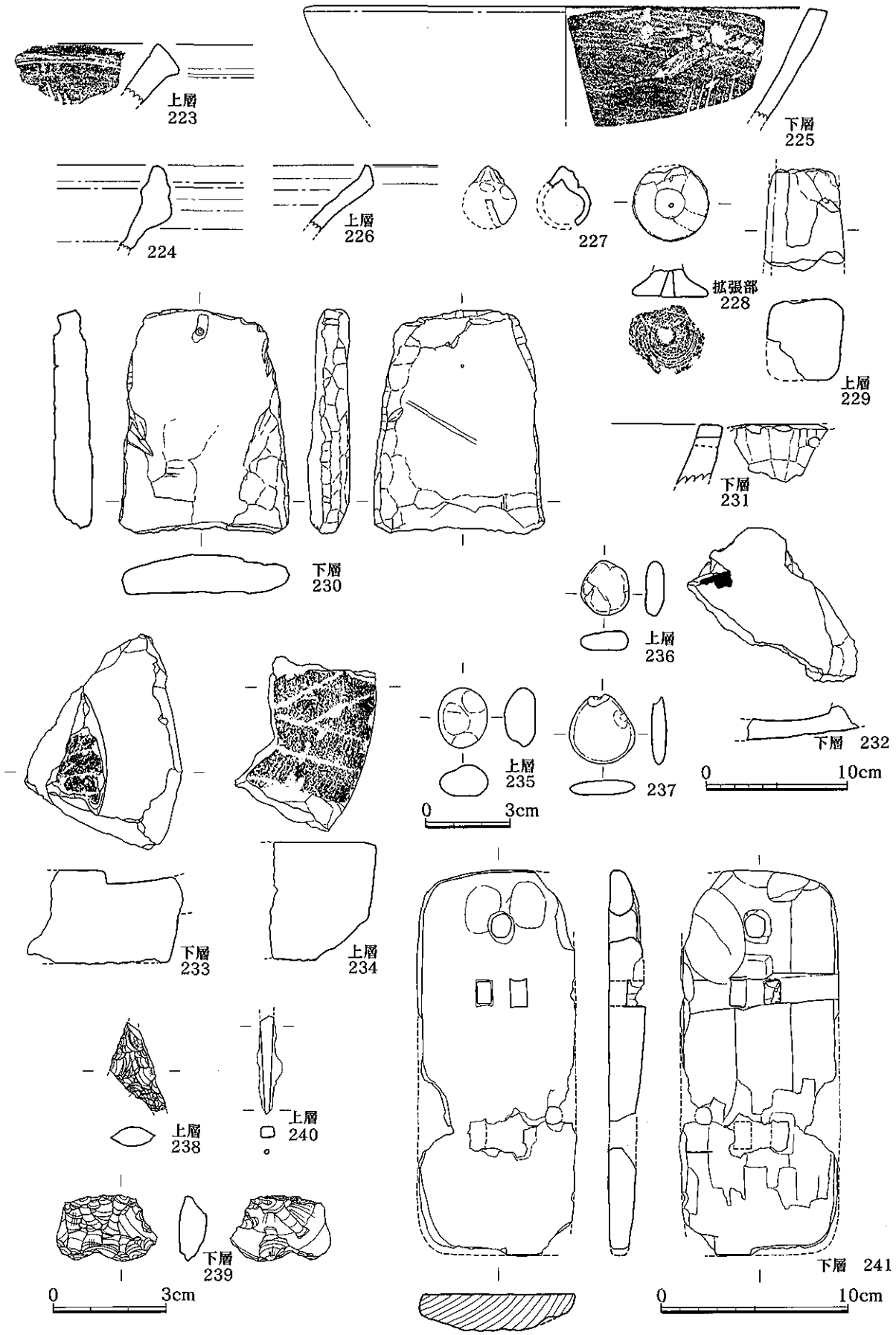
第31図　5区SD01～05土層断面図 (1/30)



第32図　５区SD01・03遺物実測図（1/3）



第33図　５区SD04遺物実測図（1）（1/3）



第34図　5区SD04遺物実測図（2）（232～234:1/4、235～237:1/2、238・239:2/3、その他:1/3）

うに見える。193は土師器小皿。194は朝鮮産陶器皿。灰色の胎土に緑色系釉を施す。目跡は現状で2ヶ所確認できる。

これら以外に、土師器片、瓦器片、青磁片（竜泉窯系、同安窯系）、白磁片（Ⅴ類ほか）、中国産陶器片、黒曜石片、須恵器片、須恵質土器片、焼土塊などが出土した。発掘土量に対して遺物量は多くなく、特に大形の破片も存在しない。

SD02（第6・31図）　調査区中央から北側にかけて検出され、遺構の北側は調査区外に続いている。SD01に西側上端を切られながら並走し、最大幅約0.7m、深さ10cmを測る。底面は概ね平坦で、北側でやや深くなる傾向があるが、明確でない。

遺物は土師器片（底部糸切り）、瓦器片などが出土したが図化できるものはない。

SD03（第6・31図）　調査区西側で検出された南東―北西方向の溝跡である。大形の撹乱に切られ、SD01との先後関係は不明である。最大幅約0.7m、深さ25cmを測り、底面は南側の方がやや深い。壁面の立ち上がりは、比較的急である。

遺物（第32図）　195・196は瓦器椀。いずれも器面が風化しているため調整は判然としない。

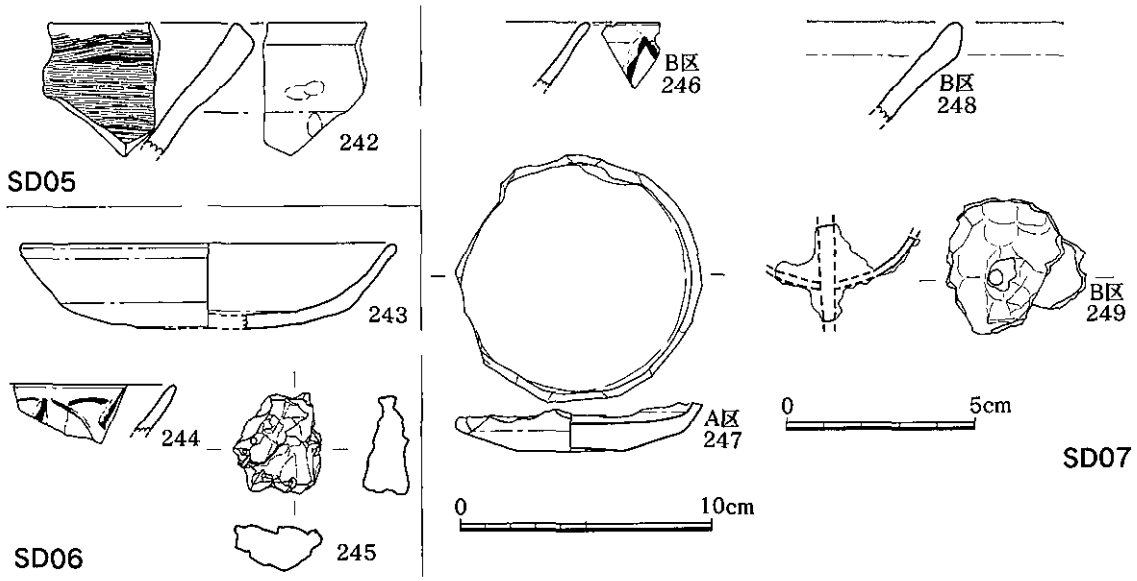
これら以外に、土師器片（底部糸切り）や焼土塊などが出土した。

SD04（第6・31図）　調査区中央から東側にかけて検出された。南側は調査区外に続くが、概ね「コ」字形に連続することが確認できる。最大幅約3.0m、深さ約1.1mを測る。底面のレベルは北西側でやや深い傾向があるが、大差はない。横断面の形状は、緩やかに窪む底面から、壁面がやや急に立ち上がり、壁面中位の傾斜変換点からは緩やかに上端に至る。SE04、SE06、SE07、SX34、SX42、SD05などを切る。

遺構南側の状況は調査区外に続くため不明であるが、本来はSD01と同様に方形にめぐる区画溝であると想定できる。この場合、東西の区画幅は約20m、南北の幅は23m以上と判断でき、他調査区の事例と比べてやや小形であることが分かる。

遺物は下部の粘質土（a－a´土層：8・9層、b－b´土層：5層）を下層、それ以上を上層として取り上げている。

遺物（第33・34図）　197・198は土師器小皿。底部と体部の境にくびれ、あるいは段を有する。199は肥前産陶器椀。高台部に3ヶ所の砂目跡が残る。200・201は肥前産陶器皿。内底面に概ね4ヶ所の砂目跡が残る。202は肥前産陶器大皿。体部内面に暗褐色釉を重ねる。203は朝鮮産陶器、合子の類か。象嵌により白色土で縦線を施す。204～207は中国産染付椀。中でも206・207は胎土が陶質で漳州窯系と呼ばれるもの。208は肥前産と思われる染付椀。高台底部に砂が付着する。209・212は中国産染付皿。209は内底面に植物などを描く。212は碁笥底を呈する。210は青磁椀。内底面に箆彫りで文様を施しているが、なぜかその部分には青磁釉が施されていない。釉を拭き取った痕跡も確認できない。竜泉窯系の可能性が高く、高台形から判断して太宰府分類Ⅳ類か。211は青磁小椀。213は同安窯系青磁椀。外面に細かい櫛目文、内面に櫛描き点描文、ヘラ描き略化花文を施す。214は竜泉窯系青磁椀。やや退化した蓮弁を施す。釉の発色は悪い。太宰府分類Ⅳ類。215は青白磁蓋。小壷とセットになるものか。最大径より下面は露胎。216は白磁合子身。体部外面に菊弁文を施す。217は白磁皿。太宰府分類Ⅸ類。218は白磁椀。太宰府分類Ⅸ



第35図　5区SD05～07遺物実測図（249:1/2、その他1/3）

類。219は陶器小壺か。外面～口縁部内面に褐釉を施す。220は陶器壷。221は陶器甕類。内面は露胎、外面は部分的に釉垂れが確認できる。胎土には粗い白色砂を多く含む。222は須恵器坏身。223・224は陶器擂鉢。223は備前産。224も備前産の可能性が高い。225は瓦質擂鉢。6単位の櫛目が確認できる。226は東播系こね鉢。227は土鈴。切り込み部が遺物の主軸と合致しない。228は不明陶器片。上下に貫通した穿孔があり、底部は糸切り。欠損している上部から緑褐色の釉垂れが確認できる。手掘りで調査区を拡張し、その際の遺構検出時に出土したもので、確実に当遺構に伴うとは断言できない。229は棒状土製品。断面形は方形を呈する。棒状土製品はこの1点のみであるが、周辺で瓦器焼成が行なわれた可能性もあり、注意を要する。230は滑石製温石。平面形はやや撥形を呈する。表裏面ともに穿孔を試みた痕跡があるが、その場所は一致せず、穿孔に用いた工具も異なるようである。未製品であろうか。231・232は滑石製石鍋。231は口縁部片で穿孔が認められる。232は底部片で外底面には煤が付着する。また、実測図のトーン部分には黒色の物質が認められる。この物質についてアスファルトのような補修材の可能性を考え、福岡市埋蔵文化財センターに分析を依頼した。蛍光X線分析の結果、亜鉛と鉄の化合物であることが判明し、さらに表面に鉱物の結晶も観察できることなどから、人為的な物質ではなく、滑石の原石に元々混入していた不純物の可能性が高いとのご教示を得た。233は茶臼の下臼。安山岩製。234は粉挽臼の下臼。凝灰岩製。235～237は碁石。235・236は白色を呈する石英製。237は黒色を呈する粘板岩製。器表面は極めて平滑である。238は石鏃。黒曜石製。239はスクレーパー。黒曜石製。240は釘状鉄製品。241は下駄。角型の差歯露卵下駄に分類される。『御笠の森遺跡Ⅰ』で報告した3区SD01・03出土の下駄と同類型である。なお、遺存状況が極めて悪く図化できないが、241に隣接してもう1点下駄が出土（図版13（3））している。

SD05（第6・31図）　調査区北側から東側にかけて検出された東西方向に直線的に伸びる溝跡である。遺構の西・東側とも調査区外に続く。最大幅約1.1m、深さ約40cmを測る。約28mにわたり検出したが、底面のレベルはほとんど変わらない。SX12・18、SD01など多数の遺構に切られる。

遺物（第35図）　242は瓦質鉢。内面に細かい刷毛目を施す。これ以外の遺物は、土師器片(糸切り底部含む)、瓦器片、同安窯系青磁片、白磁片などが出土した。

SD06（第６・31図）　調査区東側、SD05に並行するように検出された。検出した長さが約2.4mと短く、溝跡として報告するにはやや躊躇を覚える。最大幅約1.0m、深さ約30cmを測る。SD04に切られる。

遺物（第35図）　243は土師器丸底坏。244は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅱ類。245は鉄滓。

これら以外に、土師器片、瓦器片、白磁片、陶器片、須恵器片、焼土塊などが出土した。

SD07（第６・31図）　調査区東隅近くで検出され、平面形は「T」字形に近い。幅約0.5m、深さ２～25cmを測る。特に遺構の東端、北端の底面は緩やかに高くなり、徐々に遺構が途切れる。削平の状況を考慮すれば、本来もっと長さのある溝跡であったことが想定できる。遺構の西側は土坑状に膨らむため別遺構の可能性がある。遺物は、土坑状に膨らむ部分をB区、それ以外をA区として取り上げている。

遺物（第35図）　246は竜泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅱ類。247は竜泉窯系青磁皿。瓦玉に転用したものか。248は瓦質鉢。249は鉄製紡錘車であろうか。ボウル状鉄製品と棒状鉄製品を組合わせている。

これら以外には、土師器片、瓦器片、須恵器片、施釉陶器片、焼土塊などが出土した。

（5）その他の遺構

根締め石と考えられる角礫が出土したピットが３基検出された。これを紹介したい。

SP282（第36図）　調査区東側、SX44の北約0.5mで検出された。30cm×30cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。底面東側はやや窪む。礫は底面に接するように２点確認した。

遺物は、白磁片、土師器片が出土したが、隣接したピットと一緒に取り上げており、確実に当遺構に帰属できるものではない。

SP354（第36図）　調査区東側、SX39の北東約0.3mで検出された。66cm×55cmの楕円形を呈し、深さ38cmを測る。遺構の西側は２段掘り状に深くなっている。礫は５点出土しており、２段掘り部分の中心を半円状に囲むように分布している。

遺物は、土師器片、瓦器片、白磁片が出土したが、図化に堪えることはできない。

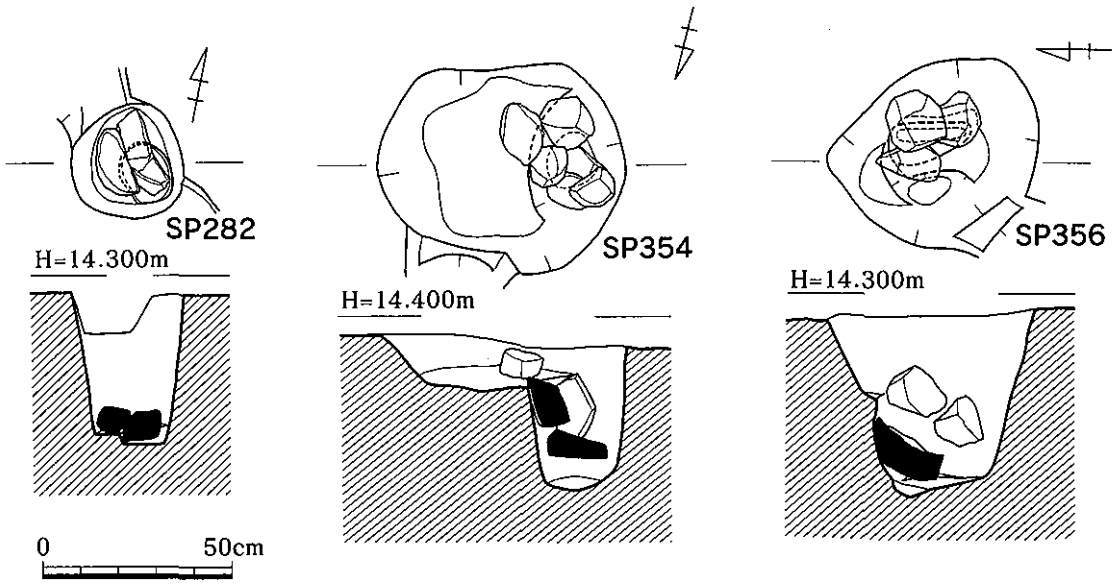
SP364（第36図）　調査区東側、SX39の北側に隣接する。55cm×50cmの楕円形を呈し、深さ48cmを測る。底面は２ヶ所やや深くなる。礫は３点出土しており、遺構の北東壁に接するように分布している。

遺物は、糸切りの土師器片や焼土塊が出土したが、図化に堪えることができない。

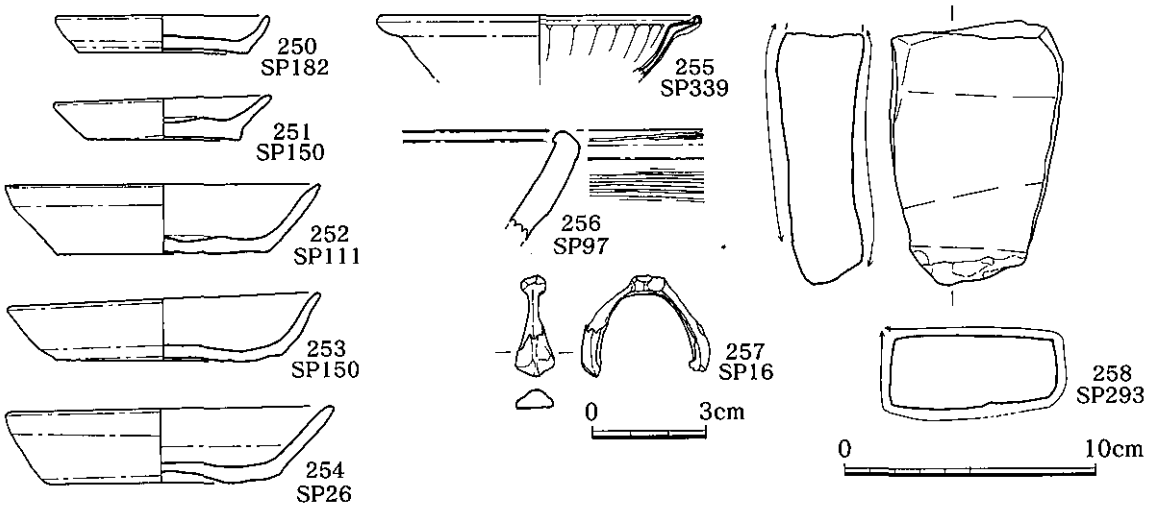
（6）その他の出土遺物

ピットから出土した遺物を紹介したい。

遺物（第37図）　250・251は土師器小皿。252～254は土師器坏。255は竜泉窯系青磁坏。体部内面を花弁形に削る。太宰府分類Ⅲ－３－b類。256は瓦質擂鉢。口縁部内面を肥厚させ、内外面に刷毛目を施す。擂り目の単位は２条確認できる。257は不明銅製品。表面の剥落が激しいが、銅芯に銀メッキを施す。258は砥石。砂岩製。



第36図　5区SP282・354・364実測図（1/20）



第37図　5区ピット遺物実測図（257:1/2、その他:1/3）

（7）小結

A．各遺構の時期

まず、出土遺物から遺構の時期を見てみたい。なお、土坑などからの遺物量は多くなく、明確な年代観とはいえない。

井戸跡　SE01は、瓦器椀の出土から12世紀以降。SE02は、土師器小皿の法量や、白磁Ⅳ類、瓦器椀の出土から11世紀中頃～12世紀前半。SE03は、土師器小皿の法量や瓦器椀の形態から12世紀初頭～前半。SE04は、糸切りの土師器小皿が含まれる点、瓦器椀の形態から、12世紀中頃～後半か。SE05は、土師器坏の法量から下限は13世紀前半か。SE06は、丸底坏、瓦器椀、白磁Ⅳ類から12世紀前半～中頃か。SE07は時期不明。

土坑　SX01は、各種の貿易陶磁器から12世紀後半前後。SX02は火縄銃の弾丸と考えられる鉛

玉の存在から16世紀中頃以降。SX06は土師器小皿の法量から13世紀末前後以降か。SX08は瓦器椀から12世紀代。SX11は青磁皿から15世紀代か。SX13は白磁椀から11世紀後半以降。SX14は中国産染付から16世紀以降。SX15は土師器小皿・坏の法量、および竜泉窯系青磁椀II類、白磁椀IX類を勘案すれば、13世紀前半～中頃。SX16は白磁椀IX類から13世紀中頃～14世紀初頭前後か。SX17は土師器小皿・坏の法量、竜泉窯系青磁小椀II類から13世紀前半～中頃。SX18は白磁皿IX類、竜泉窯系青磁椀IV類から14世紀初頭前後以降。SX20は土師器小皿から13世紀中頃以降。SX30は白磁椀V類から11世紀後半以降。SX39は土師器坏の法量、白磁椀IX類から13世紀中頃～後半。SX40は瓦器椀の出土はあるが、土師器小皿の法量などから13世紀後半以降か。SX41は土師器小皿が底部ヘラ切りであることや白磁椀IV類から12世紀中頃前後。SX42は土師器坏の法量から12世紀後半～13世紀前半か。SX44は土師器小皿・坏の法量などから13世紀前半～後半。SX45は土師器小皿・坏の法量、瓦器椀、白磁IV・V類、同安窯系青磁椀、竜泉窯系青磁椀I類、陶器鉢、滑石製石鍋の形態などから12世紀後半前後。白磁皿IX類や陶器小壷は、これらとは同一時期とは考えられず、本来切っていた遺構を確認できなかった可能性が高い。SX46は土師器小皿の法量から12世紀後半か。

溝跡　SD01は中国産染付、朝鮮産陶器椀から16世紀代。SD02は瓦器が出土し、SD01に切られるため12世紀～16世紀。SD03は瓦器椀から12世紀以降。SD04からは比較的多量の遺物が出土し、その年代幅も広い。中国産染付、肥前産陶器、備前焼擂鉢といった遺物から判断すれば16世紀代に掘削され、17世紀前半に埋没した可能性が高い。SD05は、図化していないが糸切りの土師器が出土していることから12世紀後半以降。このSD05は、SD01・04と全く方向が異なっており、ある程度の時間差が想定され、多くの他遺構に切られていることや３区の調査成果を参考にすれば、上限である12世紀後半を大きく下らない可能性が高い。SD06・07は竜泉窯系青磁椀II類の出土から、13世紀初頭前後以降。

B．遺構配置

遺構配置を見てみると、まず溝状遺構のあり方が興味深い。特に「L」字形に屈曲するSD01と「コ」字形に屈曲するSD04は、本来方形にめぐる「区画溝」であると想定され、『御笠の森遺跡Ⅰ』で報告した１～４区と同様の状況が続いている。なお規模については、SD04に囲まれた空間は、東西約20m×南北23m以上、SD01に囲まれた空間は、東西35m以上を測り、明確な差異が認められる。

この空間の性格については、いわゆる「屋敷地」に相当すると考えられ、確かに空間内には多くの遺構も分布している。しかしながら、16～17世紀の溝跡に対し、その他の遺構は12～13世紀を中心としたもので、現時点で同一時期の遺構は認められない。掘立柱建物跡（SB01）についても、方向性は類似するものの、区画された空間外での検出であり、並行関係を肯定する根拠に欠ける。さらに、1区SD04～08、３区SD01・03、４区SD04などと比べ、SD01・04とも土量に対して16～17世紀の遺物量は非常に少なく、これらのことから空間内に安定的に居住していたとは考えづらい。

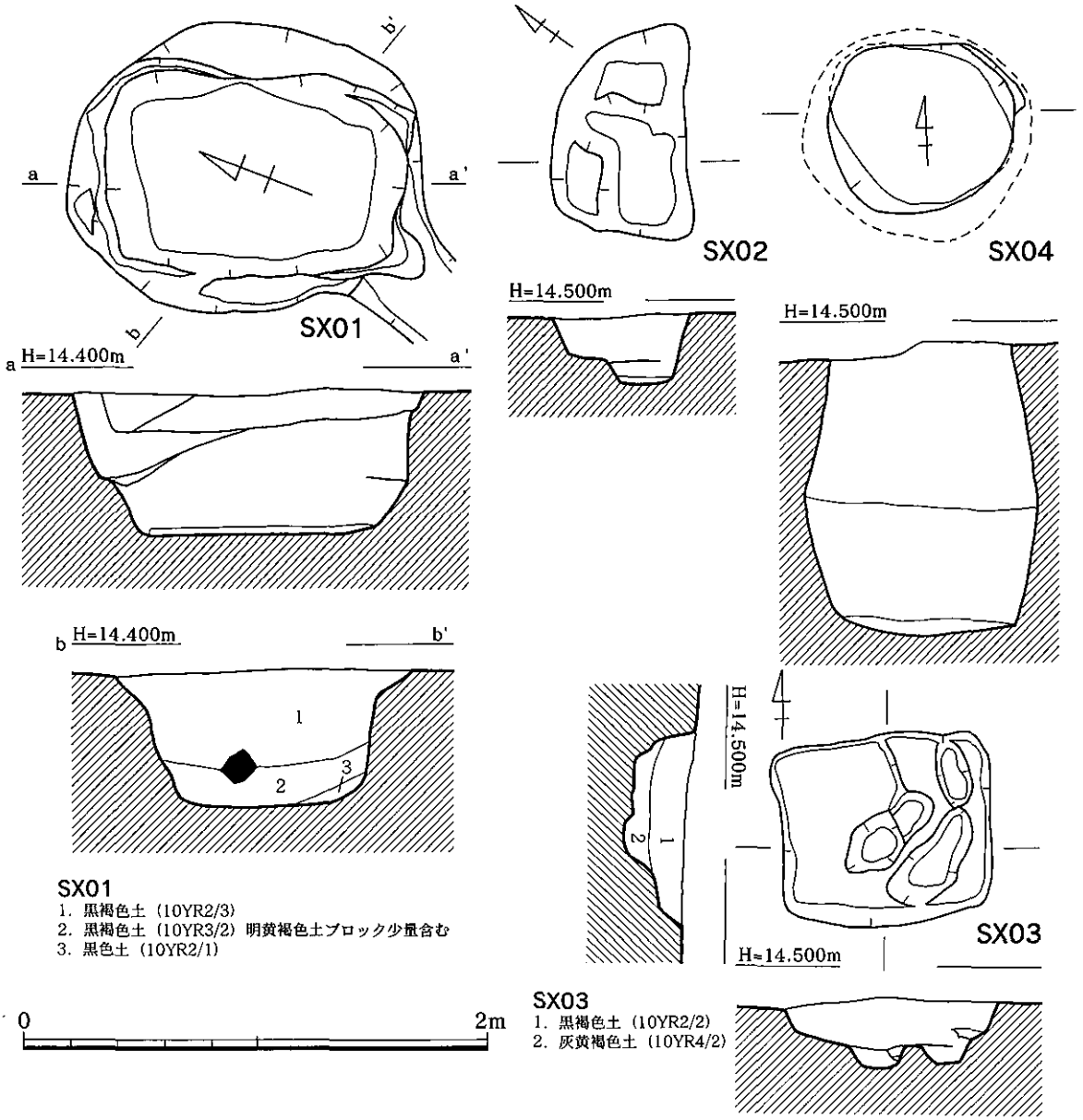
2．6区の調査

市指定文化財「御笠の森」の北西側にあたる。遺構配置図（第6・7図）は5区と合わせて示している。調査面積は399㎡。検出面の標高は14.3m～14.4mを測り、調査区内での明確な高低差はない。土坑、溝跡、ピットが検出されたが、その密度は低い。配置図上でピットとした部分についても、非常に浅いものが多く、中には人為的でないものも含まれる可能性が高い。

（1）土坑

4基を確認した。

SX01（第38図）　調査区西壁近くに位置する。1.01m×0.83mの楕円形を呈し、深さ62cmを測る。底面は平坦で、平面形は方形をなす。壁面は横断面・縦断面とも立ち上がりが急である。形状から判断して、土坑墓、木棺墓の可能性も考えられるが、土層観察の所見ではそれを肯定する要素は見当たらない。SD02を切る。



第38図　6区SX01～04実測図（1/30）

遺物は、土師器片（底部糸切り）、瓦器片、須恵器あるいは須恵質土器片が出土したが、図化に堪えることができない。

SX02（第38図）　調査区北東側に位置する。0.63m×0.38mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。２ヶ所にテラスが形成され、壁面の立ち上がりは比較的急である。

遺物は土師器片が出土したのみであり、図化に堪えることができない。

SX03（第38図）　調査区東側に位置する。0.6m×0.55mの方形を呈し、深さ30cmを測る。底面には、ピット状の窪みが複数確認できる。

遺物は、古墳時代の可能性が高い土師器甕片が出土した。胴部片のみで図化に堪えることができない。

SX04（第38図）　調査区東側、SX03の南約６mに位置する。0.52m×0.48mの楕円形を呈し、深さ128cmを測る。壁面中位はオーバーハングする。埋土は上層に黄橙色土ブロックを含む黒色土が厚く堆積し、底面近くに灰色粘質土が堆積していた。平面規模はあまりにも小さいが、断面形状や埋土の堆積状況から、井戸としての機能も想定できる。

遺物は、土師器片や木器片が出土したが、図化に堪えることができない。

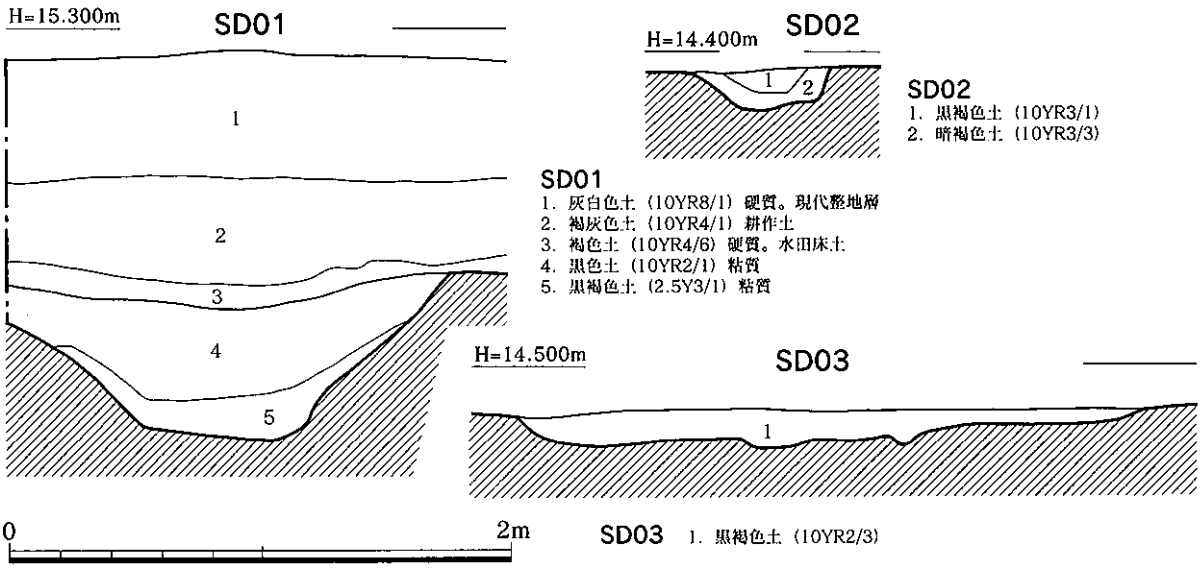
（2）溝跡

SD01（第６・39図）　調査区北西隅で検出された。幅2.2m以上、深さ65cmを測る。土層図を示した場所ではわからないが、全体的に２段掘りとなり、下段の上端幅は1.44m、深さ47cmである。溝跡は南側で急激に途切れ、そこから細く浅い溝跡が若干続く。この細く浅い溝跡はSD02に切られている。

遺物（第40図）　259は土師器坏。260・262は陶器盤類。いずれも内面に黄灰色釉を施す。261は陶器壷類。残存部全面に灰緑色の釉を施す。

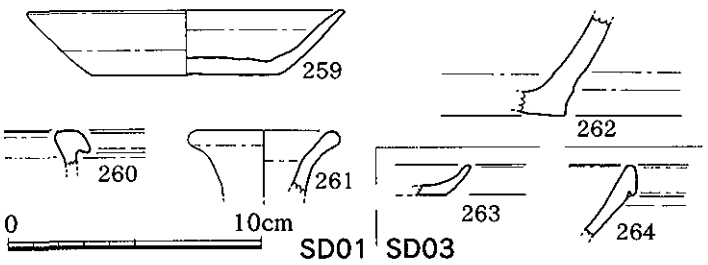
これら以外に、土師器片、瓦器片、白磁片、青磁片が出土した。

SD02（第6・39図）　調査区北西隅近くで検出された。約14m確認したが、南側は調査区外にも続いている。北側は調査区壁面近くで途切れるが、この部分の検出面がやや低くなっているの



第39図　６区SD01～03土層断面図（1/30）

が要因であろうか。最大幅0.68m、深さ15cmを測る。他遺構との先後関係については、SX01、SD01を切り、SD03に関しては、最後まで判断することができず、併存した可能性もある。



第40図　6区SD01・03遺物実測図（1/3）

遺物は、須恵器片、瓦器片が出土したが、図化に堪えることができない。

SD03（第6・39図）　調査区北西隅近くで検出された。幅3.46m、深さ15cmを測る。底面のレベルに明確な比高差はなく、SD02との先後関係は不明である。

遺物（第40図）　263は土師器小皿。底部糸切り。264は白磁椀。太宰府分類Ⅳ類。これら以外に、土師器片、瓦器片、須恵器片、滑石製石鍋片、青磁片、黒曜石砕片などが出土した。

SD05～07（第6図）　調査区の南側で検出された。いずれも幅0.3m以下、深さ数cm程度と極めて浅い。いずれも方向は並行あるいは直交する。埋土は黒色土であった。機能は不明であるが、SD05～07は関連した性格が想定できる。

遺物は、SD05から土師器片が1点出土したのみである。

（3）小結

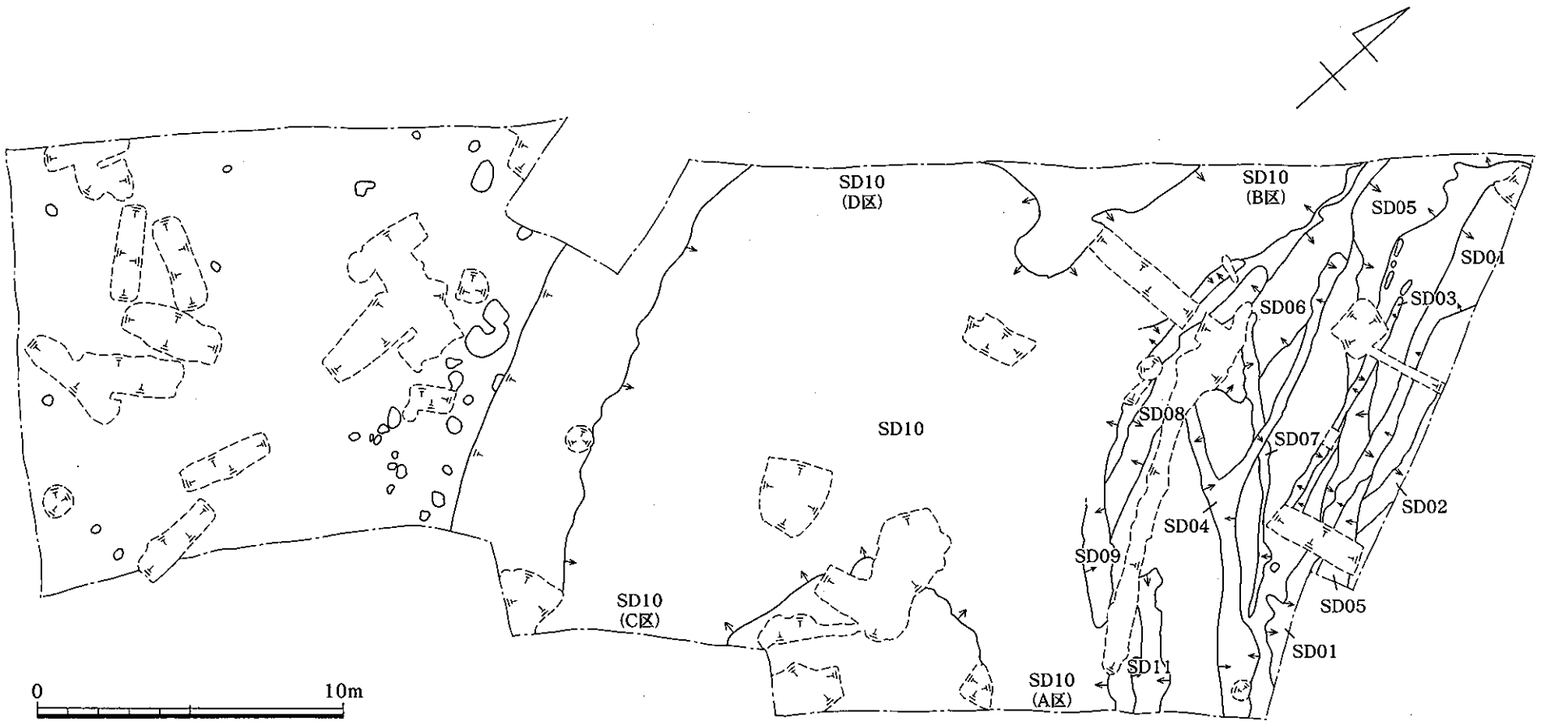
6区の特色といえるのは、当節の冒頭に示したとおり、遺構密度が低いことである。また、出土遺物も僅少で、時期の明確な遺構はなく、他の調査区のように遺構の変遷等について検討するのは困難といえる。

こうした状況は、遺跡の縁辺の様相を示していると考えられ、当区より南西側で遺構が確認できない（平成13年試掘調査）ことと符合する。

なお、この試掘調査の結果によれば、6区より南西側は地山面が総体的に低くなる傾向があり、このことが遺跡が途切れる要因の1つとして考えられる。



第41図　７区遺構配置図（1/200）



第42図　７区遺構切り合い図（1/200）

３．７区の調査

７区は６区から西に約130m、県道112号線から東に約40mの位置にあたり、面積は715㎡を測る。検出面の標高は約15.3～14.3mであり、調査区西側が高く、調査区中央の段落ちから東側は低くなっている。遺構は調査区西側で少数のピットを検出したが、人為的ではないものが含まれる可能性が高い。調査区東側では溝とわずかなピットが検出された。

（１）溝跡

SD01（第41・44図）　調査区東側で検出され、北西－南東に伸びる。幅60～132cm以上、深さは検出面から２～７cmを測る。北側は幅が広くなり、床面に別遺構の可能性のあるピット状の落ちこみが見られる。SD05を切る。

遺物（第45図）　265は土師器小皿。器面風化のため、底部調整不明。土師器片のみの出土であった。

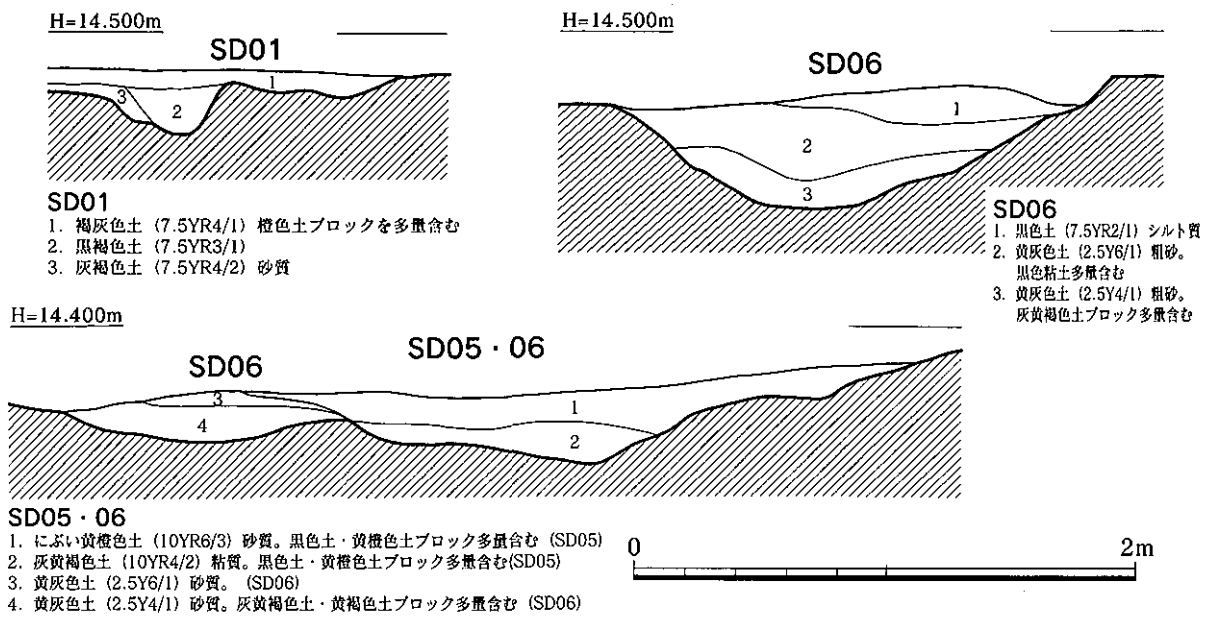
SD02（第41図）　調査区東側で検出され、やや湾曲しながら北西－南東に走る。幅70cm前後、深さは検出面から25cm前後を測る。埋土はシルト質の黒色土であった。SD05に切られる。

遺物は土師器片が出土したが、図化できるものはない。

SD03（第41図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走る。幅30cm前後、深さは検出面から2～5cmを測る。北側は特に浅く、溝が途切れる部分が見られる。埋土はシルト質の赤褐色土であった。SD05を切る。

遺物は土師器片、焼土塊が出土したが、図化できるものはない。

SD04（第41図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走り、途中二又に分かれる。幅30～100cm、深さは検出面から２～10cmを測る。二又に分かれた溝は幅が狭くなり、北西に伸びた溝は深さも浅くなる。埋土は上層がシルト質の赤褐色土、下層が黒褐色砂質土であった。SD06・07



第43図　７区SD01・05・06土層断面図（1/30）

を切る。

遺物は土師器片、中国産染付片（漳州窯系か）が出土したが、図化できるものはない。

SD05（第41・43図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走り、北側で屈曲し東に伸びる。また、北側の底面にはいびつな楕円形を呈した土坑が検出された。併存した可能性が高く、水溜状の機能が想定できる。溝状遺構は幅74～124cm、深さは検出面から20～68cmを測る。水溜状遺構は長径302cm、短径232cm、深さは検出面から90cm前後をなす。SD01・03に切られ、SD02・06を切る。

遺物（第45図）　266は土師器杯。底径に対して口径が大きな類。267は同安窯系青磁椀。これら以外に、土師器片、須恵器片、瓦器片、白磁片が出土した。

SD06（第41・43図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走る。幅130～210cm、深さは検出面から24～62cmを測る。SD04・05・07・08に切られる。

遺物（第45図）　268は土師器小型壷。内面の接合痕が顕著に観察できる。これ以外に、弥生土器片、土師器片（中世か）が出土した。

SD07（第41図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走る。幅は10～70cm、深さは検出面から2～10cmを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。SD04に切られ、SD06を切る。遺物は土師器片が出土したが、図化できるものはない。

SD08（第41・44図）　調査区東側で検出され、北西－南東に走る。幅は90cm前後、深さは検出面から2～17cmを測る。SD09に切られ、SD06を切る。

遺物（第45図）　269は染付椀。肥前産の可能性が高い。広東椀か。これ以外には、土師器片が出土したのみである。

SD09（第41・44図）　調査区東側で検出され、湾曲しながら北西－南東に走る。幅は50～110cm、深さは検出面から5～35cmを測る。SD08・10を切る。

遺物（第45図）　270は白磁皿。森田分類E群。高台先端部が露胎となり、高台内面に砂粒が付着する。

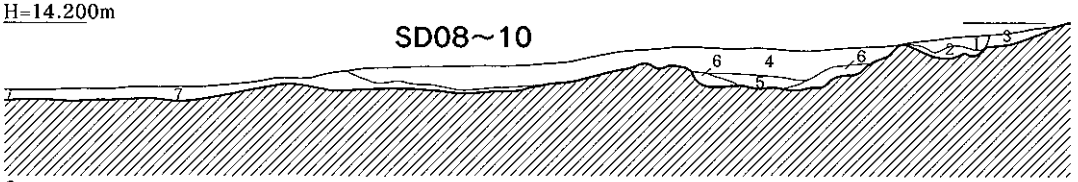
これ以外に、土師器片、須恵器片、瓦器片、青磁片、施釉陶器片、滑石片が出土した。

SD10（第41・45図）　調査区中央部で検出され、A～B区にかけては湾曲しながら北西－南東へ伸び、C～D区にかけては北西－南東に走る。最大幅は約16mを測り、その内で幾度かの掘り直しが行われたようである。土層観察では大きく見るとA・B区が黒色土、C・D区は黄橙色土ブロックを多量に含む褐灰色土が主体的に堆積している。よって、A－B区溝・C－D区溝は別遺構と考えたが、先後関係は確認できなかった。SD05を切り、SD09に切られる。遺物はA～D区に分けて取り上げた。

遺物（第45図）　271は土師器小皿。272は肥前産陶器皿。高台外側面まで施釉する。273～275は竜泉窯系青磁椀。273は太宰府分類小椀Ⅲ類に相当する可能性が高い。高台はやや尖り気味となる。青緑色釉を厚く、高台外側面まで施している。274は釉が灰色に発色している。275は外面に剣先状の蓮弁文を施す。276は青磁盤。口縁部に稜花を巡らし、内底面に片彫りで草花を描く。釉は全体的に厚く施される。277は土師質鍋。外面に煤が顕著に付着する。278は土師質擂鉢。279は不明金属製品。環状部を有する。錆の状況から鉄芯で銅箔の可能性が高い。

H=14.200m

SD08～10

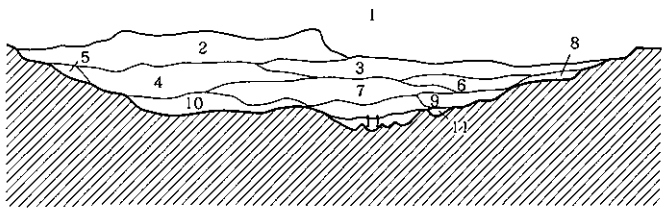


SD8～10

1. 灰黄褐色土（10YR5/2）（SD09）
2. 灰黄褐色土（10YR4/2）やや粘質（SD09）
3. 灰白色土（10YR7/1）粗砂多く含む。（SD08）
4. 黒褐色土（10YR3/1）やや粘質。細砂少量含む（SD10）
5. 黒褐色粘質土（2.5YR3/1）と暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）の混土。（SD10）
6. 黒色土（10YR2/1）粘質。軟質。（SD10）
7. 黒色土（2.5Y2/1）橙色土ブロック少量含む（SD10）

SD10（A区）

H=15.000m

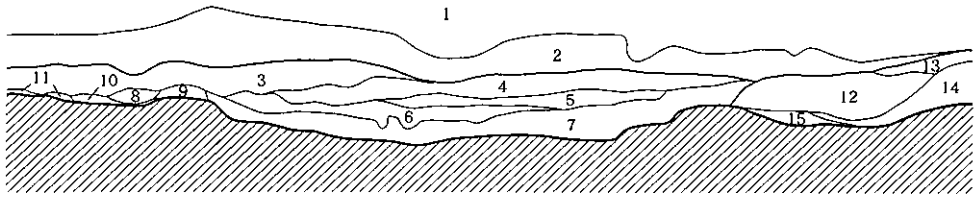


SD10（A区）

1. 灰白色土（7.5YR8/1）と褐灰色土（7.5YR4/1）の混土　現代整地層
2. 黒褐色土（10YR3/2）やや粘質。砂粒多量含む
3. 黒褐色土（2.5Y3/1）やや粘質。砂粒やや多量含む
4. 灰黄褐色土（10YR4/2）やや砂質
5. 黒褐色土（10YR3/1）やや粘質。砂粒多量含む
6. 褐灰色土（10YR4/1）やや粘質
7. 黄灰色土（2.5Y4/1）やや粘質
8. 黒色土（10YR2/1）やや粘質。砂粒多量含む
9. 黄灰色土（2.5Y4/1）粘質。軟質
10. 黄灰色土（2.5Y5/1）砂質。黒色粘質土ブロック多量含む
11. 灰黄色土（2.5Y7/2）砂質。硬質。黄灰砂質土ブロック多量含む

SD10（B区）

H=15.000m

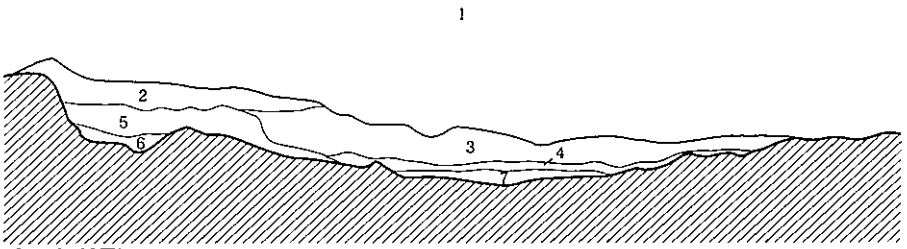


SD10（B区）

1. 灰白色土（7.5YR8/1）と褐色土（7.5YR4/1）の混土　現代整地層
2. 褐灰色土（7.5YR4/1）下位に鉄分沈着
3. 黒褐色土（7.5YR3/1）やや粘質
4. 灰褐色土（7.5YR4/2）やや砂質。黒色粘質土多量含む
5. 暗灰黄色土（2.5Y4/2）やや砂質。
6. 褐灰色土（10YR4/1）粘質。やや軟質
7. 灰色土（N4/）粘質。軟質
8. 黒褐色土（10YR3/1）やや粘質。砂粒多量含む
9. 黒色土（10YR2/1）やや粘質。砂粒やや多量含む
10. 黒色土（7.5YR1.7/1）やや粘質
11. 黒色土（2.5Y2/1）やや粘質。砂粒多量含む
12. 灰黄褐色土（10YR5/2）やや粘質。黒色粘質土・黒褐色砂質土多量含む(SD05)
13. 黒色土（5Y2/1）やや粘質。砂粒やや多量含む（SD05）
14. 灰黄褐色土（10YR4/2）やや粘質。黒色土・黄橙色土ブロック多量含む（SD05）
15. 灰黄色土（2.5Y4/1）やや粘質（SD05。SD06の可能性あり）

SD10（C区）

H=15.000m

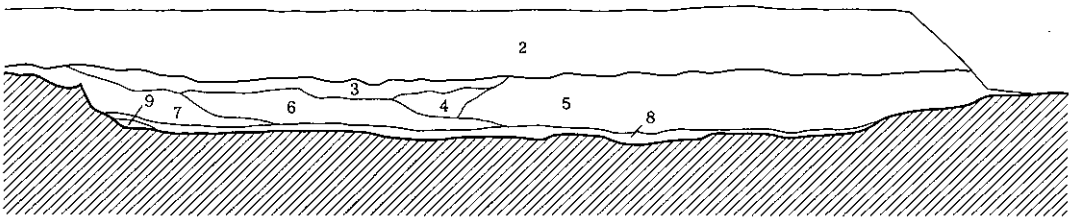


SD10（C区）

1. 灰白色土（7.5YR8/1）と褐色土（7.5YR4/1）の混土　現代整地層
2. 黒褐色土（10YR3/2）やや粘質。砂粒多量含む
3. 褐灰色土（10YR4/1）粘質。軟質。黒色土灰黄褐色土ブロック等多量含む
4. 灰色土（10Y4/1）粘質。軟質
5. 黒褐色土（10YR3/1）やや粘質。砂粒多量含む
6. 黒色土（2.5Y2/1）やや粘質。
7. 灰黄色土（2.5Y7/2）砂質。硬質。黄灰色砂質土ブロックを含む

SD10（D区）

H=15.000m

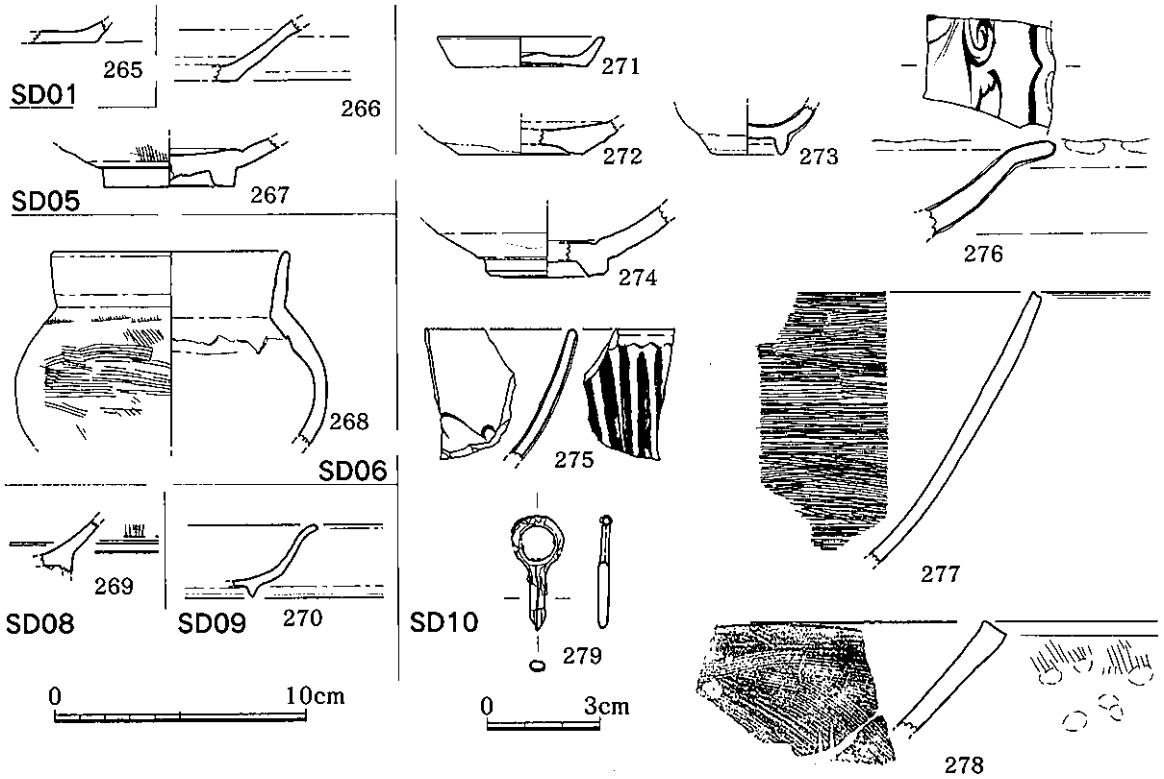


SD10（D区）

1. 灰白色土（7.5YR8/1）と褐色土（7.5YR4/1）の混土　現代整地層
2. 褐灰色土（7.5YR4/1）下位に鉄分沈着
3. 黒褐色土（7.5YR3/1）やや粘質。砂粒多量含む
4. 黒色土（10YR2/1）やや粘質
5. 褐灰色土（10YR4/1）・黒色土（10YR1.7/1）・黄橙色土（10YR8/8）の混土
6. 黒褐色土（2.5Y3/1）やや粘質。
7. 黒褐色土（10YR3/1）やや粘質。黄橙色・黒色土ブロック等を多量含む
8. 暗灰色土（N3/）やや粘質
9. 褐灰色土（10YR5/1）やや砂質

0　2m

第44図　7区SD08～10土層断面図（1/60）



第45図　7区SD01・05・06・08～10遺物実測図（279:1/2、その他:1/3）

これら以外に、土師器片、須恵器片、白磁片、青磁片（朝鮮半島産象嵌施文含む）、瓦片、滑石片、焼土塊などが出土した。

SD11（第41図）　調査区南東側で検出され、北西－南東に走る。幅は55～124cm、深さは検出面から1～10cmを測る。北側から南側にかけて深さを増す。埋土は褐灰土であった。遺物は土師器片が出土したが、図化できるものはない。

（2）小結

7区は、1～6区までと大きく距離が離れた調査区であり、その遺構のあり方も次の二つの点で特徴的である。

まず、SD10を境に西側と東側で遺構の様相が違う点が挙げられる。東側で複数の溝跡が検出されたのに対し、西側はわずかなピットのみが検出されたに過ぎない。遺物も殆ど出土しておらず、活発な土地利用があったとは考えづらい。

次に、SD10より東側の遺構の殆どが溝跡である点が挙げられる。溝幅の極端に広いSD10やL字形に屈曲するSD05、湾曲するSD09、二又に枝分かれするSD04などいくつかのバリエーションが認められるが、基本的に同じ方向性を持っている点は重要である。これらの溝跡、特にSD10の性格については、7区周辺の小字名が「境」であることに関連する可能性があり、SD10より西側では遺物が殆ど出土しなかったことも、この意義付けに符合する。しかしながら、このSD10を山田村の「境」と考えた場合、7区の東側の隣接地で遺構が確認できず土地利用の状況が不明で

あることや、村境に溝を掘る必要性など、問題点も多い。

遺構の年代観については、遺物量が少なく判断しがたい。あえて言えば、SD04・09では埋没年代の上限が16世紀、SD08・10では近世まで下る。特にSD08の肥前産染付椀は、18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる。こうしたことから、御笠の森遺跡（１～６区）の盛期（12世紀～17世紀）の後半には、溝跡は出現し、その後も継続して存続したことが分かる。

４．１区・３区出土の未報告遺物

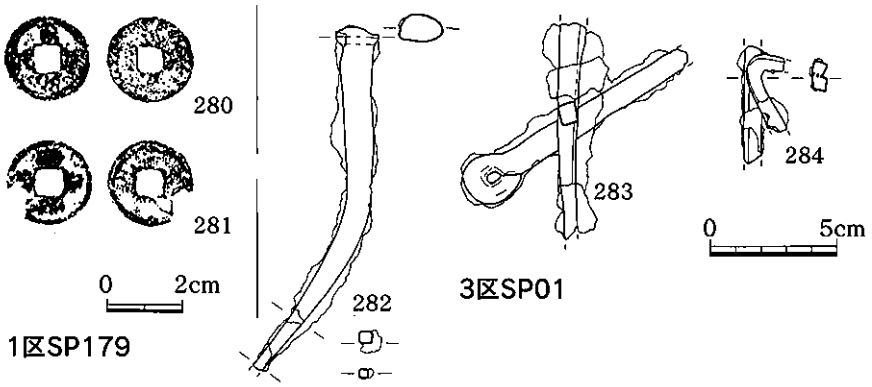
１区～４区の遺構・遺物については、『御笠の森遺跡Ⅰ』において報告したが、次に示す遺物は、その際に報告し損ねたものである。(第46図)

280・281は銅銭。いずれも文字は不鮮明であり、銭種は不明。ともに１区SP179出土。

282～284は鉄製品。３区SP01（付図１）出土。いずれも和釘、あるいはそれに類するものと考えられる。282は現状で長さ15.0cmを測る大形品。頭部はやや肥厚する。283は２点が錆着したもので、１点は頭部が円環状をなす。284も２点が錆着したもので、１点は折釘になるものか。３区SP01からはこれ以外にも複数の和釘状の鉄器片が出土している。出土状況は『御笠の森遺跡Ⅰ』図版18（2）に示すとおりで、ピット中央に折り重なるように確認され、柱の抜き取り後に廃棄あるいは埋納された可能性が高い。

図版32（右最下）は鯨の脊椎骨。径8.8cmを測る。３区SD03下層出土。奈良文化財研究所の松井章氏に鑑定していただいたところ、10m前後あるいはそれ以上の体長が想定できるという。脊椎骨前面には、刃物で削ったような痕跡が各所に見られ、連なった脊椎骨を切り分ける際、あるいは肉を削ぎ取る際の刃物の痕跡であると考えられる。

これ以外の動物遺存体としては、やはり３区SD03下層からイシガメの腹甲、イシガイの殻皮が出土した。イシガメ、イシガイとも淡水産で、食用になるという。



第46図　１区・３区未報告遺物（280・281:1/2、その他:1/3）

Ⅳ．まとめ

１．遺跡の消長

１区～４区の遺跡の消長に関しては、『御笠の森遺跡Ⅰ』Ⅳ章において示したとおりであり、大きく重複するが、ここでは５区～７区の成果を含め、改めて述べておきたい。

Ⅰ期（縄文時代～古墳時代）　本遺跡で最も古い遺物は、縄文時代の所産と考えられる１区SD03出土の姫島産黒曜石製石鏃が相当するが、この時代の遺構は確認できない。続く弥生時代には４区で中期初頭の溝跡（SD01）が検出されたほか、弥生土器は後世の遺物に混じって１区から５区まで少量ながら確実に出土している。古墳時代前期には、２区SX10のみが確認される。

当該期は、遺物量が少ないうえに、遺構はこれらのみであり、安定的な集落の存在は認められない。

Ⅱ期（７世紀後半～８世紀）　７世紀後半に３区SE02、８世紀後半に１区SE02が相当する。特に1区SE02は、複数の曲物とともに、完形の墨書土器（土師器杯）が出土しており注目される。また３区～５区の後世の溝跡などからは、８世紀後半を中心とした須恵器が出土しており、これに混じって瓦片も一定量出土している。１区SE01以外に当該期の遺構が確認できない現状では判断できないが、墨書土器や瓦、さらに4区SD04から出土した石帯（丸鞆）などは、いずれも「官」的な性格を帯びた遺物であり、８世紀後半前後の当遺跡の性格を考える上で大きなヒントといえるであろう。遺跡内を官道（水城東門ルート）の推定ルートが横断するという立地上の特性と関連するのかもしれない。なお、８次調査では奈良期の竪穴住居が検出されており、今後周辺の調査が進めば、集落の広がりや遺跡の特性も把握できるものとして期待される。

Ⅲ期（９世紀～11世紀前半）　当該期には、遺構の存在が確認されておらず、確実な遺物も出土していない。集落が一旦断絶するのか、調査区外に移っているのか、現状では判断できない。

Ⅳ期（11世紀中頃～12世紀）　白磁Ⅳ・Ⅴ類、同安窯系青磁などを指標とする。３区SE05・06、４区SE01・06、SX72、５区SE02～04・06、SX01・08・41・45などが相当する。特に３区SE05は11世紀中頃～後半、３区SE06は12世紀前半～中頃、４区SX72は12世紀後半の好資料といえよう。３～５区で広範囲に遺構が展開し、中でも５区は当該期の遺構密度が高い。

その後に継続する遺構群が出現したという意味で大きな画期といえよう。

Ⅴ期（13世紀～14世紀）　竜泉窯系青磁椀Ⅱ・Ⅳ類、白磁Ⅸ類などを指標とする。主体は14世紀前半までと想定するが、竜泉窯系青磁椀Ⅳ類の年代観など不明な点が多く、下限は明確にできない。大きく竜泉窯系青磁椀Ⅱ類の段階、Ⅳ類と白磁Ⅸ類の段階に分離できるが、ここでは一括して扱う。

４区SE04・05のほか、土坑の大部分、５区SE05、SX14～16・39・44など当該期に属し、特に４区の遺構密度は高い。４区の掘立柱建物の多くもこの時期の所産であろうが、重複関係から３度以上の建替えが想定できる。中でも、身舎面積51.1㎡を測る総柱建物（SB06）は、極端に規模が大きく、当該期の中心的な建物跡といえよう。

こうしたⅤ期の状況は、遺構の分布範囲や在り方がⅣ期と状況が類似しており、発展的に継続

した段階といえる。茶入れ（４区SX40）、天目椀・枢府系白磁（４区SX68）などの、一般的でない遺物も出土している。４・５区に比べ、１～３区の遺構は僅少であり、その差は明瞭である。

Ⅵ期（15世紀～16世紀）　白磁（森田分類Ｄ・Ｅ群）、中国染付、朝鮮産施釉陶器などが指標となる。なお、15世紀代の遺構として明確なものはほとんどなく、この要因が本来的に遺構が少ないのか、年代観の問題なのかよく分からない。

１区ではSE01・03、ＳＸ02・05・11、掘立柱建物跡（～Ⅶ期）など、２区ではSB02、SE01など、３区ではSE03など、４区ではSE02、SX60、SD05・06（区画溝）、５区SX11、SD01（区画溝）、７区SD04・09などが当該期の遺構と判断できる。また、埋没時期が17世紀となる１区SD04～06、３区SD01・03、５区SD04といった溝跡も掘削時期が16世紀代まで遡る可能性は高い。

こうした状況から、13～14世紀前半に４区・５区に集中していた遺構群は、15世紀代に急激に減少する様子がうかがえ、１区を中心としてわずかな遺構と、遺物の分布を見るのみとなる。続く16世紀になると、後半期を中心に全ての地区で遺構が確認されており、特に当遺跡を特徴付ける小規模で規則的な方形区画の形成もこの時期に成立したものと考えられよう。これら方形区画の形成時期が全て同時期とは判断できないが、遺物の年代観や区画が切り合わず方向性が同一なことなどから、少なくとも16世紀後半には併存していた可能性が極めて高い。

１区の掘立柱建物跡については、Ⅵ～Ⅶ期に10棟確認されているが、重複関係から４度以上の建替えが想定でき、主軸方向からSB02・03・08、SB04・06・07・10、SB01・05・09の３つのグルーピングが可能である。こうしたことから、身舎面積が35㎡を超えるSB04および08を中心とした２～３棟の建物跡が同時期に存在したと考えたい。

このようにⅥ期は前半期に一旦遺構が減り、その後１～５区までに溝を方形に巡らした区画が並ぶように展開することから、何らかの質的な変化があったと考えられよう。

Ⅶ期（17世紀）　肥前産陶磁器を年代観の指標とする。１区の溝跡群、３区のSE01・04、SX01・09、SD01・03、４区のSD04、５区SD04などが当該期に属する。基本的に前代の溝跡が継続的に利用され、小規模区画は踏襲される。ただ、４区を取り囲むSD06については、17世紀初頭前後には埋没し、また５・６区でも溝跡からの近世遺物は少量で、17世紀代にはほとんど居住地として利用されていない可能性が高い。

これら以外の各遺構（特に溝跡）の埋没時期は、いずれも17世紀中頃～後半と考えられ、この時期をもって、11世紀から続いた集落はほぼ終焉する。

Ⅷ期（18世紀以降）　肥前産陶磁器を年代観の指標とする。２区SX09、７区SD08・10が該当する。当該期の確実な遺物は極めて僅少で、１～６区では１点のみである。前代の集落が継続していたとは考えづらく、その位置づけは今後の課題といえる。

さらにその後については、明治33年刊行の大日本帝国陸地測量部の地図によれば、周囲は水田として利用されており、集落廃絶後しばらくして水田化したものと考えられる。

2．各種遺物について

これまで述べてきたように御笠の森遺跡からは、多種多様な遺物が出土している。このうちいくつかを取り上げ、位置づけ等を検討したい。

（1）石臼

石臼は、中世後半期から近世にかけての遺跡で、最も普遍的に出土する石製品といえ、県内の出土事例は、把握している限りでも300例（註1）を越えている。しかしながら、これを取り上げた論考は多くなく、普遍的がゆえに注目されていないのが現状である。

ここでは、御笠の森遺跡出土の事例を元にしながら、若干の検討を行ないたい。なお、本稿では粉挽き臼と茶臼をあわせて扱うこととする。

出土一覧　当遺跡では23点が出土している。出土遺構や特徴は第2表（註2）のとおりである。

図番号	遺構名	臼種(上・下)	分画数	石材	残存率	時期（出土遺構）	備　考
31-177	1区 SD05	茶臼（下臼）	不明	砂岩	小片	17c中頃～後半	31-177～124-1015は『御笠の森遺跡Ⅰ』にて報告済
31-178	1区SD05	茶臼（下臼）	不明	砂岩	小片	17c中頃～後半	
31-179	1区SD05	粉挽臼（上臼）	不明	凝灰岩	小片	17c中頃～後半	
31-180	1区SD05	粉挽臼（下臼）	不明	砂岩	1／6	17c中頃～後半	
31-181	1区 SD05	粉挽臼（下臼）	不明	凝灰岩	1／6	17c中頃～後半	
31-182	1区 SD08	茶臼（下臼）	6？	凝灰岩	1／2	17c中頃～後半	受熱
70-574	3区 SE03	茶臼（上臼）	8	砂岩	ほぼ完形	16c	
70-575	3区 SE03	粉挽臼（上臼）	不明	凝灰岩	1／2	16c	
71-576	3区 SX01	茶臼（上臼）	不明	砂岩	ほぼ完形	17c	
71-577	3区 SD01	茶臼（下臼）	不明	凝灰岩	小片	17c中頃～後半	
71-578	3区 SD03	茶臼（下臼）	不明	砂岩	小片	17c中頃～後半	
71-579	3区 SD03	粉挽臼（上臼？）	不明	凝灰岩	小片	17c中頃～後半	
71-580	3区 SD03	茶臼（下臼）	不明	砂岩	小片	17c中頃～後半	
71-581	3区 SD03	粉挽臼（下臼）	不明	凝灰岩	小片	17c中頃～後半	
71-582	3区 SD03	粉挽臼（上臼）	不明	凝灰岩	小片	17c中頃～後半	
71-583	3区 SP58	粉挽臼（下臼）	6？	凝灰岩	1／2	不明	
124-1011	4区 SE02	茶臼（下臼）	不明	砂岩	1／6	15c後～16c中頃	
124-1012	4区 SD06	茶臼（下臼）	不明	凝灰岩	1／6	16c	
124-1013	4区 SE02	粉挽臼（下臼）	不明	凝灰岩	1／4	15c後～16c中頃	
124-1014	4区 SD04	粉挽臼（上臼）	不明	砂岩	1／4	17c中頃～後半	
124-1015	4区 SD04	粉挽臼（上臼）	不明	凝灰岩	1／6	17c中頃～後半	
34－233	5区 SD04	茶臼（下臼）	不明	安山岩	小片	17c	本報告
34－234	5区 SD04	粉挽臼（下臼）	不明	凝灰岩	小片	17c	本報告

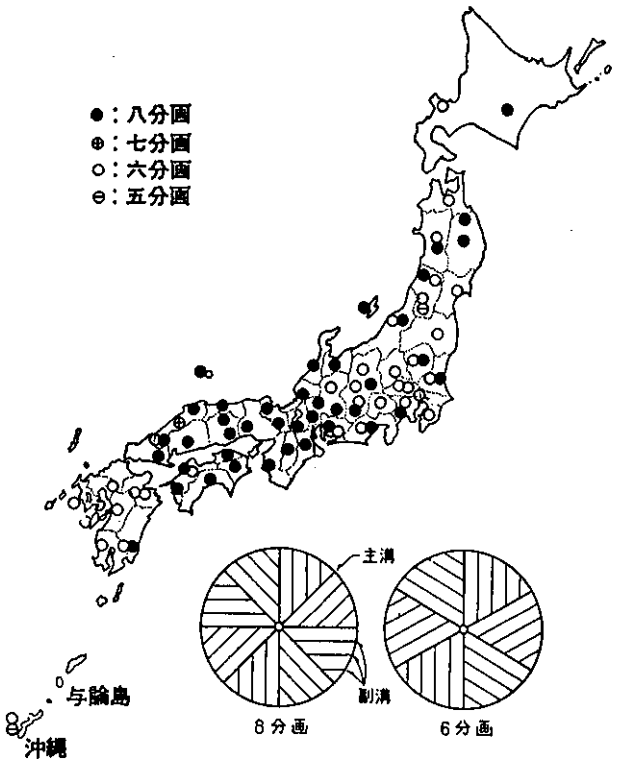
第2表　御笠の森遺跡出土石臼一覧表

石臼の出土数　県内で石臼の出土例が300例を超えることは先に述べたが、福岡市博多遺跡群、有田・小田部遺跡群、北九州市小倉城下町跡周辺など、都市遺跡、城郭、城下町などで特に多く出土する傾向が認められる。遺跡の存続期間や調査面積、報告者の意図などに大きく関わる問題であるが、御笠の森遺跡からの出土量23点が、他遺跡と比較して多い傾向であることは確かといえよう。

粉挽き臼と茶臼　石臼（挽き臼）は、製粉用の粉挽き臼と製茶用（註3）の茶臼とに大きく分けられる。特に茶臼の出土は、喫茶の風習があったことを示唆することになり、遺跡の性格付けを考える上で重要な遺物として知られている。しかしその一方で、現時点での県内集成では、334例

中142点の茶臼を確認しており、特に16～17世紀では予想以上に一般化しているとも理解できよう。

当遺跡でも23点中11点が茶臼であり、都市遺跡として知られる博多遺跡群の47点中26点や、小田部氏の本拠地であった有田・小田部遺跡群の33点中17点と比較しても、その比率に大きな遜色はない。高頻度の出土は、やはり一定の経済力と文化的素養をもった居住者層を想起することが妥当であろう。



第47図　石臼分画数の全国分布（三輪1978を一部改変）

分画数について　石臼研究の第一人者である三輪茂雄氏によると、石臼の磨り目の分画数には著しい地域差（第47図）（註４）が認められるといい、このうち九州は６分画の分布範囲とされている。確かに、旧家の庭の片隅や博物館に置かれた石臼は６分画ばかりが目につく。しかしながら、御笠の森遺跡の出土例をはじめ県内の出土資料を概観すると、必ずしも６分画が主体とはいえないようである。県内出土例のうち、分画数が明瞭で、資料が２分の１あるいはそれ以上遺存している例は、62例有り、これに基づけば６分画20例、８分画27例、その他（４・５・７分画）５例となる。時期別には17世紀以前の資料は６分画13例（うち茶臼１）：８分画23例（うち茶臼15）：その他５例（うち茶臼２）、18世紀以降（註５）の資料は６分画17例（うち茶臼１）：８分画４例（うち茶臼３）（註６）と分別できる。このことから、戦国期から江戸前期にかけては、粉挽き臼では６分画と８分画に数的な大差はなく、茶臼では８分画が圧倒するのに対し、江戸中期あるいは後期以降には、６分画が主体となっていった状況が明確に看取できる。

破片資料について　出土する石臼の多くが破片資料であることは、経験的に知られており、その要因についても、三輪氏（註４）や小池聡氏（註７）によって検討が加えられている。小池氏は、神奈川県下の出土事例を詳細に分析したうえで、「上臼の重量が作業続行に不可能な状態になった時、上臼・下臼ともに一対の粉挽き臼として、２分割あるいは４分割して廃棄されている」と考えた。当遺跡の資料では、ほぼ完存する茶臼上臼資料が２点あるが、粉挽き臼はいずれも２分の１以下の残存資料である。県内の出土資料を概観しても、この意図的な「分割・破砕」行為が一般的な傾向であることは強く認められる。また、分割・破砕後に受熱の痕跡があるものも認められ、一連の廃棄行為である可能性が高い。

三輪氏・小池氏によれば、この分割・破砕行為の要因として、民俗例から神聖な挽き臼に対する「魂ぬき」行為が想定でき、この行為を経て「ただの石」として廃棄することが可能であるという。

石材について　当遺跡出土資料の石材については、茶臼では砂岩７点、凝灰岩３点、安山岩１点、粉挽き臼では砂岩２点、凝灰岩10点という結果となり、茶臼では砂岩が、粉挽き臼では凝灰岩が優勢であるという傾向が見られた。この傾向は、福岡市有田・小田部遺跡群などでも同様であり、石材の特性と対象物を考えれば、合理的な使い分けともいえる。しかしながら、この使用傾向は広範なものとはいえず、例えば北九州市域では凝灰岩が比較的少ないなど、地域ごとの特色も見られる。

こうした石材の利用状況の検討は、生産地や流通の問題を考える上で極めて重要であるが、筆者は他遺跡の石臼を実見しておらず、また石材の記述のない報告例もあり、現状で踏み込んだ見解を示すことはできない。時期ごとの動向も踏まえ、今後の検討課題としたい。

（２）羽子板

出土遺構　４区SD04の２層から出土している。出土遺構の埋没時期は17世紀後半と考えられ、当遺物もこの年代を大きく遡らないものと想定される。

羽子板の出現　羽子板の出現は、文献上では室町時代中期の『年中定例記』、1444年の『下学集』、1544年の『世諺問答』に遡る。これらによると、当時は「胡鬼板（こきいた）」とも呼ばれ、子供が蚊に刺されないためのまじないの意味があったことが記されている。また「正月ニ之ヲ用ユ」とされ、当時から正月の行事として扱われていたことも興味深い。（註８）

考古資料としては、広島県草戸千軒町遺跡（13世紀後半～14世紀初頭）や神奈川県佐助ヶ谷遺跡（13世紀後半）といった資料が現時点の最古例として挙げられるが、九州でも博多遺跡出土のミニチュア品が13世紀後半から14世紀前半と考えられ、大きな時間差は認められない。

県内の出土例　羽子板はその後、戦国時代後半から江戸時代にかけて出土例を増やしていくことが知られており、福岡県内での出土例は、第３表のとおり管見の限り10遺跡12例（註９）におよぶ。

出土時期と性格　出土時期に関しては、大宰府史跡例、博多遺跡例を除き、17世紀代になり急激に広がる状況が伺える。遺跡の性格としては、城下町（竪町遺跡、両替町遺跡、呉服町遺跡）や、都市遺跡（博多遺跡）、宿場（木屋瀬宿本陣跡、原田第２号墓地）が主体であるが、御笠の森遺跡や北方遺跡のような集落遺跡でも発見されている。

全国的な傾向としても、17世紀代（特に後半）以降になって、多様な遊戯具が各地の町屋などから一般的に出土することが知られており、福岡県内の事例もこれに符合する。

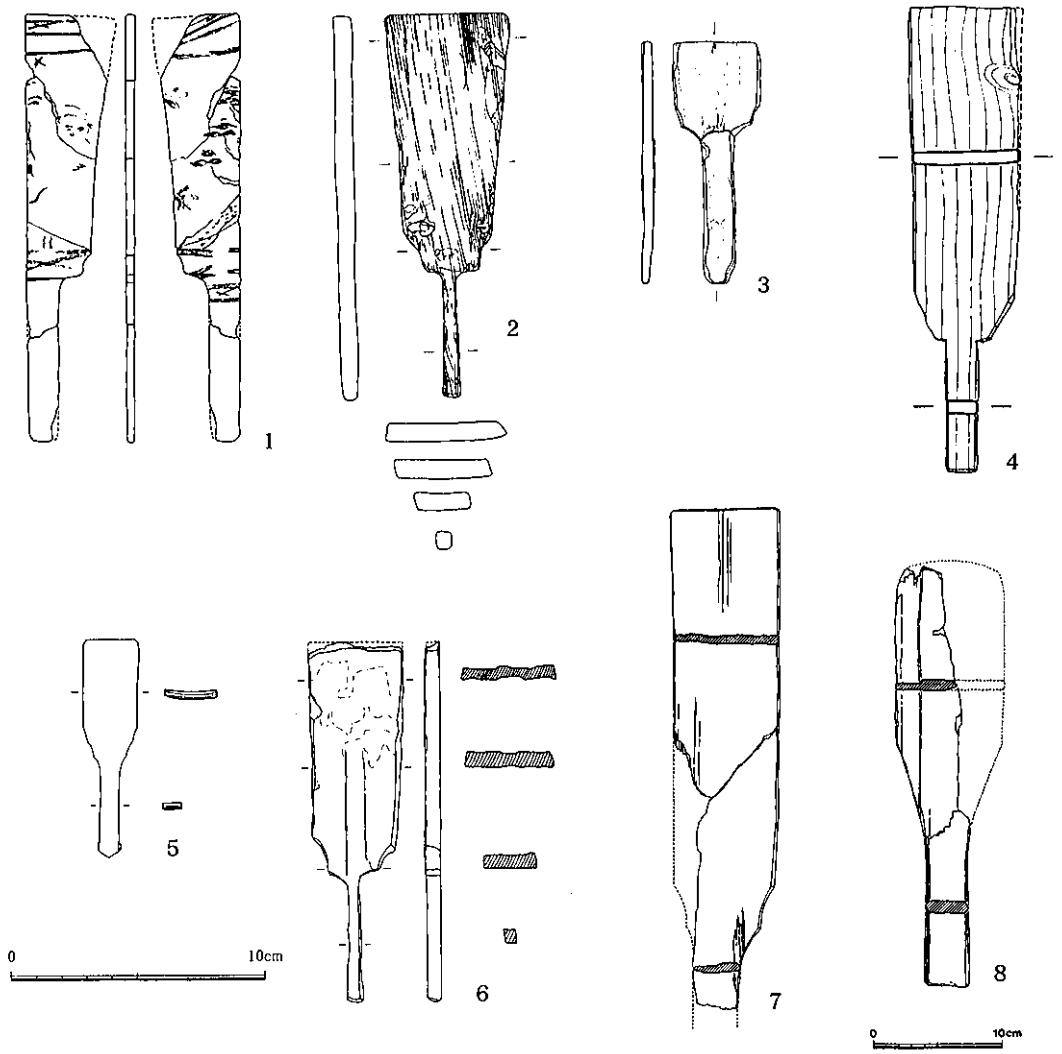
形状　羽子板の形状の中で、しばしば注目されるのは、取っ手のつけ根の抉り込みの有無である。江戸期の羽子板は、一段の抉り込みのある「二手切り」が圧倒的に多数であり、それ以前の資料には抉り込みがほとんどないことが知られている。福岡県内の資料も、器種認定に課題のある48図－８を除き、全て二手切りあるいは三手切りである。

なお、二手切り・三手切りの出現時期については、大阪城跡や一乗谷朝倉氏遺跡で見られるように、遅くても16世紀後半には一般的な形状として定着しているようであるが、博多遺跡群95次調査の出土資料（48図－５）を見る限り、その先駆けは14世紀代まで遡ると判断できる。

羽子板出土の意義　御笠の森遺跡で出土した羽子板は、遊戯具が幅広い階層に広がりはじめる時期に概ね相当し、その形状もスタンダードなものである。しかしながら、17世紀中頃～後半という時期は、全国的に見ても「集落」遺跡からの出土としては古く、１区SD05出土の独楽（註10）

遺跡名	所在地	出土遺構	法量（cm） 長×板部幅・柄部幅	時　期	遺跡の性格	備　考
北方遺跡	北九州市小倉南区	11号土壙	33.8×6.5以上・2.5以上	17世紀前半	集落	48図-1
竪町遺跡第1地点	北九州市小倉北区竪町	3号井戸	30.75×9.6・1.3	17世紀後半	城下町(町屋敷)	48図-2
木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡	北九州市八幡西区木屋瀬	2区2層並行	19.5×7.0・2.4	19世紀	宿場	先端切断、転用か　48図-3
〃	〃	1区船着場	37.3×9.5・2.7	19世紀	宿場	48図-4
博多遺跡第95次調査	福岡市博多区町屋町	埋立て遺構	8.6×2.2	13世紀後半～14世紀前半	町屋	ミニチュア 48図-5
御笠の森遺跡第9次調査	大野城市山田2・3丁目	4区SD04	28.6×7.6・1.0	17世紀中頃～後半	集落	48図-6
大宰府史跡78次調査	太宰府市大字観世音寺	SD2115	33.9以上×復元8.6・3.4	14世紀中頃～16世紀	寺域	48図-8
〃	〃	SG2130	40.4以上×8.4・3.9	14世紀中頃～16世紀中頃	寺域	48図-7
原田第2号墓地	筑紫野市大字原田	1号墓		17世紀後半以降	墓地(原田宿)	
両替町遺跡	久留米市城南町	池状遺構	17.7以上×8.0・？	17世紀初～中	城下町(町屋)	金・朱の彩色 柄欠損
〃	〃	池状遺構	21.3×5.0・？	17世紀初～中	城下町(町屋)	
呉服町遺跡	久留米市城南町	SK2	29.1×9.2・？	17世紀中～後	城下町(町屋)	

第3表　福岡県内出土羽子板一覧表



第48図　県内出土羽子板実測図（5:1/3、その他:1/6）

と合わせて、こうした新出の文化を取り入れた人々の階層の高さを示唆するものと考えられる。

（3）鉛弾（火縄銃の弾丸）

出土遺構　3区SD03上層と5区SX02から出土している。3区SD03の埋没年代は17世紀後半と考えられ、この年代が当遺物の下限となる。5区SX02は一連の遺構と考えられるSD01の年代観から、16世紀代に埋没したと想定できる。

鉛弾の大きさ　出土した鉛弾の直径は、10.5mm（3区SD03）、12mm（5区SX02）である。この大きさについては、いわゆる「二匁玉」にほぼ相当し、やや小振りながら比較的ポピュラーな玉種といえる。

火縄銃の伝来と展開　天文12年（1543年）にポルトガル人によって種子島にもたらされたというヨーロッパ式の火縄銃は、戦国期の社会情勢に伴って天文年間末頃には全国に広がったことが知られている。文献に記録されている当地域での使用初例は、1567年に太宰府での使用例が知られているが、これ以前にすでに用いられていた可能性も指摘されている（註11）。その後の展開については、戦国末期まで戦闘の場に盛んに用いられたが、1588年の豊臣秀吉の刀狩令によって武士以外による所持は原則禁止されたことは周知のとおりである。この刀狩がどの程度浸透したかは疑問であるが、江戸時代に至っても猪・鹿の農作物被害の防止策として、一部の農民層も鉄砲所持が認められていたという。

出土事例とその意義　他遺跡の出土事例については、十分に把握できていないが、少なくても16世紀代においては、山城などの城郭遺跡からの出土が圧倒的に多いようであり、その他の事例は極めて稀である。このことは、鉄砲の使用場面を考えても当然といえ、当遺跡からの出土は特異な在り方とも考えられる。

いずれにしても、当遺跡の住人自身が火縄銃を所持していた可能性は高いといえ、当地で集落を守るための小規模な戦闘があった可能性も否定できない。

3．16～17世紀の御笠の森遺跡

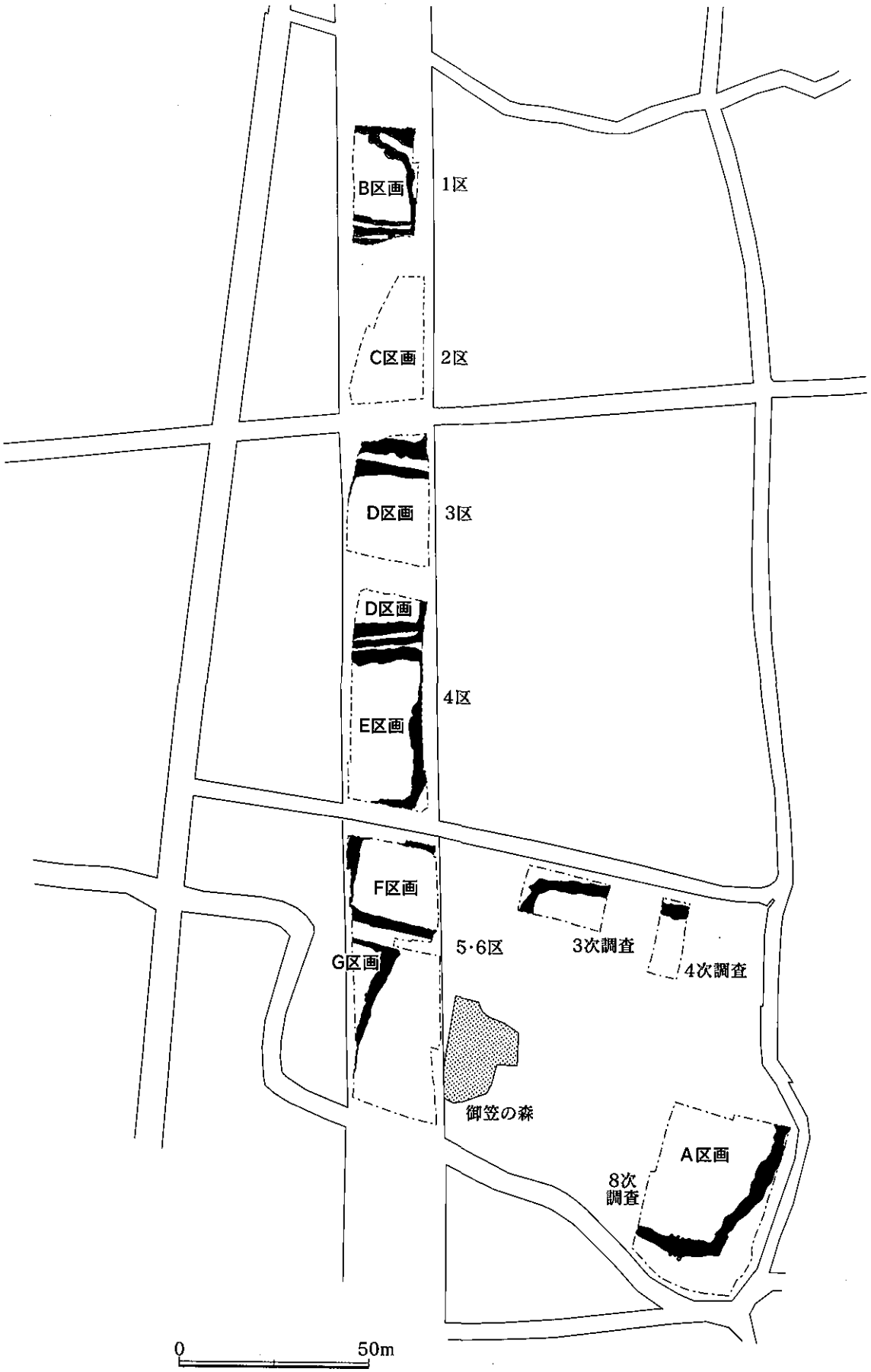
（1）方形区画について（第49図）

16世紀代に成立した溝（濠）による方形区画は、当遺跡を最も特徴付けるものといえる。ここではまず、過去の調査例を含め、各区画の規模・時期・区画内の状況等について整理しておきたい。

A区画…3次調査・4次調査・8次調査の大溝によって区画された範囲。東西幅約75m、南北幅約70m程度に復元可能である。未整理のため時期は明確にできないが、溝跡は、遅くとも16世紀後半代には掘削され、17世紀中頃～後半に埋没したと考えられている。区画内では、極めて多数のピットが検出されており、当該期の建物跡の存在が予想される。

B区画…1区SD05とSD08に区画された範囲。東西幅約25mを測る。溝跡の埋没時期は、17世紀中頃～後半に比定される。区画内では、15世紀後半～17世紀初頭の井戸跡2基、掘立柱建物跡10棟、土坑などが高密度で検出され、この時期には区画溝が存在したものと考えられる。

C区画…3区SD01の東側に位置する区画である。区画の東側の溝跡は判然としないが、1区SD06・07がこれに相当するか、あるいは1・2区間の未調査地点に存在した可能性が高い。区画



第49図　３・４・８・９次調査区画溝配置図（1/1,500）

幅は東西44m～52mと想定される。区画溝（３区SD01）の埋没時期は17世紀中頃～後半に比定できる。掘削時期は16世紀代の遺物も多く含まれることや、区画内で15～16世紀の複数の遺構が存在することなどから、少なくても16世紀代には遡ることができよう。なお、区画内での遺構密度は高くなく、井戸跡１基、掘立柱建物跡１棟、複数の土坑が検出された程度である。

Ｄ区画…３区SD03と４区SD04・05によって区画された範囲。SD04とSD05には先後関係があり、先行するSD05は16世紀後半には埋没し、後続するSD04は17世紀中頃～後半に埋没している。区画幅は３区SD03・４区SD05間が約44m、３区SD03・４区SD04間が約40mを測り、やや区画範囲を縮小していることが分かる。区画内には、井戸跡２基、土坑３基以上などが検出されているが、溝内の遺物量に対して、遺構密度は高くない。

Ｅ区画…４区SD06によって区画された範囲。東西幅約35mを測る。埋没年代は16世紀末～17世紀初頭となる。区画内には、井戸跡１基、土坑数基が認められる。掘立柱建物跡は、区画溝と同一方向であるが、出土遺物および他遺構の状況から戦国期より遡るものと判断できよう。

Ｆ区画…５区SD04によって区画された範囲。東西約20m、南北23m以上を測る。溝の埋没年代は17世紀前半～中頃と想定される。当該期の区画内には、少数の土坑が確認されるのみである。

Ｇ区画…５区SD01によって区画された範囲。東西幅35m以上を測る。接する現道の位置から、東西にやや長い区画が推測される。区画溝からは、国産陶磁器が出土しておらず、16世紀末には埋没しているものと考えられる。他の区画溝と比べ極めて浅く、最も深い部分で深さ約50cmである。区画内で当該期の遺構は確認されていない。

これまでＡ～Ｇ区画の規模・時期等を概観したが、いくつかの特色を挙げることができる。

①計画的な区画の配置が認められる。方向が同一であり、区画同士が切り合うことも、溝を共有することもない。各区画の間には通路状のスペースが確保されている。

②区画溝が途切れない。調査区内では、四方すべてを区画溝が巡っている。また、総じて溝幅は広く、２～４mが一般的といえる。

③規模に格差がある。全ての区画が正方形とは限らないため、今回の調査のみでは規模を明確にすることはできないが、Ａ区画の約75m×約70mが最大であることは間違いなく、溝自体も幅広で深さも比較的深い。それ以外の区画は、一辺約20m台～40m台の小規模区画であるが、この小規模区画においても、その規模に統一性は見受けられない。

④全区画が併存した可能性がある。区画溝は基本的に16世紀に掘削されたと考えられ、16世紀後半には併存した可能性が高い。16世紀末～17世紀初頭にかけてＧ区画、Ｅ区画が廃絶され、残りの区画は17世紀中頃～後半に廃絶していると想定される。

⑤区画内の遺構が極めて少ない区画がある。Ｅ・Ｆ・Ｇ区画では当該期の遺構は少なく、溝内の当該期遺物量も多くない。短期間の居住であった可能性や、土地利用のあり方が異なっていた可能性も指摘できる。

区画溝を巡らす要因としては、土地境を明示するため、湿気対策のため、外敵を防ぐため、という要因が想定される。御笠の森遺跡では、溝が途切れることがなく閉鎖的な区画であること、概して幅広である点から、防御的性格が重視された結果とも言えよう。

また先述したとおり、御笠の森遺跡からは、独楽・羽子板・碁石などの遊戯具、下駄、火縄銃の弾丸、茶臼など、一般の村落遺跡から出土しない遺物が複数出土しており、一定の富裕層の存在が想定される。こうした特殊遺物の分布状況は、明確な片寄りがなく、当該期の遺物総量に概ね比例するようで、現時点では区画ごとの格差は認められない。

（2）御笠の森遺跡の性格

多様な遺物および方形区画から推定される遺跡の性格としては、国人層に近い勢力の可能性も指摘できるが、文献や伝承に残っていない点、区画の規模などを考慮すれば、名主などの有力農民層（武装化した可能性あり）を想定することが最も妥当であろう。

近年、中世史の分野から、各集落が自衛のために、小規模な山城などを築き、戦闘に乗じた略奪行為等に備えたという「村の城」（註12）の存在が注目されている。戦国末期の大野城市周辺は、大友・島津氏などの有力大名に従う国人層の対立が激化しており、不安定な社会情勢が想定される。こうした情勢下においての自衛手段として、当遺跡のような四方に壕をめぐらした防御的性格の強い集落形態が必要となったのであろうか。こうして考えた場合、A区画は区画面積・溝幅・深さとも最も大規模で、集落の中心的な人物が居住するとともに、有事の際には重要な役割を果たした可能性が高い。

4．文献にみる御笠の森遺跡

18世紀に編纂された『筑前国続風土記拾遺』（註13）の山田村の項には、「此村昔は御笠の森の辺にあり、延宝のころ今の地に移せり、」と記載がある。つまり、「御笠の森」周辺にあった山田村が、延宝年間（1673～1681年）に「今の地」（遺跡南側の旧日田街道沿線周辺を想定）（第2・5図）に移転したという記録である。

先述のとおり御笠の森遺跡は、基本的に17世紀後半を下限としており、その終焉はいささか唐突に感じられる。さらに「御笠の森」の周辺に広がるという遺跡立地も勘案すれば、『筑前国続風土記拾遺』の記事と発掘調査の成果が符合していることは明確であり、御笠の森遺跡は移転以前の山田村に相当すると判断できる（註14）。

また以前、地元の人々が御笠の森の周辺を「古屋敷」と呼称していたことも、この判断を補強するものと考えられる。

しかし、この移転の契機が、何に起因するものか文献上の記録はない。郷土史を精力的に研究されている赤司岩雄氏（註15）は、この要因として御笠川の水害を想定しており、現在でも御笠川が氾濫を繰り返していること、移転後の集落がやや高所にあることを考慮すれば、この想定には説得力がある。

その一方で、17世紀中頃～後半という政治的・経済的状況から推測することも可能ではないだろうか。特に当該期は各地で藩が街道筋の整備を積極的に推進していた時期であり、街道沿いに集落を形成（移住）させる必要があったと指摘されている（註16）。近接する日田街道沿いでは、博多と二日市の宿場間に位置する「間宿」として井相田村雑餉隈と移転後の山田村が一つの集落を形成していたことが知られており、この宿場の整備と村の移転が関わっていた可能性も高いの

ではなかろうか。

当然この２説は相容れないものではないが、17世紀に至っても壕（溝）を巡らしていた「中世的」集落が移転し、これを契機に「近世的」集落として変質するという、良好なモデルケースとして評価できることは間違いないであろう。

註

註１　現時点で資料を精査しておらず、また紙数の関係から、ここでは一覧表は示していない。よって、後に示す数量比較等については説得力を欠くものであるが、あくまでも傾向を示すものと理解していただきたい。

註２　『御笠の森遺跡Ⅰ』で報告した資料について、報告書中の石材や分画数に誤りのあるものがあった。当一覧表が正確なものとする。

註３　火縄銃の火薬製造にも用いられたという検討結果も提示されている。
相原秀郎　1982「城館出土の石臼 －石臼付着物質から見た火薬生産の痕跡」『福島考古　第23号』

註４　三輪茂雄　1978『ものと人間の文化史25　臼』法政大学出版会
三輪茂雄　1999『粉と臼』大巧社

註５　同一遺構内に、17世紀代の遺物を多く含んでいても、18世紀以降の遺物が一定量しめる場合は18世紀以降としてカウントした。

註６　江戸後期に茶臼の出土量が減少するという事象は、文献上の裏付けから、三輪氏（註４）によって指摘されている。

註７　小池聡　2000「石臼はなぜ壊れるか」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論集』

註８　安芸毬子 2001「羽根つき・独楽」『江戸考古学研究事典』柏書房
志田原重人 1993「第１章　遊ぶ子ども　―路地裏と自然の中の遊び―」『遊・戯・宴』広島県立博物館

註９　谷口俊治 1986『北方遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（48集）
川上秀秋　2000『竪町遺跡第１地点』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（244集）
山口信義・川上秀秋　2001『木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡3』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（266集）
宇野慎敏　2000『木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡1』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（255集）
吉武学・加藤隆也　2003『博多86』福岡市教育委員会（757集）
林潤也　2003『御笠の森遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会（63集）
石松好雄ほか 1982『大宰府史跡　昭和57年度発掘調査概報』九州歴史資料館
森山栄一　2003『原田第１・２・40・41号墓地　上巻』筑紫野市教育委員会（77集）
大石昇　1996『両替町遺跡』久留米市教育委員会（116集）
大石昇　1995『呉服町遺跡』久留米市教育委員会（104集）

註10　日本独楽博物館の藤田館長により『御笠の森遺跡Ⅰ』に掲載した図（27図－128）と写真（図版42）は天地逆ではないかと指摘をいただいた。訂正したい。

註11　吉永正春　2002『筑前戦国争乱』海鳥社

註12　藤木久志　1995『雑兵たちの戦場』朝日新聞社
藤木久志　1997『戦国の村を行く』朝日選書579

註13　青柳種信他　1828『筑前国続風土記拾遺』（福岡古文書を読む会校訂　1993　文献出版）

註14　大野城市教育委員会　1999「御笠の森遺跡第８次調査現地説明会資料」

註15　赤司岩雄　1990「第二章　村落」『大野城市史』大野城市
赤司岩雄　2002『大野城市巡杖記　山田・雑餉隈・栄町・下筒井・上筒井編』

註16　江藤彰彦　1998「近世前期の都市と農村」『福岡県史　通史編　福岡藩（一）』西日本文化協会
この中で、具体的事例として、表糟屋郡篠栗宿や夜須郡野町の事例などが紹介されている。

遺物観察表

5 区

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径②器高③底径（高台径）④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調(釉調)	備考
1	10	瓦器	椀	SE01	②5.2＋α	磨耗の為調整不明	A径2.0mm内の石英・長石をごく少量含む。精良 B良好 C外:灰白色10YR8/1～浅黄橙色10YR8/3、内:暗緑灰色7.5GY4/1～褐灰色10YR6/1	
2	10	土師器	小皿	SE02上層	①9.5 ②1.05 ③7.6	回転ナデ、外底面に回転ヘラ切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む。B良好C浅黄色2.5Y7/3	
3	10	土師器	小皿	SE02上層	①(10.1) ②1.2 ③(7.8)	回転ナデ 外底面に回転ヘラ切り痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母などをごく少量含む。精良 B良好 C浅黄色2.5Y7/3	
4	10	土師器	小皿	SE02上層	①10.0 ②1.5 ③7.4	回転ナデ、内底面ナデ 外底面に回転ヘラ切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母などをごく少量含む。精良 B良好 C浅黄橙色10YR8/3	
5	10	土師器	小皿	SE02下層	①10.2 ②1.35 ③7.7	回転ナデ、内底面ナデ 外底面に回転ヘラ切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石や雲母を少量含む B良好 C浅黄橙色7.5YR8/4	
6	10	土師器	丸底杯	SE02上層	①15.25 ②3.85	外底面に板状圧痕 内面にコテ当て痕、他は磨耗して調整不明	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C灰白色10YR8/1～灰黄褐色10YR6/2	
7	10	瓦器	椀	SE02上層	①(17.0) ②5.0 ③(6.8)	内外面ミガキ、内面にコテ当て痕、体部外面下位に指頭圧痕	A精良 B良好 C口縁部内外面：暗灰色N3/～灰色N4/、他：灰白色10YR7/1	体部外面下半・内面上半にアバタ状の破裂痕あり
8	10	瓦器	椀	SE02下層	①(17.0) ②5.3＋α	内面～口縁部外面で粗いミガキ、体部外面下位に指頭圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C口縁部:暗緑灰色10GY3/1、体部外面:浅黄橙色10YR8/3～にぶい黄橙色10YR6/3、体部内面:にぶい黄橙色10YR6/4	
9	10	磁器	白磁椀	SE02上層	②3.2＋α	残存部施釉	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C白色N9/(明緑灰色7.5GY8/1釉を薄く施す)	太宰府分類 V類
10	10	磁器	白磁椀	SE02下層	②2.05 ③6.1	残存部外面露胎	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C灰白色2.5Y 6/1～黄灰色2.5Y6/1(灰白色10Y8/1釉を薄く施す)	瓦玉に転用か
11	10	土師器	小皿	SE03上層	①(9.2) ②0.95 ③(7.1)	回転ナデ、内底面ナデ 外底面は回転ヘラ切り痕	A径1.0mm内の石英・長石を少量含む B良好 C灰黄褐色10YR6/2～5/2	
12	10	瓦器	椀	SE03砂層	②1.6＋α ③7.1	内面ミガキ	A径1.0mm内の石英・長石を少量含む B良好 C高台部:暗灰色N3/～褐灰色10YR6/1、内:暗灰色N3/ 褐灰色10YR5/1	内底面に、重ね焼き時の高台の跡残る
13	10	瓦器	椀	SE03上層	①17.3 ②6.0 ③6.4	内面～外面高台付近まで比較的丁寧なミガキ、内面のミガキは内底面→体部を右回りに5分割して施す	A径2.0mm内の石英・長石を少量含む B良好 C外:黒褐色10YR3/1～にぶい黄橙色10YR7/3、内:黒褐色10YR3/1	
14	10	瓦器	椀	SE03砂層	①(18.0) ②4.55＋α	口縁部内外面にやや粗いミガキ、体部外面下位に指頭圧痕、器面風化	A径1.0mm内の石英・長石を少量含む B良好 C口縁部:黒褐色10YR3/1、体部:褐灰色10YR6/1～にぶい黄橙色10YR7/3	
15	10	土師器	小皿	SE04上層	①9.25 ②1.2 ③7.1	回転ナデ、内底面はナデ、 外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石などを少量含む B良好 C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
16	10	土師器	小皿	SE04上層	①(9.5) ②1.5 ③7.2	回転ナデ、内底面はナデ、外底面に回転ヘラ切り痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C浅黄橙色10YR8/3～にぶい黄橙色10YR7/4	
17	10	瓦器	椀	SE04上層	②1.8＋α ③7.1	内底面ミガキ 外底面に板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石少量含む B良好 C高台部:灰色N4/～褐灰色10YR6/1、内:灰白色10YR7/1	
18	10	瓦器	椀	SE04下層	①17.55 ②6.0 ③7.8	内面～体部外面はやや粗いミガキ、内面にコテ当て痕、体部外面下半に板状圧痕かすかに残る	A径1.0mm内の石英・長石・黒色粒子を少量含む B やや不良 C口縁部:暗灰色N3/～灰白色10YR7/1、体部:にぶい黄橙色10YR6/4～灰白色10YR8/1	
19	10	瓦器	椀	SE04上層	①(18.0) ②4.3＋α	内外面やや粗いミガキ	A径1.0mm内の石英・長石・黒色粒子を少量含む B良好 C口縁部～内面:黒褐色10YR3/1、他:灰白色10YR7/1	
20	10	土師器	杯	SE04上層	①(16.8) ②2.8 ③(11.7)	回転ナデ、内底面ナデ、体部内面コテ当て痕、 外底面に回転ヘラ切り後ナデ・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好 C外:浅黄橙色10YR8/3～にぶい黄橙色10YR7/3、内:にぶい黄橙色10YR7/3	
21	10	磁器	白磁椀	SE04上層	②3.85＋α	残存部全面施釉	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C白色N9/(灰白色10Y8/1釉を薄く施す)	
22	10	磁器	白磁椀	SE04下層	②2.8＋α ③5.8	外面高台付近は露胎	A径1.0mm内の石英・長石・黒色粒子少量含む B良好 C灰白色2.5Y7/1(浅黄色2.5Y7/3釉を薄く施す)	
23	10	土師器	小皿	SE05上層	①9.0 ②1.35 ③6.75	回転ナデ、内底面ナデ、外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 Cにぶい黄橙色10YR7/2～灰黄褐色10YR6/2	
24	10	土師器	小皿	SE05上層	①(9.2) ②1.35 ③(7.3)	回転ナデ、内底面ナデ 外底面に回転糸切り痕	A径3.0mm内の石英・長石や雲母などを少量含む B良好 Cにぶい黄橙色10YR7/2～7/3	
25	10	土師器	小皿	SE05上層	①(9.8) ②1.45 ③(7.6)	回転ナデ、内底面ナデ、外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石や雲母を少量含む B良好 C外:灰白色10YR8/2～灰黄褐色10YR5/2、内:にぶい黄橙色10YR7/3	
26	10	土師器	杯	SE05下層	①(13.0) ②2.35 ③(8.8)	回転ナデ、内底面ナデ、外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石や雲母・を少量含む B良好 C外:浅黄橙色10YR8/3、内:にぶい黄橙色10YR7/2～灰黄褐色10YR6/2	
27	10	須恵質土器	こね鉢	SE05上層	②3.4＋α	回転ナデ、体部内面ナデ	A径3.0mm内の石英・長石を少量含む B良好 C外:褐灰色10YR6/1～灰色N6/、内:灰色N6/	
28	10	磁器	白磁椀	SE05上層	②2.45 ③6.8	高台～高台内は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む。陶器質 B良好 C灰白色10YR8/2(淡黄色2.5Y8/3釉を薄く施す)	太宰府分類 V類 瓦玉に転用か
29	10	瓦質土器	鉢	SE05上層	①(22.7) ②9.0＋α	内面・外面の一部ハケメ、外面に接合痕・指頭圧痕	A径2.0mm内の石英・長石をやや多量含む B良好 C外:にぶい黄橙色10YR7/2～褐灰色10YR5/1、内:褐灰色10YR4/1	
30	10	土製品	球状土製品	SE05下層	長径3.6 短径3.4 厚さ1.55	手づくね	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C灰黄褐色10YR6/2～5/2	線刻あるいは圧痕有り
31	12	土師器	小皿	SE06下層	①9.9 ②1.7 ③7.4	回転ナデ、内底面ナデ、外底面に板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C外:にぶい黄橙色10YR7/3、内:浅黄橙色10YR8/3	
32	12	土師器	丸底杯	SE06下層	①14.9 ②4.0	底部と体部の境に稜。内面にコテ当て、底部ヘラ切り、板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む B良好 C外:浅黄橙色10YR8/3、内:にぶい黄橙色10YR7/4	
33	12	土師器	丸底杯	SE06上層	①(15.6) ②3.95	内外面回転ナデ、外面体部下位指頭圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C橙色7.5YR7/6～にぶい橙色7.5YR6/4	

遺物観察表２

34	12	瓦器	椀	SE06下層	①(16.5) ②4.95 ③6.5	内外面粗雑な斜方向ミガキ	A径2.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む B良好　C外:灰白色10YR8/1～8/2	
35	12	磁器	白磁椀	SE06下層	①(16.3) ②5.3＋α	高台付近以下は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C明緑灰色7.5YR8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1)	太宰府分類　Ⅳ類
36	12	磁器	白磁椀	SE06上層	②2.35＋α ③7.3	高台付近以下は露胎	A径2.0mm内の白色砂粒をごく少量含む　B良好 C灰白色10YR7/1(灰黄色2.5Y7/2釉を薄く施す)	太宰府分類　Ⅳ類か
37	12	鉄製品	鉄滓	SE06下層	長さ2.65　幅2.0 厚さ1.6			重量9.35ｇ
38	16	磁器	白磁椀	SX01上層	②3.0＋α ③(5.2)	高台付近以下は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(灰白色5Y7/2釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅴ類
39	16	磁器	白磁椀	SX01上層	②2.9＋α ③(8.0)	高台内側を斜めに削る 高台付近以下露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	
40	16	磁器	白磁椀	SX01上層	②2.7＋α ③(5.2)	内面に櫛目 高台内露胎	A細かい黒色・褐色粒子を少量含む　B良好 C灰白色7.5YR8/1(灰オリーブ色5Y6/2釉を薄く施す)	
41	16	磁器	白磁皿	SX01上層	①(10.0) ②2.35＋α	全面施釉後、外底面の釉を掻き取る 内底面に施文	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(灰黄色2.5Y7/2釉を薄く施す)	太宰府分類　皿Ⅵ類
42	16	陶器	壺	SX01上層	①(12.0) ②4.15＋α	残存部内外に施釉	A精良。細かい白色粒子をごく少量含む　B良好 C灰褐色5YR5/2(褐色7.5YR4/6釉を薄く施す)	
43	16	陶器	鉢	SX01上層	②3.0＋α	口縁部は内外面回転ナデ	A径1.0mm内の白色・褐色砂粒をやや多量含む B良好　Cにぶい褐色7.5YR5/3	
44	16	陶器	甕	SX01上層	①(12.0) ②2.2＋α	口縁部外面回転ナデ、内外面各１条の沈線巡る	A径2.0mm内の白色・褐色の砂粒をやや多量含む B良好　C外:褐灰色10YR6/1、内:にぶい橙色7.5YR7/4	
45	16	須恵質土器	こね鉢	SX01上層	①(25.9) ②4.5＋α	回転ナデ　口縁部に自然釉	A細かい白色・黒色砂粒少量含む　B良好　C褐灰色10YR6/1～灰白色10YR7/1	
46	16	瓦	平瓦	SX01上層	厚さ2.0	凸面は斜格子タタキ後工具ナデ 凹面は布目圧痕	A径5.0mm内の白色・黒色砂粒を多量含む　Bやや不良C凸灰白色10YR7/1、凹褐灰色10YR5/1	
47	16	磁器	白磁皿	SX02	②1.2＋α ③(4.8)	高台底部～高台内露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(明緑灰色7.5GY8/1釉を薄く施す)	
48	16	金属製品	鉛弾	SX02	直径1.2　重量8.6ｇ		C表面:灰白色2.5Y8/1(酸化の為)、現代の傷の部分:暗灰色N3/	鉄錆付着
49	16	土師器	小皿	SX06	①8.0 ②1.65 ③5.1	回転ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石を少量含む　Bやや不良 C浅黄橙色10YR8/3	
50	16	磁器	白磁椀	SX07	②2.2＋α	残存部全面施釉　口縁部外面に浅い沈線状の窪み	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色5GY8/1(灰白色5Y7/2釉を薄く施す)	
51	16	瓦器	椀	SX08	①16.7 ②5.2 ③7.5	内面～外面体部下位まで粗い横方向のミガキ、体部下位に指頭圧痕	A径2.0mm内の白色砂粒を少量含む　B良好 C褐灰色10YR5/1～4/1、灰白色10YR8/2～7/1	
52	16	瓦器	椀	SX08	①17.0 ②5.3 ③6.9	内面～外面体部上半まで粗い横方向のミガキ、内面にコテ当て痕	A径4.0mm内の白色砂粒、石英、長石を少量含む Bやや不良　C灰白色10YR8/1～黒褐色10YR3/1	体部外面下位まで板状圧痕の痕跡が残る
53	16	瓦器	椀	SX08	①16.9 ②5.35 ③6.7	磨耗の為調整不明(体部外面下半に指頭圧痕)	A径2.0mm内の白色砂粒、長石を少量含む B不良　C灰黄褐色10YR6/2、黒褐色10YR3/1	
54	16	瓦器	椀	SX08	①(18.1) ②4.95 ③(7.0)	内外面やや粗いヨコミガキ、内面コテ当て痕	A径2.0mm内の白色砂粒、長石を少量含む。やや精良　B良好　C外:灰白色10YR7/1～灰黄褐色10YR5/2、内:褐灰色10YR4/1～黒褐色10YR3/1	
55	16	須恵質土器	鉢	SX11	②2.3＋α	回転ナデ	A径2.0mm内の白色砂粒をやや多量含む　B不良 C外:褐灰色7.5YR6/1～にぶい褐色7.5YR6/3、内:灰褐色7.5YR6/2	
56	16	磁器	青磁盤	SX11	①(20.4) ②4.15 ③(9.6)	高台内を除き厚く釉を施す　内面に植物を描く	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C明緑灰色10GY8/1(灰オリーブ色7.5Y5/3釉を厚く施す)	龍泉窯系
57	16	磁器	白磁椀	SX13	②2.05＋α ③(7.1)	残存部外面露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C明緑灰色7.5GY8/1(灰白色5GY8/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅳ類
58	16	磁器	染付椀	SX14	②1.5＋α	残存部全面施釉	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好 C灰白色N8/(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	産地不詳
59	18	土師器	小皿	SX15	①8.1 ②1.6 ③5.1	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む。やや精良　B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
60	18	土師器	小皿	SX15	①8.1 ②1.85 ③5.4	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/3～8/4	
61	18	土師器	小皿	SX15	①8.3～8.6 ②1.55 ③6.1	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	歪みが著しい
62	18	土師器	小皿	SX15	①(8.1) ②1.4 ③(5.9)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C褐灰色10YR5/1～4/1	
63	18	土師器	小皿	SX15下層	①(8.4) ②1.55 ③(6.3)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/6	
64	18	土師器	小皿	SX15	①8.4 ②2.0 ③6.5	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
65	18	土師器	小皿	SX15	①(8.4) ②1.5 ③(6.4)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/3	
66	18	土師器	小皿	SX15	①8.4 ②1.85 ③5.65	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
67	18	土師器	小皿	SX15	①8.35 ②1.75 ③6.5	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:浅黄橙色10YR8/3、内:褐灰色10YR4/1	
68	18	土師器	小皿	SX15	①8.4 ②1.9 ③6.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
69	18	土師器	小皿	SX15	①8.35 ②1.75 ③5.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/6	
70	18	土師器	小皿	SX15	①8.4 ②1.85 ③6.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
71	18	土師器	小皿	SX15	①8.6 ②1.75 ③6.1	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C浅黄橙色7.5YR8/3～明褐灰色7.5YR7/2	歪みが著しい
72	18	土師器	小皿	SX15	①8.55 ②1.6 ③5.9	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C浅黄橙色7.5YR8/6	
73	18	土師器	小皿	SX15	①(8.6) ②1.45 ③6.0	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:にぶい橙色7.5YR7/4、内:浅黄橙色7.5YR8/4	

74	18	土師器	小皿	SX15	①8.5 ②1.65 ③5.9	回転ナデ、外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
75	18	土師器	小皿	SX15	①8.4～8.8 ②1.6 ③6.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母をやや多量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/6	
76	18	土師器	小皿	SX15	①8.6 ②1.65 ③6.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
77	18	土師器	小皿	SX15	①8.75 ②1.25 ③6.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む Bやや不良　C浅黄橙色7.5YR8/3～灰白色10YR8/2	
78	18	土師器	小皿	SX15	①8.65 ②1.85 ③5.5	回転ナデ　内底面は磨耗　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:にぶい黄橙色10YR7/2、内:浅黄橙色10YR8/3	
79	18	土師器	小皿	SX15	①8.6 ②1.75 ③5.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
80	18	土師器	小皿	SX15	①9.9 ②1.85 ③6.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
81	18	土師器	小皿	SX15	①(8.8) ②1.6 ③6.5	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
82	18	土師器	小皿	SX15	①9.0 ②1.5 ③6.4	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:浅黄橙色7.5YR8/4、内:浅黄橙色7.5YR8/6	
83	18	土師器	小皿	SX15	①(9.0) ②1.8 ③(6.9)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C灰白色10YR8/2～7/1	
84	18	土師器	杯	SX15	①(12.0) ②3.15 ③(9.0)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
85	18	土師器	杯	SX15	①12.3 ②3.0 ③7.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
86	18	土師器	杯	SX15	①12.5 ②2.9 ③7.8	磨耗のため調整不明瞭　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
87	18	土師器	杯	SX15	①13.0～13.6 ②2.9 ③9.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・角閃石・雲母を少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
88	18	土師器	杯	SX15	①13.1 ②2.95 ③8.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:浅黄橙色7.5YR8/4～にぶい橙色7.5YR7/4 内:浅黄橙色7.5YR8/6	
89	18	土師器	杯	SX15	①13.6 ②3.2 ③8.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:灰黄褐色10YR5/2、内:浅黄橙色10YR8/3	
90	18	土師器	杯	SX15	①(13.2) ②3.2 ③(8.5)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4～明褐灰色7.5YR7/2	
91	18	土師器	杯	SX15	①(13.75) ②(2.85) ③9.1	回転ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4～8/6	
92	18	土師器	杯	SX15	①12.85 ②3.1 ③8.3	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
93	18	磁器	青磁椀	SX15	②2.2＋α	残存部全面施釉　外面に蓮弁文	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C灰白色2.5Y7/1(灰オリーブ色5Y5/3釉を薄く施す)	
94	18	磁器	白磁椀	SX15	②1.9＋α	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C灰白色2.5Y8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅸ類
95	18	石製品	碁石	SX15	長径2.3　短径1.95 厚さ1.0		C灰白色2.5GY8/1	石英製。6.45ｇ
96	18	瓦	丸瓦	SX15	厚さ1.4	凸面は斜格子タタキ　凹面は布目痕	A径4.0mm内の白色・黒色砂粒をやや多量含む B良好　C緑灰色7.5GY6/1～灰色N6/	側端面に分割界面がわずかに残る
97	18	鉄製品	鉄刀	SX15	長21.4＋α　幅3.0 厚0.15～0.35			柄に木質が明瞭に残る。切先らしき鉄片があるが接合しない 重量49.6ｇ
98	20	土師質土器	鍋	SX16	②3.5＋α	外面ハケ、内面ナデ　口縁上面に連続圧痕	A径6.0mm内の石英・長石を多量含む　B良好 C外:橙色7.5YR7/6、口縁上～内:にぶい橙色7.5YR6/3	
99	20	磁器	青磁椀	SX16	②4.5＋α	残存部全面施釉　外面に鎬蓮弁文	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好 C灰白色5Y7/1(灰オリーブ色5Y5/3釉を厚く施す)	龍泉窯系。太宰府分類　椀Ⅱ-b類
100	20	磁器	青磁椀	SX16	②4.7＋α	残存部全面施釉　外面に鎬蓮弁文	A細かい黒色粒子をやや多量含む　B良好　C灰色N6/(灰色10Y5/1釉をやや厚く施す)	龍泉窯系。太宰府分類　椀Ⅱ-b類
101	20	磁器	白磁椀	SX16	②1.45＋α	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A細かい黒色粒子を少量含む　Bやや不良　C灰白色7.5YR8/1/(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅸ類
102	20	石製品	碁石	SX16	長径1.45　短径1.35 厚さ0.6		C灰白色7.5Y8/1	石英製。1.65ｇ
103	20	土師器	小皿	SX17	①8.25 ②1.2 ③6.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C外:浅黄橙色7.5YR8/6、内:浅黄橙色7.5YR8/4	
104	20	土師器	小皿	SX17	①(8.8) ②1.0～1.75 ③(7.0)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3	
105	20	土師器	杯	SX17	①(12.0) ②2.9 ③(8.1)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR7/6	
106	20	土師器	杯	SX17	①12.1 ②3.05 ③7.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4	
107	20	土師器	杯	SX17	①12.4 ②3.2 ③9.0	回転ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:にぶい橙色7.5YR7/4、内:橙色7.5YR6/6～にぶい褐色7.5YR6/3	
108	20	土師器	杯	SX17	①(12.95) ②2.95 ③8.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
109	20	磁器	青磁小椀	SX17	①(12.6) ②3.6＋α	残存部全面施釉　外面に鎬蓮弁文	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C明緑灰色（オリーブ灰色5GY6/1釉をやや厚く施す）	龍泉窯系。 太宰府分類　小椀Ⅱ-b類
110	20	須恵質土器	鉢	SX17	②2.5＋α	外面回転ナデ	A径2.0mm内の白色砂粒を少量含む　Bやや不良 C口縁端部～内:暗緑灰色10GY4/1、外:緑灰色10G6/1	東播系
111	20	磁器	白磁皿	SX18	①(11.6) ②3.85 ③6.3	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A細かい黒色粒子を少量含む。やや粗い　B良好 C灰白色10YR8/1(灰白色5Y8/2～7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　皿Ⅸ-1c類

遺物観察表４

112	20	磁器	青磁椀	SX18	①17.35 ②6.95 ③6.3	高台底部～高台内は露胎　外面にやや簡略化したヘラ描き蓮弁文	A緻密　B良好　C灰黄褐色10YR6/2（黄褐色2.5Y 5/3～暗オリーブ灰色2.5GY4/1釉を薄く施す）	龍泉窯系 太宰府分類　椀Ⅱ-a類
113	20	土師器	小皿	SX20	①8.1 ②1.25 ③6.2	外面回転ナデ、内面ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C外:浅黄橙色7.5YR8/4、内:橙色7.5YR6/8	
114	20	陶器	壺	SX20	②2.8＋α	口縁上面～体部外面に施釉、内面には釉垂れが認められる	A細かい黒色粒子をごく少量含む。やや粗い　B良好　C灰白色10YR7/1(黒褐色10YR2/2釉を薄く施す)	口縁部上面に釉層物あり
115	20	土師器	杯	SX22	①(13.0) ②2.4 ③(8.9)	外面回転ナデ、内面ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C外:にぶい黄橙色10YR7/3、内:明黄褐色10YR7/6	
116	22	土師器	杯	SX30下層	①(13.0) ②3.6 ③(8.8)	回転ナデ、外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石などを少量含む　Bやや不良　C外:明黄褐色10YR7/6、内:灰黄褐色10YR 5/2～灰白色10YR8/2	
117	22	磁器	青磁椀	SX30上層	①(12.8) ②3.5＋α	残存部全面施釉 片彫りで文様を施す	A細かい黒色粒子をごく少量含む。　B良好　C明緑灰色10GY8/1(オリーブ灰色10Y6/2釉を薄く施す)	
118	22	磁器	白磁椀	SX30下層	②2.9＋α ③(6.4)	高台内は露胎　内底面に櫛目文	A細かい黒色粒子をやや多量含む。　B良好　C灰白色N8/(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅴ類
119	22	石製品	用途不明品	SX30下層	長径4.1　短径3.9 厚さ2.4		C明オリーブ灰色2.5GY7/1	石英製。54.1ｇ
120	22	土師器	小皿	SX39	①8.15 ②1.35 ③5.4	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の長石・雲母を少量含む。精良　B良好　C浅黄橙色10YR8/4	
121	22	土師器	小皿	SX39	①(9.0) ②1.4 ③6.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C外:にぶい黄橙色10YR5/3、内:灰黄褐色10YR5/2	
122	22	土師器	杯	SX39	①12.2 ②2.6 ③8.1	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む　B良好　C外:にぶい黄橙色10YR7/4、内:浅黄橙色10YR8/3～灰黄褐色10YR6/2	
123	22	土師器	杯	SX39	①12.7 ②2.8 ③8.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
124	22	土師器	杯	SX39	①12.7 ②2.6 ③7.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
125	22	土師器	杯	SX39	①12.7 ②2.6 ③7.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石・雲母をやや多量含む　B良好　C外:にぶい黄橙色10YR7/3、内:浅黄橙色10YR8/3	
126	22	土師器	杯	SX39	①13.0 ②3.0 ③8.6	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
127	22	磁器	白磁椀	SX39	②4.65＋α	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A細かい黒色粒子を少量含む。やや粗い　B良好　C灰白色10YR8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅸ類
128	22	土師器	小皿	SX40	①7.9 ②1.4 ③5.7	回転ナデ,内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A細かい白色粒子や雲母などを少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/3	
129	22	土師器	杯	SX40	①(12.4) ②2.5 ③(8.6)	体部回転ナデ後内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C灰白色7.5YR8/2～橙色7.5YR7/6	
130	22	瓦器	椀	SX40	①(17.2) ②7.4 ③6.4	内外面とやや雑なミガキ	A径2.0mm内の白色砂粒を少量含む。精良　B良好　C黒褐色10YR3/1～明褐灰色10YR7/2	
131	22	磁器	青磁椀	SX40	②2.95＋α ③(6.0)	高台～高台内は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR7/1(灰オリーブ色5Y5/3釉を薄く施す)	
132	22	磁器	青白磁蓋	SX40	①(3.9) ②1.0＋α 身受け部径(5.5)	内面露胎　天井に蓮弁文を施す	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(明緑灰色10GY8/2釉を薄く施す)	
133	22	磁器	青白磁蓋	SX40	①(7.8) ②1.35 身受け部径(9.8)	身受け部下面～かえり部周辺露胎 天井部に菊花文を施す	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C灰白色10YR8/1(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	
134	22	石製品	転用品	SX40	長さ12.8　幅6.5前後 厚さ2.2	穿孔部に棒状の鉄製品挿入	C灰白色10YR7/1～褐灰色10YR6/1	滑石製　転用前と考えられるノミ削り痕有り
135	25	土師器	小皿	SX41	①(9.0) ②1.2 ③(6.5)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石などを少量含む　B良好　Cにぶい黄橙色10YR7/2～7/3	
136	25	土師器	小皿	SX41	①9.6 ②1.3	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転ヘラ切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石などを少量含む　B良好　C外:浅黄橙色7.5YR8/3、内:浅黄橙色7.5YR8/4～橙色7.5YR7/6	
137	25	土師器	小皿	SX41	①10.0 ②1.85	磨耗の為調整不明 外底面に板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C浅黄橙色10YR8/4～灰白色10YR8/2	
138	25	瓦器	小皿	SX41	①(10.0) ②1.65＋α	磨耗の為調整不明	A径1.0mm内の石英・長石などを少量含む　B良好　C外底面:灰白色10YR4/1、他:褐灰色10YR8/1	
139	25	土師器	丸底杯	SX41	①(15.4) ②3.2	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に指頭圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/3	
140	25	磁器	白磁椀	SX41	①(17.0) ②4.8＋α	体部外面下半露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C明オリーブ灰色5GY7/1(オリーブ黄色5Y6/3～灰白色5Y7/2釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅳ類
141	25	石製品	有孔石製品	SX41	長径5.65　短径5.45 厚さ2.8	上面は研磨　横面と穿孔部はノミ削り痕残る	C緑灰色10G6/1	滑石製。
142	25	土師器	小皿	SX42	①(10.2) ②1.25 ③8.5	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　C橙色7.5YR7/6	
143	25	土師器	杯	SX42	①13.6 ②2.55 ③8.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む Bやや不良　C外:灰黄褐色10YR6/2～4/2 内:にぶい黄橙色10YR7/2～7/3	
144	25	土師器	杯	SX42	①15.45 ②3.0 ③11.4	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mmの石英・長石・雲母を少量含む　B良好　C浅黄橙色7.5YR8/4～にぶい橙色7.5YR7/4	
145	25	磁器	白磁椀	SX42	②3.3＋α	回転ヘラ削り	A細かい黒色粒子をやや多量含む　B良好　C灰白色N8/(明オリーブ灰色5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅳ類
146	25	磁器	白磁椀	SX42	②1.8＋α ③(7.0)	残存部外面露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色N7/(明オリーブ灰色5GY7/1釉を薄く施す)	
147	25	須恵質土器	こね鉢	SX42	②3.45＋α	回転ナデ	A径5.0mm内の白色・黒色砂粒を少量含む　B良好　C灰色N5/	東播系
148	25	須恵質土器	こね鉢	SX42	②4.4＋α	回転ナデ　外面に指頭圧痕有り	A径1.0mm内の白色砂粒をやや多量含む　B良好　C灰色N5/	東播系？

149	25	陶器	鉢	SX42	②5.25+α ③(9.1)	体部外面下位回転ヘラ削り、内面ヨコナデ	A径2.0mm内の白色・黒色砂粒を少量含む　B良好 C外:にぶい褐色7.5YR5/4、内:にぶい黄褐色10YR5/4	
150	25	土師質	瓦玉	SX42	長径2.8　短径2.4 厚さ2.4	全面摩滅	A径5.0mm内の石英・長石を少量含む　B やや不良 C灰白色7.5YR8/1	
151	25	須恵器	杯身	SX43	①(12.0) ②2.7+α 受け部径(14.0)	回転ナデ	A径1.0mm内の石英・白色砂粒などを少量含む　B良好 C外:褐灰色10YR4/1、内:褐灰色10YR5/1	
152	25	磁器	白磁椀	SX43	②2.35+α ③5.6	残存部外面露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色7.5YR8/1(明緑灰色7.5GY7/1釉を薄く施す)	
153	25	石製品	石鍋	SX43	長さ7.7　幅7.4 厚さ1.7~1.9	内底面外端部ノミ状工具痕残る。3ヶ所に穿孔あり。うち底部の孔には棒状の鉄製品挿入	C器面:黒褐色7.5YR3/1~灰褐色7.5YR4/2 割れ面:にぶい黄橙色10YR6/3	滑石製　外面煤付着
154	25	土師器	小皿	SX44	①8.0 ②1.3 ③6.5	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色7.5YR8/3~8/4	底部は薄く、焼成時にヒビ割れしている
155	25	土師器	小皿	SX44	①8.4 ②1.55 ③5.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　Cにぶい橙色10YR7/3~橙色7.5YR7/6	
156	25	土師器	杯	SX44	①13.0 ②2.7 ③8.7	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3	
157	25	土師器	杯	SX44	①13.55 ②2.65 ③8.9	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3~にぶい黄橙色10YR7/3	
158	25	磁器	青磁椀	SX44	②3.0+α	残存部全面施釉　外面に鎬蓮弁文	A細かい白色・黒色粒子をごく少量含む　B良好 C灰白色2.5Y7/1(灰オリーブ色5Y5/3釉を厚く施す)	竜泉窯系 太宰府分類　椀Ⅱ類
159	27	土師器	小皿	SX45	①8.5 ②1.15 ③7.0	外底面に回転糸切り痕・板状圧痕 他は磨耗して調整不明	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　Cにぶい橙色7.5YR7/4	
160	27	土師器	小皿	SX45	①(8.6) ②1.05 ③(6.8)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転ヘラ切り痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　C外:にぶい橙色7.5YR7/4、内:にぶい橙色7.5YR6/4	
161	27	土師器	小皿	SX45	①8.85 ②1.2 ③6.9	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:橙色7.5YR7/6、内:にぶい橙色7.5YR7/4	
162	27	土師器	小皿	SX45	①9.3 ②0.95 ③7.0	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径4.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　Cにぶい橙色7.5YR7/3	
163	27	土師器	小皿	SX45	①9.55 ②1.3 ③7.8	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　Cにぶい橙色7.5YR7/3~橙色7.5YR7/6	
164	27	土師器	杯	SX45	①(15.0) ②2.95 ③(11.6)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:灰褐色7.5YR5/2~にぶい褐色7.5YR5/3、内:灰褐色7.5YR6/2~にぶい橙色7.5YR6/4	
165	27	土師器	杯	SX45	*①(15.2) ②2.65 ③(11.2)*	*回転ナデ　外底面に板状圧痕・回転糸切り痕*	*A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む* B良好　C橙色7.5YR7/6~にぶい橙色7.5YR7/4	
166	27	土師器	杯	SX45	①(16.0) ②3.05 ③(12.4)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mmの石英・長石・雲母などを少量含む B良好　C橙色7.5YR7/6~にぶい橙色7.5YR7/3	
167	27	土師器	杯	SX45	①15.9 ②3.4 ③10.9	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　C外底面:灰黄褐色10YR6/2、他:にぶい黄橙色10YR7/2~7/4	
168	27	土師器	杯	SX45	①(16.8) ②2.75 ③(12.0)	回転ナデ、内底面はナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:橙色7.5YR7/6、内:浅黄橙色7.5YR8/3	
169	27	瓦器	椀	SX45	①(16.8) ②5.75 ③6.9	内外面雑なミガキ、内面コテ当て痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外面~口縁部内面:褐灰色7.5YR6/1~4/1、他:灰白色7.5YR8/1~8/2	籾殻?の圧痕らしき痕跡が確認できる
170	27	磁器	白磁椀	SX45	①(16.5) ②4.6+α	体部外面回転ヘラ削り　体部下半は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C明緑灰色7.5GY8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅳ類
171	27	磁器	白磁椀	SX45	①(17.3) ②6.55 ③(6.1)	外面回転ヘラ削り　体部下位以下は露胎	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色N8/(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類　椀Ⅴ-4a類
172	27	磁器	白磁皿	SX45	①(9.7) ②1.75 ③(6.0)	口縁端部~内面の釉を掻き取る	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色2.5Y8/1(灰白色5GY8/1釉を薄く施す)	太宰府分類　皿Ⅸ類
173	27	磁器	小壺か合子	SX45	②3.3+α ④(6.0)	残存部全面施釉	A細かい黒色粒子を少量含む。陶胎質　B良好 C灰白色2.5Y8/1(灰白色2.5GY8/1釉を薄く施す)	
174	27	磁器	青磁椀	SX45	①(16.2) ②7.25 ③5.3	外面回転ヘラ削り　体部下位以下は露胎	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C明緑灰色10GY7/1~灰白色5GY8/1(オリーブ灰色2.5GY6/1~灰オリーブ色5Y6/2釉を薄く施す)	同安窯系。太宰府分類　椀Ⅰ類
175	27	磁器	青磁椀	SX45	①(15.8) ②約7.5 ③約4.5	体部最下位以下は露胎。外面に細かい縦の櫛目文。内面に櫛状工具によるジグザグの点描文・ヘラ状工具による貼化花文を施す。	A径1.0mm内の白色砂粒や黒色粒子をごく少量含む B良好　C灰白色10Y7/1(灰オリーブ色5Y5/3釉を薄く施す)	同安窯系。太宰府分類　椀Ⅰ-1b類
176	27	磁器	青磁椀	SX45	①(16.0) ②6.55 ③5.2	体部最下位以下は露胎。外面に細かい縦の櫛目文。内面に櫛状工具によるジグザグの点描文・ヘラ状工具による貼化花文を施す。	A径3.0mm内の白色砂粒や黒色粒子を少量含む B良好　C黄灰色2.5Y6/1(オリーブ灰色10Y6/2釉を薄く施す)	同安窯系。太宰府分類　椀Ⅰ-1c類
177	27	磁器	青磁皿	SX45	②1.6+α ③4.45	底部の釉を掻き取る　内面見込みに花文	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色N8/(灰オリーブ色7.5Y6/2~5/2釉を薄く施す)	龍泉窯系。太宰府分類　皿Ⅰ-1b類
178	27	磁器	青磁椀	SX45	①16.25 ②6.65 ③6.0	高台内は露胎　体部内面は二又片刀によって5分割し間に飛雲文を入れる	A細かい白色・黒色粒子をごく少量含む　B良好 C露胎部分:灰褐色7.5YR6/2(灰オリーブ色5Y6/2釉を薄く施す)	龍泉窯系。太宰府分類　椀Ⅰ-4a'類 体部外面に釉溜痕有り
179	27	磁器	青磁椀	SX45	①16.5 ②7.15 ③5.95	高台底部~高台内は露胎。　体部内面は3単位の片彫り蓮華文、内底面に花文	A緻密　B良好　C露胎部分:にぶい黄橙色10YR6/3(外:灰オリーブ色5Y5/3、内:オリーブ灰色10Y6/2釉を薄く施す)	龍泉窯系。太宰府分類　椀Ⅰ-2a類。
180	28	陶器	小壺	SX45	①(4.35) ②2.2+α ④(4.9)	外面~口縁部内面まで褐釉施す	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C灰白色10Y7/1(黒褐色10YR3/2釉を薄く施す)	
181	28	陶器	鉢	SX45	②3.7+α	回転ナデ、無釉	A径3.0mm内の白色砂粒を多く含む　B良好 C:外:灰褐色5YR4/2、内:褐灰色10YR5/1	
182	28	土師質土器	鍋	SX45	②6.8+α	ヨコナデ	A径9.0mm内の石英・長石・雲母などを多量含む。やや粗い　B良好　C外:にぶい褐色7.5YR6/3~橙色7.5YR6/6、内:灰褐色7.5YR5/2~橙色7.5YR6/6	鍔を有する 鍔の下面以下はスス付着
183	28	土師質土器	鉢	SX45	②7.4+α ④8.5	体部の調整粗く、内外面とも指頭圧痕確認できる	A径3.0mm内の石英・長石・雲母などを少量含む B良好　C外:にぶい橙色7.5YR7/3、内:にぶい橙色7.5YR6/4	底部に葉脈状の圧痕が残る
184	28	土師質土器	鍋	SX45	①(47.0) ②18.3	工具ナデ 口縁部上面に浅い連続指頭圧痕	A径6.0mm内の石英・長石・雲母などを多量含む B良好　C外:褐色7.5YR4/4~黒色7.5YR2/1、内:にぶい橙色7.5YR7/3~橙色7.5YR7/6	口縁直下の幅6cm程は帯状に煤が付着

遺物観察表6

185	28	土師質土器	鍋	SX45	①(48.0) ②6.8+α	内外面工具ナデ 口縁部外面に指頭圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母などを多量含む B良好 C外:にぶい橙色7.5YR7/3～明褐色7.5YR 5/6、内:にぶい橙色7.5YR6/4～橙色7.5YR6/6	
186	28	石製品	石鍋	SX45	①(31.0) ②6.9+α	内面にノミ状工具痕が顕著に残る	C灰色N5/～灰黄褐色10YR6/2	滑石製。体部に一部煤付着 穿孔が2ヶ所有り
187	28	石製品	石鍋	SX45	②4.3+α ③19.0	内外面ともノミ状工具痕残る	C灰色N5/～灰黄褐色10YR6/2	滑石製。外面に煤付着
188	30	土師器	小皿	SX46	①(9.0) ②0.85 ③(7.3)	回転ナデ、内底面はナデ 外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径1.0mm程内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C外:灰黄褐色10YR6/2～5/2、内:にぶい黄橙色10YR7/3～灰黄褐色10YR5/2	
189	30	土師器	小皿	SX46	①(9.2) ②1.15 ③(7.0)	回転ナデ、内底面はナデ 外底面に回転糸切り痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C橙色7.5YR7/6	
190	30	磁器	白磁四耳壺	SX46	②5.6+α	外面胴部以下は回転ヘラ削り 外面全体施釉	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C灰白色N8/(灰白色7.5YR7/2～灰オリーブ色7.5YR6/2釉を薄く施す)	
191	30	石製品	石鍋	SX46	②3.2+α ③(26.5)	内底面外端にノミ状工具痕明瞭に残る	C褐灰色10YR5/1～黒褐色10YR3/1	外面に煤付着。穿孔が2ヶ所有り、楔状の鉄製品挿入
192	32	磁器	染付椀	SD01 (C区)	②1.15+α	雲と植物らしきモチーフを描く	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C白色N9/(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	景徳鎮窯系
193	32	土師器	小皿	SD01 (C区)	②1.6+α ③4.7	回転ナデ、内底面はナデ 外底面に回転糸切り痕	A石英・長石・雲母を少量含む。精良 B良好 C浅黄橙色10YR8/3・明褐色7.5YR5/6	
194	32	陶器	皿	SD01(A区)	②1.25+α	残存部全面施釉	A細かい白色・黒色粒子をごく少量含む B良好 C褐灰色10YR6/1(灰白色5Y7/2～灰オリーブ5Y 5/2釉を薄く施す)	朝鮮産。内外底面に目跡有り
195	32	瓦器	椀	SD03	①(16.7) ②5.05 ③(6.4)	磨耗の為調整不明	A径2.0mm内の石英・長石を少量含む B不良 C黒褐色7.5YR3/1～褐灰色7.5YR5/1	
196	32	瓦器	椀	SD03	②3.7+α ③7.6	磨耗の為調整不明	A径2.0mm内の石英・長石・黒色砂粒を少量含む B不良 C体部上半:灰黄褐色10YR6/2、その他:灰白色10YR8/1～明黄褐色10YR7/6	
197	33	土師器	小皿	SD04(C区)上層	①(6.9) ②1.4 ③(6.0)	回転ナデ 外底面に回転糸切り痕	A径1mm内の石英・長石などを少量含む B良好 C外:浅黄橙色10YR8/3、内:褐灰色10YR5/1	
198	33	土師器	小皿	SD04(F区)上層	①(7.6) ②1.55 ③(5.2)	回転ナデ 外底面は磨耗の為調整不明	A径3.0mm内の石英・長石などを少量含む B良好 C外:浅黄橙色7.5YR8/4、内:にぶい橙色7.5YR7/4	
199	33	陶器	椀	SD04(B区)上層	②2.15+α ③4.1	高台～高台内は露胎	A径1.0mm内の白色・黒色砂粒を少量含む B良好 C灰黄色2.5Y7/2(オリーブ黄色5Y6/3釉を薄く施す)	高台底部に目跡あり 肥前産か
200	33	陶器	皿	SD04(E区)	②1.75 ③4.4	外面高台付近以下は露胎	A細かい白色粒子をごく少量含む B良好 C褐灰色10YR5/1(灰黄色2.5Y6/2釉を薄く施す)	瓦玉に転用か。内外底面に目跡
201	33	陶器	皿	SD04(F区)下層	②2.8+α ③4.9	残存部外面は露胎	A径1.0mm内の白色・黒色砂粒を少量含む B良好 Cにぶい黄橙色10YR7/2(灰オリーブ色7.5YR6/2釉を薄く施す)	肥前産。内底面に目跡
202	33	陶器	大皿	SD04(F区)上層	②5.7+α	残存部全面施釉、内面に鉄絵を施す	A径1.0mm内の白色・黒色砂粒を少量含む B良好 C灰白色10YR7/1(灰オリーブ色7.5YR6/2釉を薄く施す)	肥前産
203	33	陶器	合子?	SD04	②2.8+α	残存部全面施釉 外面に白土を象嵌する	A細かい白色・黒色粒子を少量含む B良好 C褐灰色10YR6/1(灰色10Y4/1釉を薄く施す)	朝鮮産
204	33	磁器	染付椀	SD04(C区)上層	②1.7+α	唐草文描く	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C白色N9/(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	景徳鎮窯系
205	33	磁器	染付椀	SD04(C区)上層	②1.9+α		A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C明緑灰色7.5GY8/1(明緑灰色10G7/1釉をやや厚く施す)	景徳鎮窯系
206	33	磁器	染付椀	SD04(G区)上層	②4.35+α	体部の文様構成不明瞭	A細かい黒色粒子をごく少量含む、陶胎質 B良好 Cにぶい橙色7.5YR7/4(灰白色2.5Y8/2釉を薄く施す)	漳州窯系
207	33	磁器	染付椀	SD04拡張部	②3.0 ③(5.9)	高台先端部周辺の釉掻き取る 内底面に花文らしきモチーフ描く	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C浅黄橙色7.5YR8/3(灰白色2.5GY8/1釉を薄く施す)	漳州窯系
208	33	磁器	染付椀	SD04(B区)上層	②4.9+α ③5.4	高台底部の釉を掻き取る 体部上半に染付の痕跡有り	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C灰白色10Y8/1(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	肥前産か 高台底部から内側面に砂付着
209	33	磁器	染付皿	SD04(G区)上層	②1.6+α ③(7.6)	高台底部の釉掻き取る	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C白色N9/(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	景徳鎮窯系
210	33	磁器	青磁椀	SD04(B区)上層	②2.6+α ③5.5	内底面は露胎となり、線刻により施文	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C灰白色10YR 7/1、浅黄橙色10YR8/3(灰オリーブ色7.5Y5/2釉を薄く施す)	龍泉窯系か
211	33	磁器	青磁小椀	SD04(B区)上層	①(9.0) ②2.5+α	外面体部下半を露胎	A細かい黒色粒子をごく少量含む B良好 C明緑灰色10YR8/1 (灰黄色2.5Y6/2釉を薄く施す)	
212	33	磁器	染付皿	SD04(B区)上層	②0.9+α ③(3.0)	蛇の目底 底部露胎 内底面に染付の痕跡	A細かい黒色粒子をごく少量含む。陶胎質 B良好 C灰白色7.5YR8/2～浅黄橙色7.5YR8/3(灰黄色2.5Y 7/2釉をやや厚く施す)	漳州窯系か
213	33	磁器	青磁椀	SD04(G区)上層	①(16.1) ②6.4 ③4.9	外面体部下位以下は露胎 外面に縦の細かい櫛目文、内面に櫛描き点描文、ヘラ描き略化花文	A細かい白色砂粒・黒色粒子を少量含む B良好 C灰白色2.5Y7/1(灰オリーブ色7.5Y6/2釉を薄く施す)	同安窯系 太宰府分類 椀Ⅰ-1b類
214	33	磁器	青磁椀	SD04(F区)黒褐色土	①17.95 ②7.2 ③5.65	外面体部下位以下は露胎 外面に片彫り蓮弁文	A細かい白色砂粒や黒色粒子をごく少量含む B不良 Cにぶい橙色5YR7/4～橙色5YR6/6(灰白色10YR 8/1～灰黄色2.5YR6/2釉を薄く施す)	龍泉窯系 太宰府分類 椀Ⅳ類 発色悪い
215	33	磁器	青白磁皿	SD04(A区)	②1.3 ③1.8 身受け部径(3.8)	下面は露胎	A径1.0mm内の白色砂粒をごく少量含む B良好 C灰白色10YR8/1(灰黄色2.5Y7/2釉を薄く施す)	
216	33	磁器	白磁合子身	SD04(G区)上層	①(3.9) ②1.65 ③(2.1) 蓋受け部径(5.0)	蓋受け部分および外面体部下位以下は露胎	A緻密 B良好 C灰白色7.5YR8/1(灰白色2.5GY 8/1釉を薄く施す)	
217	33	磁器	白磁皿	SD04	①10.1 ②1.85 ③6.1	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A細かい黒色砂粒をごく少量含む B良好 C灰白色N8/(オリーブ灰色5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類 皿Ⅸ類
218	33	磁器	白磁椀	SD04(C区)上層	①(16.0) ②5.15+α	口縁端部～内面の釉を掻き取る	A径1.0mm内の白色・黒色砂粒をごく少量含む B良好 C灰白色N8/(灰白色5GY8/1)	太宰府分類 椀Ⅸ類
219	33	陶器	小壺	SD04(B区)上層	①(3.0) ②1.25+α	外面釉施	A細かい白色粒粒をごく少量含む B良好 C灰白色10YR7/1(灰褐色7.5YR4/2釉を薄く施す)	
220	33	陶器	壺	SD04(D区)上層	①(9.6) ②3.9+α	外面施釉	A細かい白色・黒色砂粒を少量含む B良好 C明オリーブ灰色2.5GY7/1～5GY7/1	口縁部内面に目跡有り

221	33	陶器	甕？	SD04(D区)上層	②4.75＋α	外面は底部付近まで釉垂れ	A径3.0mm内の石英・長石・白色砂粒を多量含む。粗い　Bやや不良　C内:褐色7.5YR4/3、外:褐灰色7.5YR4/1（灰白色7.5YR8/2釉を薄く施す）	
222	33	須恵器	杯身	SD04(A区)下層	②2.7＋α ③(10.5)	回転ナデ、内底面ナデ	A細かい白色砂粒を少量含む　B良好　C灰色N5/	
223	34	陶器	擂鉢	SD04(C区)上層	②3.2＋α	回転ナデ 擂目の単位不明	A径2.0mm内の白色・褐色・黒色砂粒をやや多量含む　B良好　C口縁端面:褐灰色7.5YR6/1、他：にぶい橙色7.5YR6/4～にぶい褐色7.5YR5/3	備前焼
224	34	陶器	擂鉢	SD04(A区)	②4.6＋α	回転ナデ 口縁外面に鉄釉	A径2.0mm内の白色・黒色砂粒をやや多量含む B良好　C灰褐色7.5YR5/2(褐色7.5YR4/3の鉄釉を薄く施す)	備前焼？　口縁端部・口縁外面屈曲部下端に重ね焼きの痕跡
225	34	瓦質土器	擂鉢	SD04(D区)下層	①(28.0) ②6.0＋α	擂目6単位 口縁部上面やや外傾	A径1.0mm内の白色・褐色砂粒を少量含む　Bやや不良　C外:にぶい黄橙色10YR6/3～6/4、内:にぶい黄橙色10YR7/3～灰黄褐色10YR6/2	
226	34	須恵質土器	鉢	SD04(G区)上層	②3.6＋α	回転ナデ	A径1.0mm内の白色砂粒をやや多量含む　B良好 C口縁端面:暗緑灰色10G3/1、他:灰色N5/	
227	34	土製品	土鈴	SD04(A区)	②(3.4) ④(3.0)		A1.0mm内の石英・長石・雲母・黒色粒子をごく少量含む。精良　B良好　Cにぶい黄橙色10YR7/4	切込み部の位置が土鈴の主軸と一致しない
228	34	陶器？	不明	SD04拡張部	②1.5＋α　直径4.05	底部回転糸切り　一部施釉 上下方向に穿孔	A細かい白色粒子をごく少量含む　B良好　C上面:にぶい赤褐色2.5YR5/4、下面:明赤褐色2.5YR5/6(褐色7.5YR4/6釉施す)	上部欠損
229	34	土製品	棒状土製品	SD04(G区)上層	長径4.35＋α 短径4.1＋α 長さ5.4＋α	摩耗の為調整不明	A径6.0mm内の石英・長石・褐色土粒を多量含む。やや粗　Bやや不良　C器表面:にぶい黄褐色10YR5/4～灰黄褐色10YR4/2、断面:灰白色10YR8/2	
230	34	石製品	滑石	SD04(F区)下層	長さ12.0　幅9.1 厚さ2.1	側面にノミ状工具痕　表裏面各１ヶ所に未貫通の穿孔痕跡あり	C褐灰色7.5YR5/1～灰色N5/	滑石製　表裏面で穿孔工具異なる
231	34	石製品	石鍋	SD04(F区)下層	②4.3＋α	外面にノミ状工具痕 口縁部直下に穿孔あり	C褐灰色10YR6/1	滑石製
232	34	石製品	石鍋	SD04(F区)下層	②2.3＋α		C褐灰色10YR5/1	滑石製　外面に煤付着
233	34	石製品	茶臼（下臼）	SD04(C区)下層	②6.7　幅10.8＋α		C灰白色10YR7/1	安山岩製
234	34	石製品	粉挽臼（下臼）	SD04(D区)上層	②8.5　幅7.6＋α		C灰白色10YR7/1	凝灰岩製
235	34	石製品	叩石	SD04(D区)上層	長径2.15　短径1.7 厚さ1.1		C灰白色10YR8/1	石英製。5.6g
236	34	石製品	叩石	SD04(D区)上層	長径1.95　短径1.75 厚さ0.7		C灰白色10YR8/1	石英製。3.35g
237	34	石製品	叩石	SD04	長径2.45　短径2.3 厚さ0.5		C黒色N2/	粘板岩製。4.1g
238	34	石製品	石錐	SD04(C区)上層	長さ2.35＋α 厚さ0.5		C黒色N1.5/	西北九州産黒曜石製　1.2g
239	34	石製品	スクレーパー	SD04(C区)下層	長さ2.65　幅1.75 厚さ0.75		C黒色N1.5/	西北九州産黒曜石製　3.15g
240	34	鉄製品	釘	SD04(G区)上層	長さ3.5＋α　厚さ0.4			重量2.15g
241	34	木製品	下駄	SD04下層	最長20.7　最大幅8.45 最大厚2.0			角型の差歯歯卯下駄
242	35	土師質土器	鉢	SD05(A区)	②5.2＋α	内面に細かいハケメ	A径5.0mm内の褐色土粒、白色砂粒をやや多量含む B良好　C浅黄橙色10YR8/3	
243	35	土師器	丸底杯	SD06	①(15.0) ②3.4	回転ナデ、外底面回転ヘラ切り	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む　B良好 C浅黄橙色10YR8/3～にぶい黄橙色10YR7/4	
244	35	磁器	青磁椀	SD06	①(13.6) ②1.85＋α	残存部全面施釉　外面に鎬蓮弁文	A細かい黒色粒子をごく少量含む　B良好　C灰白色N7/(明緑灰色7.5GY7/1釉を薄く施す)	龍泉窯系 太宰府分類　椀Ⅰ類
245	35	鉄製品	鉄滓	SD06	長さ4.0　幅3.5 厚さ1.85		C灰褐色7.5YR4/2～明褐色7.5YR5/6	重量26.95g
246	35	磁器	青磁椀	SD07(B区)	②2.6＋α	残存部全面施釉　外面に片彫り蓮弁文	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色N7/～10YR7/1(灰オリーブ色5Y5/2釉をやや厚く施す)	龍泉窯系 太宰府分類　椀Ⅰ類
247	35	磁器	青磁皿	SD07(A区)	②1.9＋α ③4.2	残存部全面施釉	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色N7/(灰オリーブ色5Y5/2釉を厚く施す)	龍泉窯系
248	35	瓦質土器	鉢	SD07(B区)	②4.0＋α	回転ナデ	A径1.0mm内の白色砂粒を少量含む。やや粗　B良好 C外:黄灰色2.5Y6/1、内:灰白色2.5Y7/1～8/1	
249	35	鉄製品	紡錘車？	SD07(B区)	②2.6＋α ④4.0＋α		C褐色10YR4/4～黄褐色10YR5/6	重量12.65g
250	37	土師器	小皿	SP182	①8.6 ②1.5 ③6.8	回転ナデ　外底面に回転糸切り痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C橙色7.5YR7/6	
251	37	土師器	小皿	SP150	①8.7 ②1.8 ③6.0	回転ナデ、内底面ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径5.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　Cにぶい橙色7.5YR7/4～橙色7.5YR7/6	
252	37	土師器	杯	SP111	①(12.5) ②2.8 ③8.4	回転ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　Cにぶい黄橙色10YR7/3～7/4	
253	37	土師器	杯	SP150	①12.5 ②2.75 ③9.1	回転ナデ、内底面ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む。やや精良　B良好　C浅黄橙色10YR8/3	
254	37	土師器	杯	SP236	①(13.1) ②3.0 ③9.4	回転ナデ、内底面ナデ　外底面に回転糸切り痕・板状圧痕	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好　C外:にぶい黄橙色10YR7/3～7/4 内:灰黄褐色10YR6/2～にぶい黄橙色10YR7/3	
255	37	磁器	青磁杯	SP339	①(13.0) ②2.5	残存部全面施釉　内面に縦方向の凹面の削りを入れ花弁形とする	A細かい黒色粒子を少量含む　B良好　C灰白色10Y8/1(明緑灰色10GY7/1釉を厚く施す)	龍泉窯系 太宰府分類　杯Ⅱ-3b類。
256	37	瓦質土器	擂鉢	SP097	②5.35＋α	内外面ハケメ　擂目は現状で2単位	A径2.0mm内の白色砂粒を少量含む　B不良　C外:褐灰色10YR6/1～灰白色10YR8/1、内:灰白色10YR8/1	
257	37	銅製品	不明	SP016	幅3.4　厚0.2～1.0	銅芯、銀メッキ	C芯部:暗青灰色10BG4/1、メッキ部:明緑灰色10G7/1～暗緑灰色10G4/1	重量5.26g 銀メッキ一部残る
258	37	石製品	砥石	SP293	長さ10.55　幅6.9 厚さ2.5～3.5	使用面４面	Cにぶい黄橙色10YR7/2～明黄褐色10YR7/6	砂岩製

6 区

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径②器高③底径（高台径）④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調(釉調)	備考
259	40	土師器	杯	SD01	①(12.6) ②2.6 ③7.4	回転ナデ、内底面はナデ 外底面に回転糸切り痕	A径4.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む。精良 B良好 Cにぶい黄橙色10YR7/2～褐灰色10YR6/1	
260	40	陶器	盤	SD01	②1.5＋α	内面施釉	A径1.0mm内の白色・黒色粒子を少量含む B良好 C口縁部:灰白色10YR7/1、他:明褐灰色7.5YR7/1(浅黄色5Y7/3釉を薄く施す)	
261	40	陶器	瓶	SD01	①(6.0) ②2.6＋α	残存部全面施釉	A細かい白色・黒色粒子少量含む B良好 C灰黄褐色10YR6/2～にぶい黄橙色10YR6/3(灰白色7.5Y7/2釉を薄く施す)	
262	40	陶器	盤	SD01	②4.0＋α	内面施釉	A径2.0mm内の白色・褐色・黒色粒子を少量含む B良好 C灰白色10YR7/1～褐灰色10YR6/1(浅黄色2.5Y7/4～にぶい黄色2.5Y6/4)	
263	40	土師器	小皿	SD03	①(10.0) ②1.2 ③(8.0)	回転ナデ 外底面に回転糸切り痕	A径1.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む。精良 B良好 C浅黄橙色10YR8/3	
264	40	磁器	白磁椀	SD03	②2.85＋α	回転ヘラ削り 残存部全面施釉	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C灰白色10Y8/1(明オリーブ灰色2.5GY7/1釉を薄く施す)	太宰府分類 椀IV類

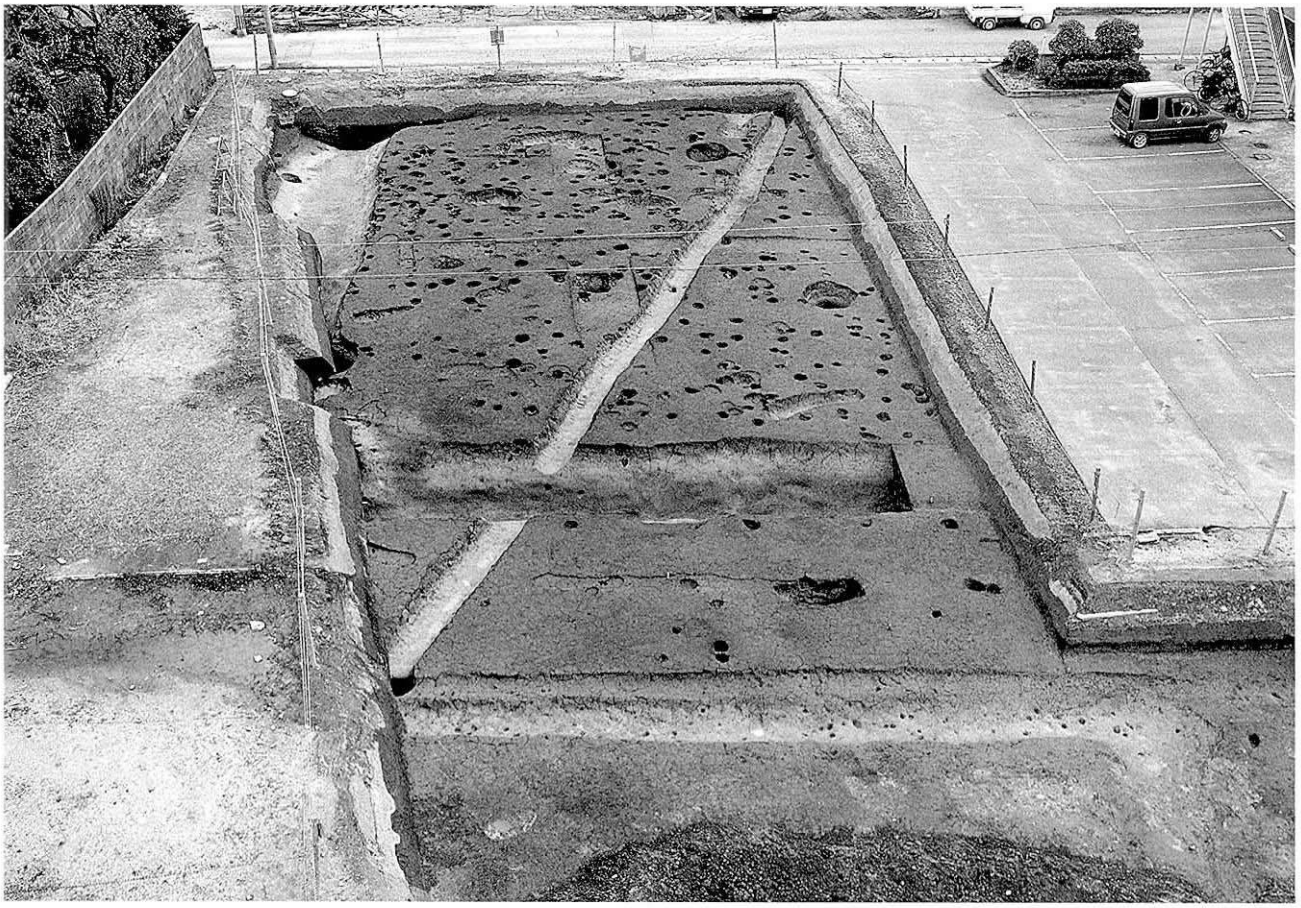
7 区

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径②器高③底径（高台径）④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調(釉調)	備考
265	45	土師器	小皿	SD01	②0.85＋α	摩耗の為調整不明	A径1.0mm内の石英・長石・雲母をごく少量含む。精良 B良好 C浅黄橙色10YR8/3～8/4	
266	45	土師器	杯	SD05	②2.4＋α	回転ナデ	A径1.0mm内の石英・長石などを少量含む B良好 C浅黄橙色10YR8/4～にぶい黄橙色10YR7/4	
267	45	磁器	青磁椀	SD05東側支流	②1.95＋α ③(5.2)	体部最下位以下は露胎 外面に細かい櫛目文	A黒色粒子少量含む B良好 C灰白色7.5Y7/1～7/2(オリーブ灰色5GY6/1釉を薄く施す)	肥安窯系
268	45	土師器	小形丸底壺	SD06	①(9.5) ②7.8＋α ③(12.4)	胴部外面ヨコハケ 口縁部ヨコナデ	A径4.0mm内の石英・長石などを少量含む B良好 C外:橙色7.5YR6/6～明褐色7.5YR5/6、内:浅黄橙色10YR8/3	頸部内面の接合痕が顕著に残る
269	45	磁器	染付椀	SD08	②2.1＋α	外面に略化した「福」字	A緻密 B良好 C白色N9/(明緑灰色10GY8/1釉を薄く施す)	肥前産広東椀 高台内側に釉着物有り
270	45	磁器	白磁皿	SD09	②2.9＋α	高台先端部の釉を掻き取る	A緻密 B良好 C白色N9/～灰白色N7/(明緑灰色2.5GY7/1釉をやや厚く施す)	高台内側面に砂粒が釉着 森田分類E群
271	45	土師器	小皿	SD10(D区)	①(6.7) ②1.2 ③(5.2)	回転ナデ、内底面はナデ 外底面に回転糸切り痕	A径2.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C外:にぶい黄橙色10YR7/3、内:浅黄橙色10YR8/3	
272	45	陶器	皿	SD10(A区)	①1.35＋α ②(5.0)	高台～高台内露胎	A細かい白色・褐色砂粒をごく少量含む B良好 C灰黄褐色10YR6/2(灰オリーブ色7.5Y6/2～オリーブ灰色10Y6/2釉を薄く施す)	肥前産か
273	45	磁器	青磁小椀	SD10(A区)	②2.0＋α ③2.9	高台先端部～高台内露胎	A細かい黒色粒子を少量含む B良好 C明緑灰色7.5GY8/1(明オリーブ灰色5GY7/1釉を極めて厚く施す)	龍泉窯系
274	45	磁器	青磁椀	SD10(A区)	②2.85＋α ③(4.9)	体部外面最下位以下は露胎	A細かい白色砂粒をごく少量含む B良好 Cにぶい橙色7.5YR7/4～橙色7.5YR7/5(灰白色10YR8/1～7/1釉を薄く施す)	龍泉窯系か
275	45	磁器	青磁椀	SD10(C区)	②5.25＋α	残存部全面施釉 外面に剣先状の蓮弁文	A緻密 B良好 C明緑灰色7.5GY8/1(オリーブ灰色10Y6/2～5/2釉を厚く施す)	龍泉窯系
276	45	磁器	青磁大皿	SD10(A区)	②3.85＋α	残存部全面施釉 内面に草花文	A黒色粒子少量含む B良好 C明緑灰色10GY8/1(灰オリーブ色7.5Y5/3釉を厚く施す)	龍泉窯系
277	45	土師質土器	鍋	SD10(D区)	②10.8＋α	外面ナデ 内面ヨコハケ	A径3.0mm内の石英・長石・雲母を少量含む B良好 C外:褐灰色7.5YR4/1～黒褐色7.5YR3/1、内:にぶい橙色7.5YR7/3～7/4	
278	45	土師質土器	擂鉢	SD10(A区)	②4.45＋α	外面タテハケ後ナデ、内面ハケメ後擂目施す	A径2.0mm内の石英・長石などを少量含む B不良 Cにぶい黄橙色10YR7/4	
279	45	金属製品	不明	SD10(A区)	長さ3.05 環状部幅1.45		C鉄芯:にぶい赤褐色5YR4/3	鉄芯銅箔の可能性高い

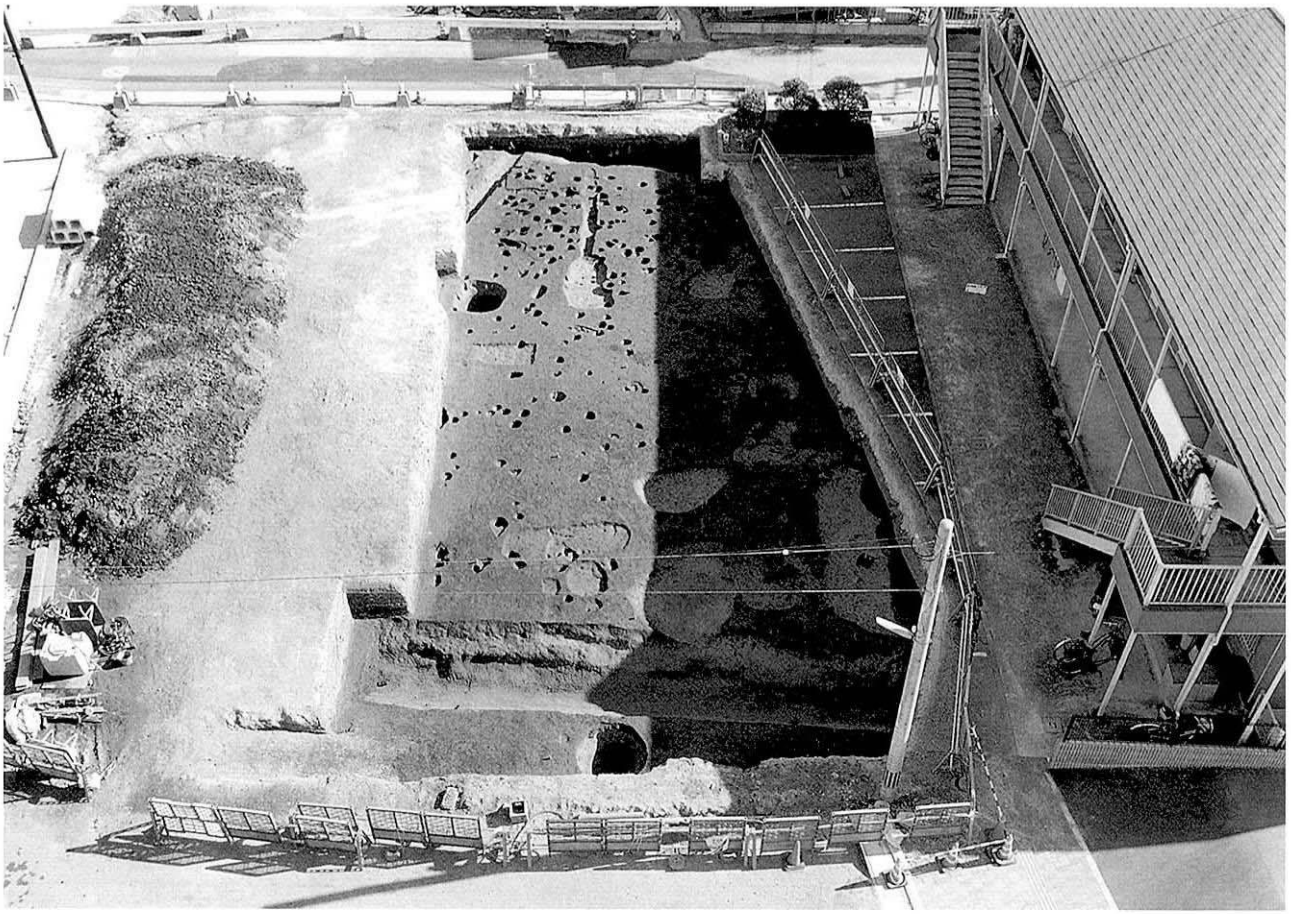
1区・3区（補遺）

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法量cm①口径②器高③底径（高台径）④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調(釉調)	備考
280	46	金属製品	銅銭	1区 SP189	直径2.3 厚さ0.1 孔幅0.65		C褐灰色10YR4/1	文字は不鮮明で銭種不明
281	46	金属製品	銅銭	1区 SP189	直径2.3 厚さ0.1 孔幅0.65		Cオリーブ灰色2.5GY6/1	文字は不鮮明で銭種不明
282	46	金属製品	和釘	3区 SP01	長さ14.1＋α	頭部がやや肥厚 断面は方形	C地鉄部分：黒色10YR1.7/1～黒褐色10YR3/1、錆部分：明黄褐色10YR6/8	
283	46	金属製品	和釘	3区 SP01	Aの長さ10.3＋α Bの長さ8.6＋α	2点が錆着 1点は頭部が円環状 断面は方形	C地鉄部分：黒色10YR1.7/1～黒褐色10YR3/1、錆部分：明黄褐色10YR6/8	頭部が円環状の釘をA、他方の釘をBとする
284	46	金属製品	和釘	3区 SP01	Aの長さ3.15＋α Bの長さ4.65＋α	2点が錆着 1点は折釘か？ 断面は方形	C地鉄部分：黒色10YR1.7/1～黒褐色10YR3/1、錆部分：橙色7.5YR6/6～明褐色7.5YR5/6	折釘の可能性のあるものをA、他方の釘をBとする

図　版



（１）５区　北側全景（南西から）



（２）５区　東側全景（南西から）

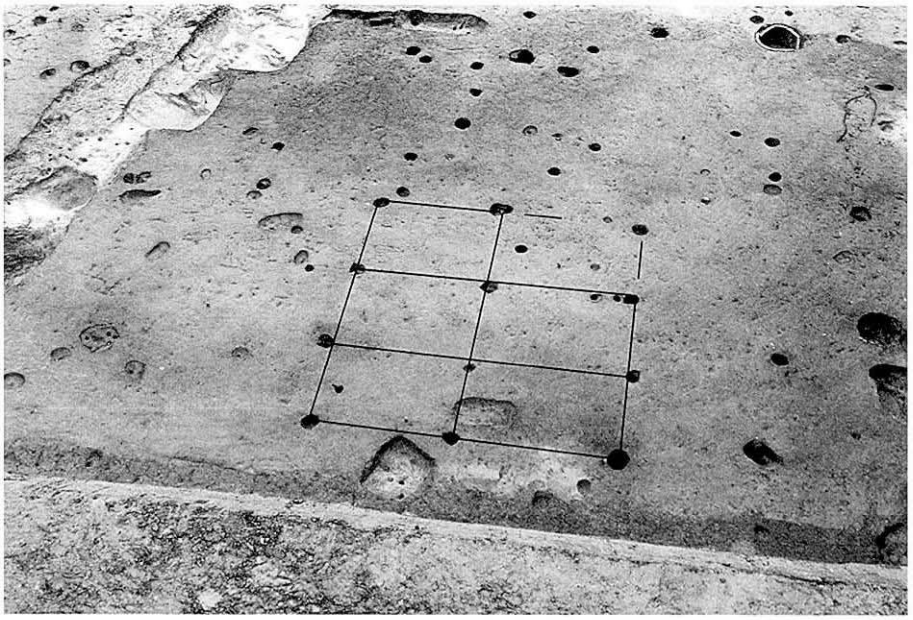
図版２



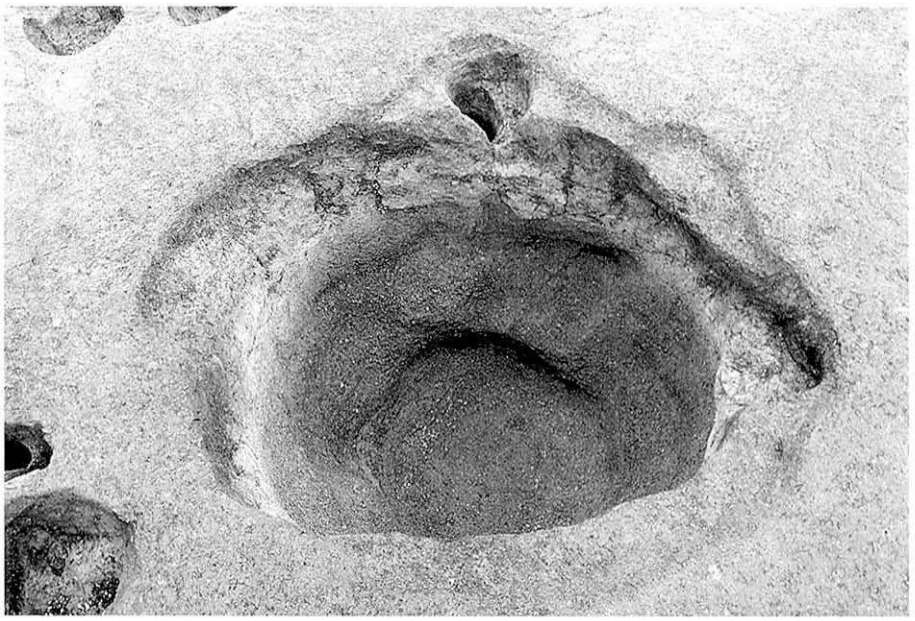
（１）５区　南東側全景（南西から）



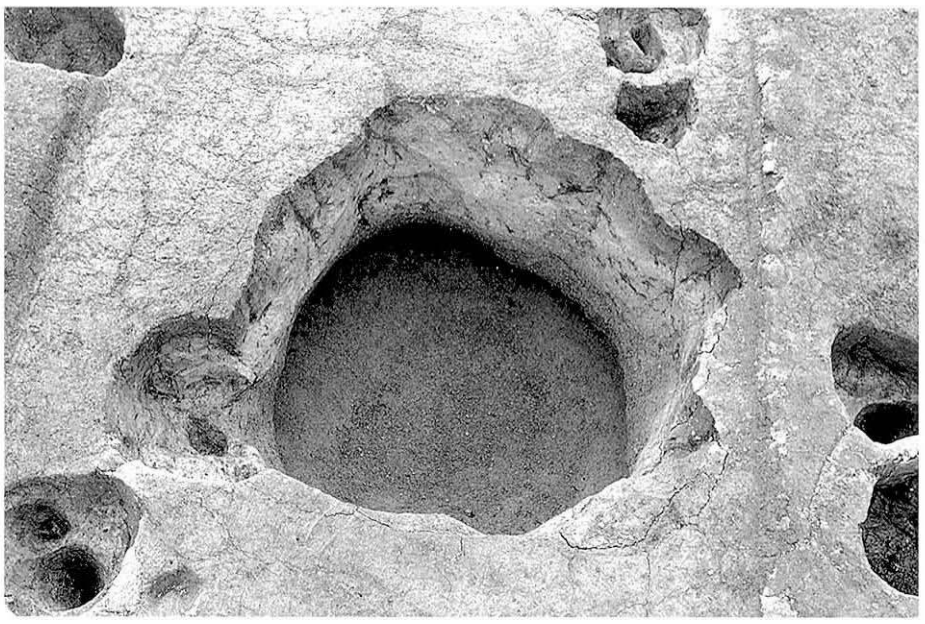
（２）６区　全景（南西から）



（１）５区　SB01
完掘状況
（南西から）



（２）５区　SE02
完掘状況
（北から）



（３）５区　SE03
完掘状況
（北東から）

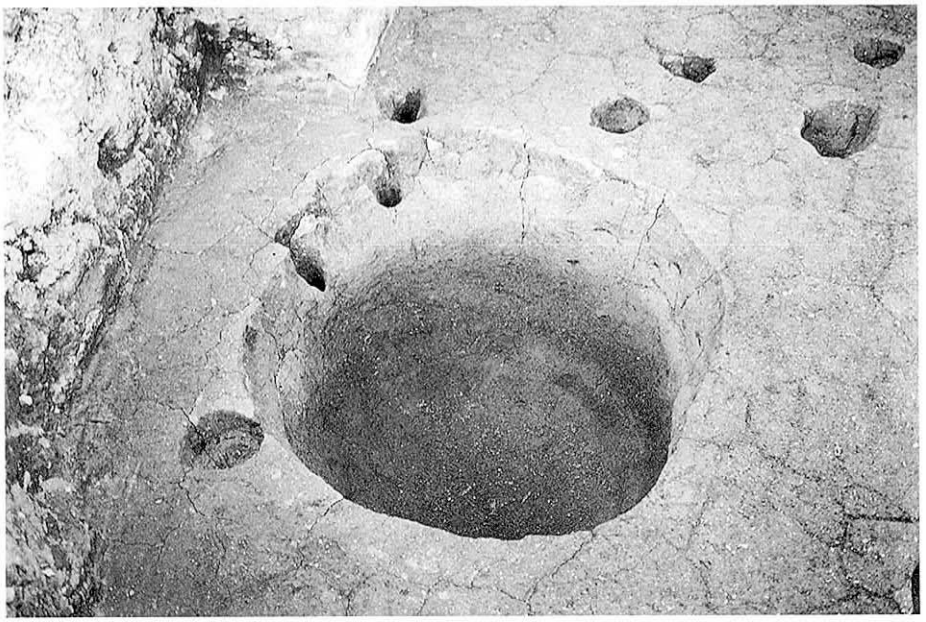
図版４



（１）５区　SE04
完掘状況
（東から）



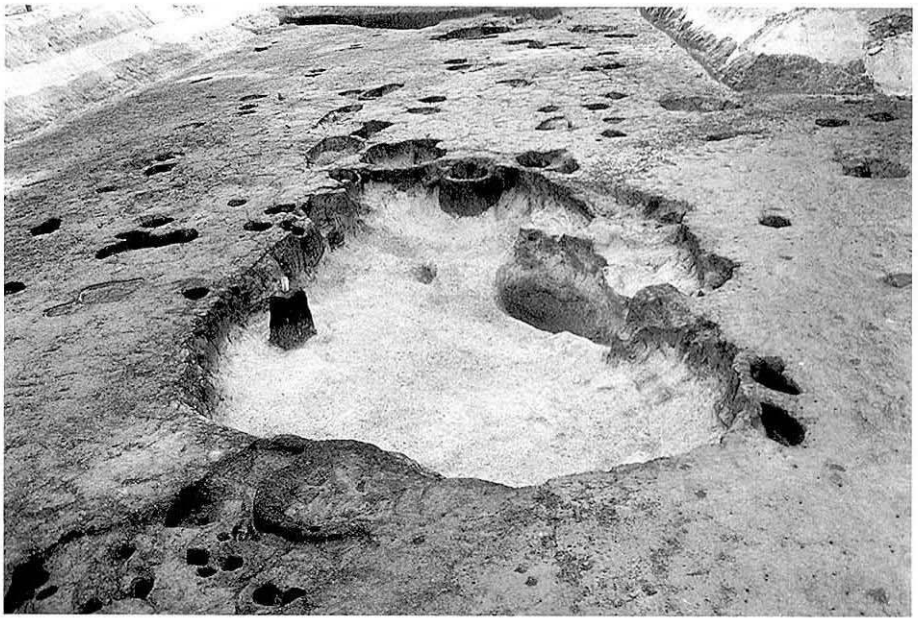
（２）５区　SE05
井筒部材出土
状況
（南東から）



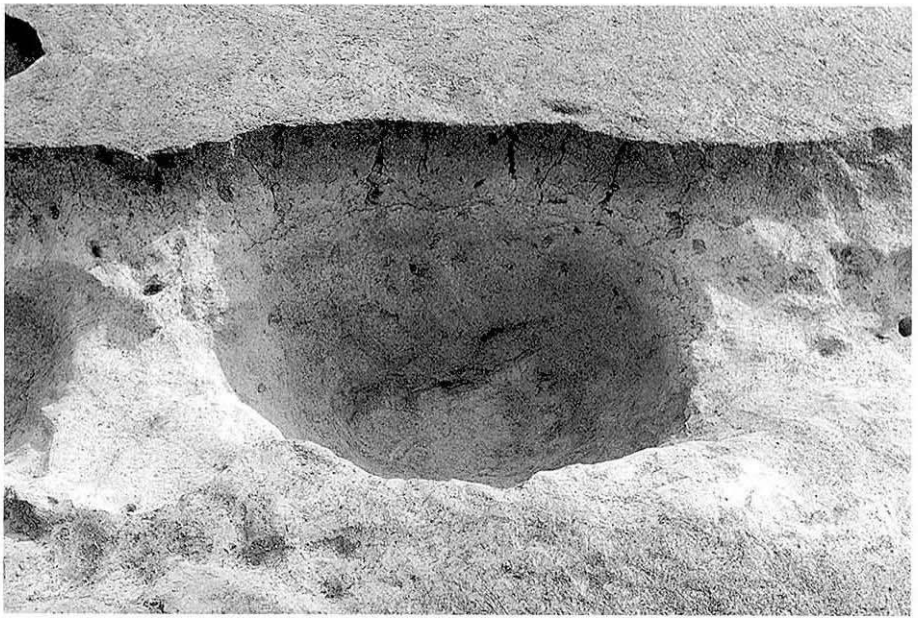
（３）５区　SE05
完掘状況
（南西から）



（１）５区　SE06
完掘状況
（北西から）

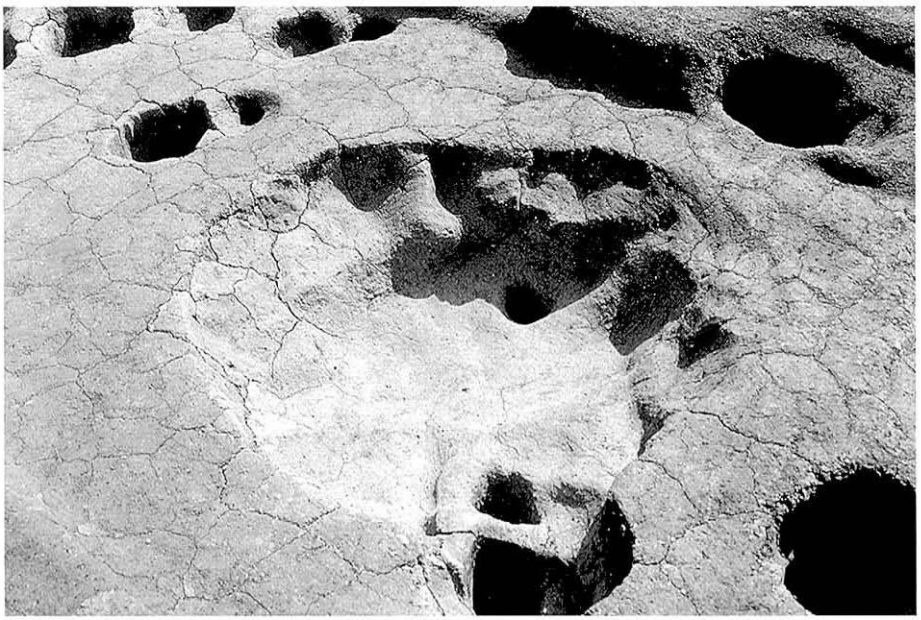


（２）５区　SX01
完掘状況
（北西から）



（３）５区　SX11
完掘状況
（北から）

図版６



（１）５区　SX14
完掘状況
（北西から）



（２）５区　SX16
完掘状況
（北東から）



（３）５区　SX17
完掘状況
（北東から）



（１）５区　SX15
遺物出土状況１
（南東から）

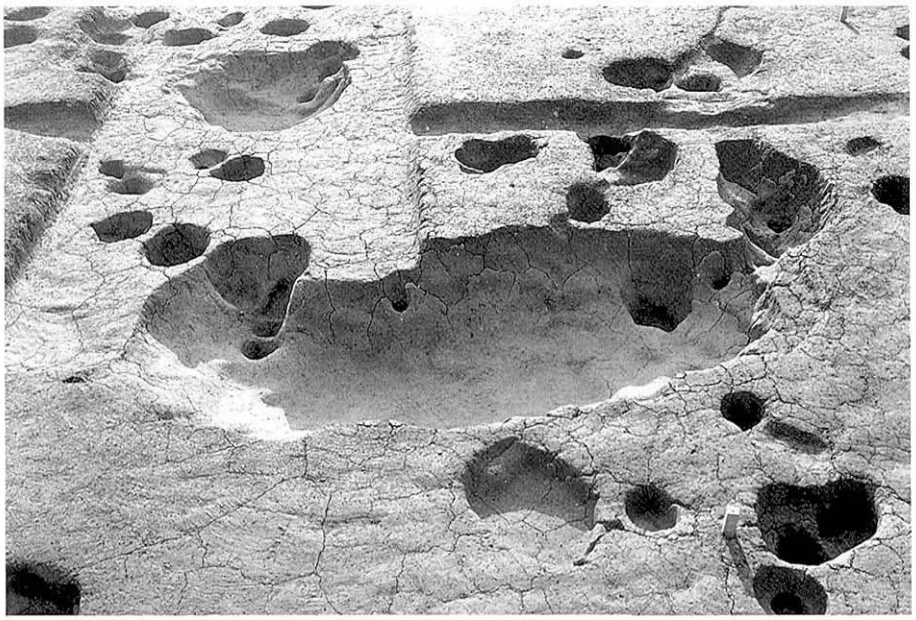


（２）５区　SX15
遺物出土状況２
（南東から）



（３）５区　SX15
遺物出土状況３
（北から）

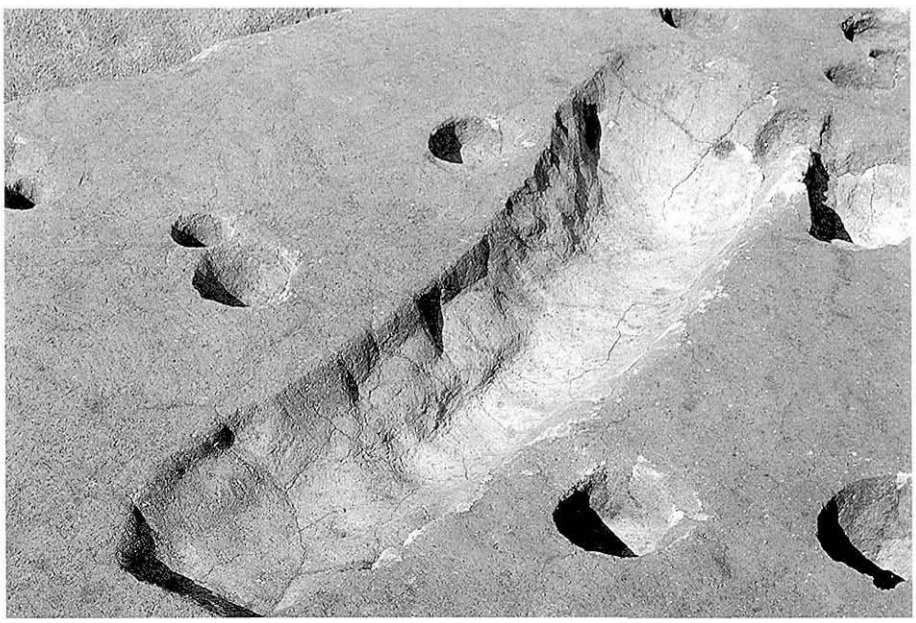
図版８



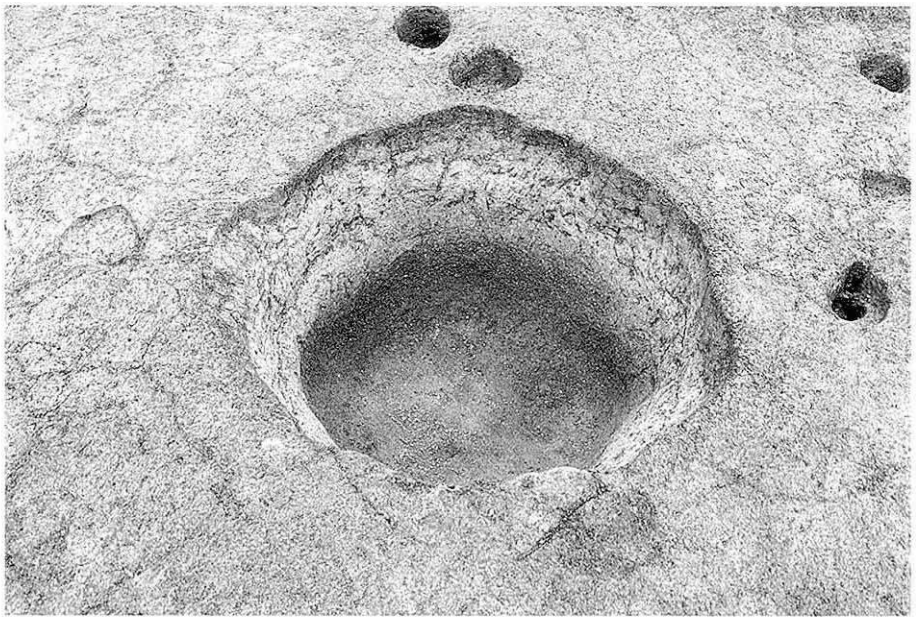
（１）５区　SX15
完掘状況
（北東から）



（２）５区　SX20
完掘状況
（南東から）



（３）５区　SX28
完掘状況
（東から）



（１）５区　SX30
完掘状況
（北西から）



（２）５区　SX34
完掘状況
（南東から）

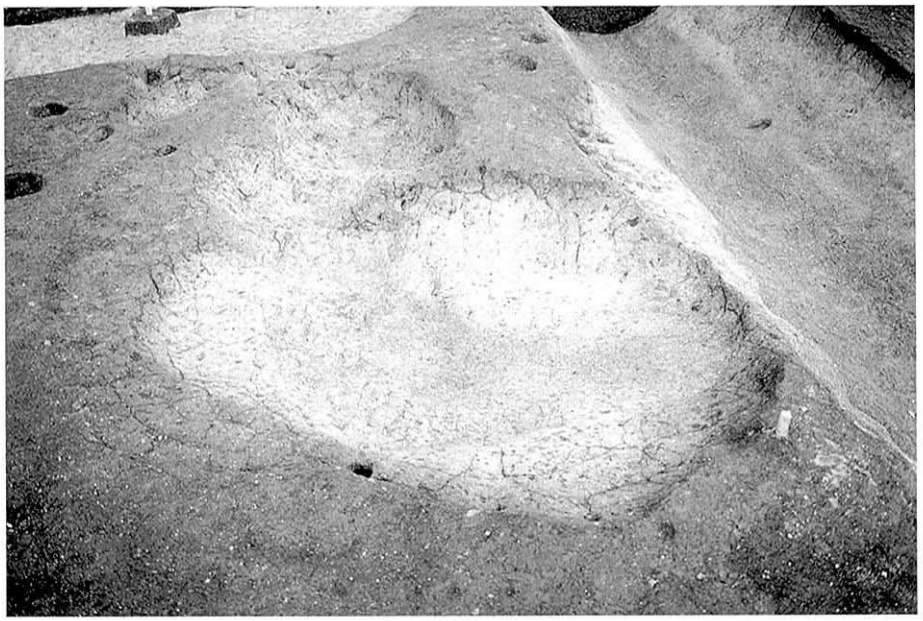


（３）５区　SX39・40
完掘状況
（西から）

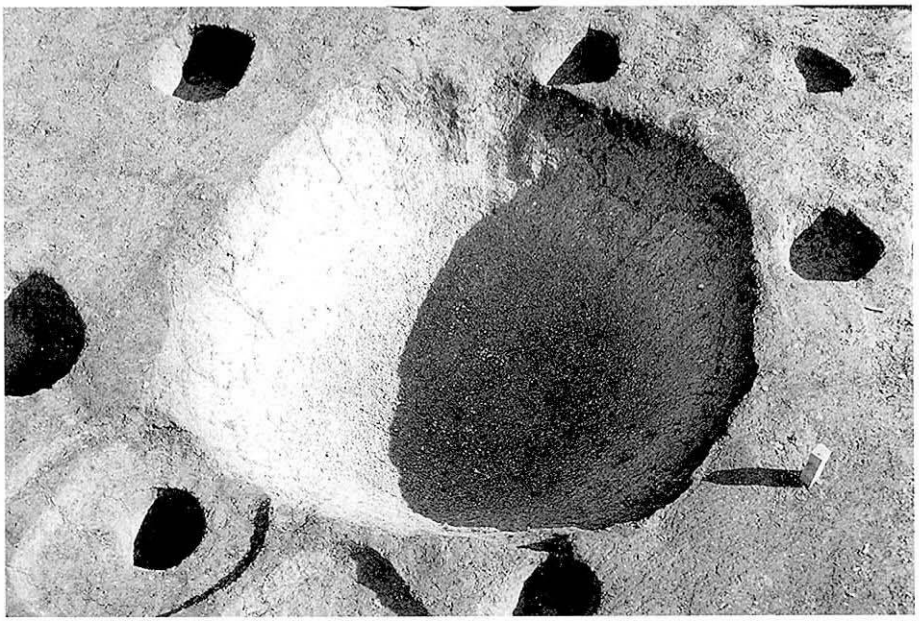
図版10



（1）５区　SX41
完掘状況
（北東から）



（2）５区　SX42・43
完掘状況
（北から）



（3）５区　SX44
完掘状況
（北西から）



（1）5区　SX45
完掘状況
（北から）

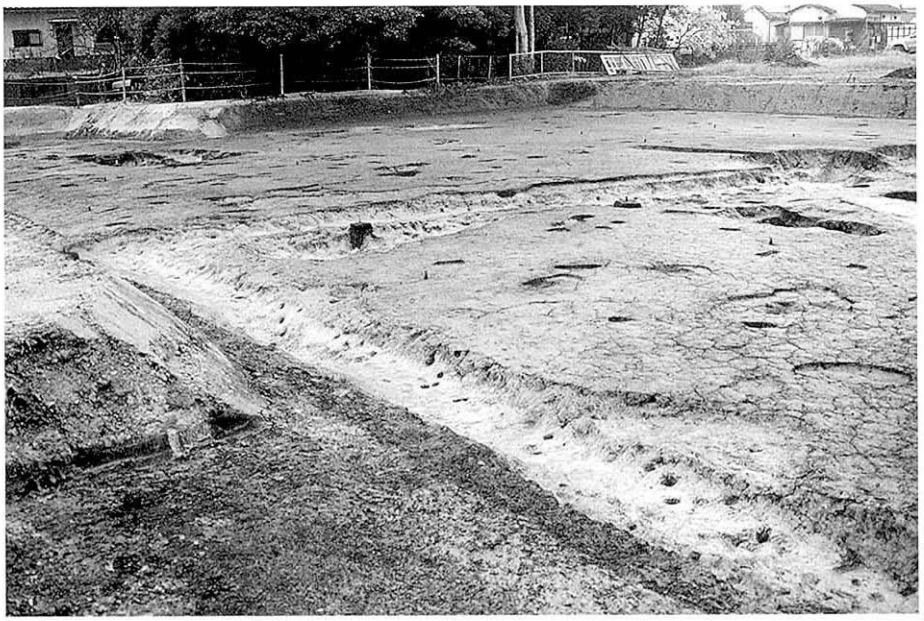


（2）5区　SX47・48
完掘状況
（北から）



（3）5区　SD01・02
完掘状況
（南東から）

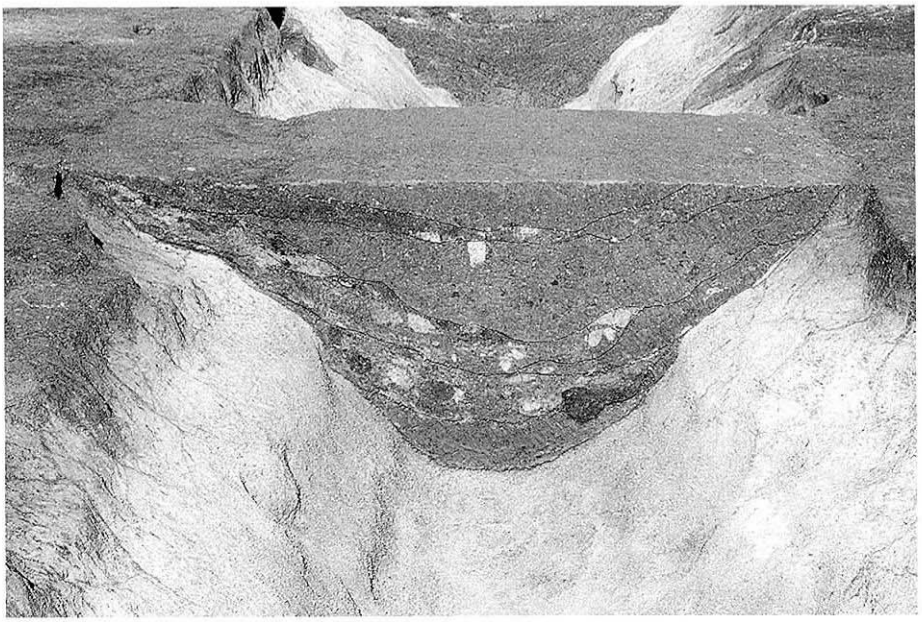
図版12



（1）５区　SD01
完掘状況
（北東から）



（2）５区　SD01
完掘状況
（南西から）



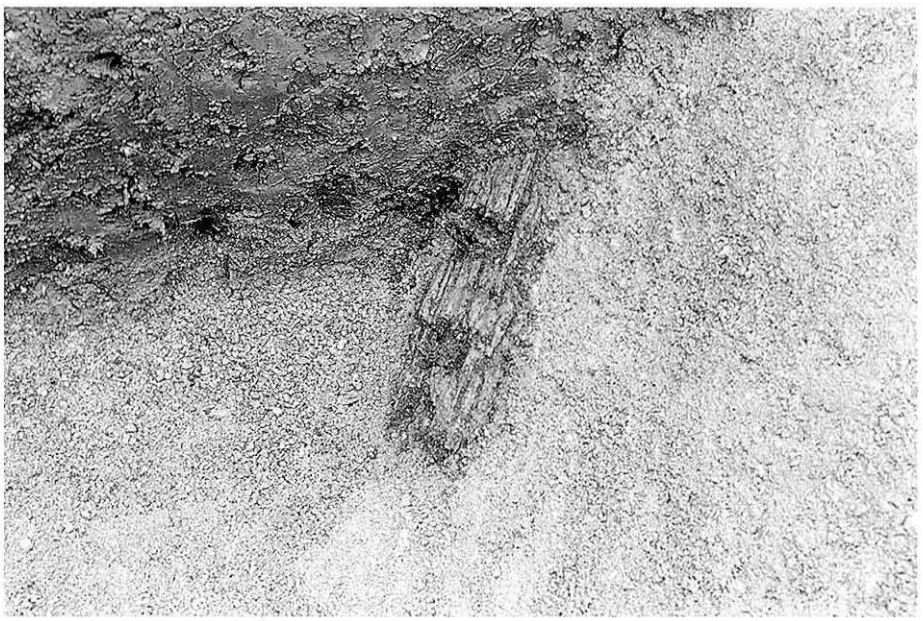
（3）５区　SD04
土層堆積状況
（南から）



（1）５区　SD04
完掘状況
（北西から）



（2）５区　SD04
完掘状況
（南西から）

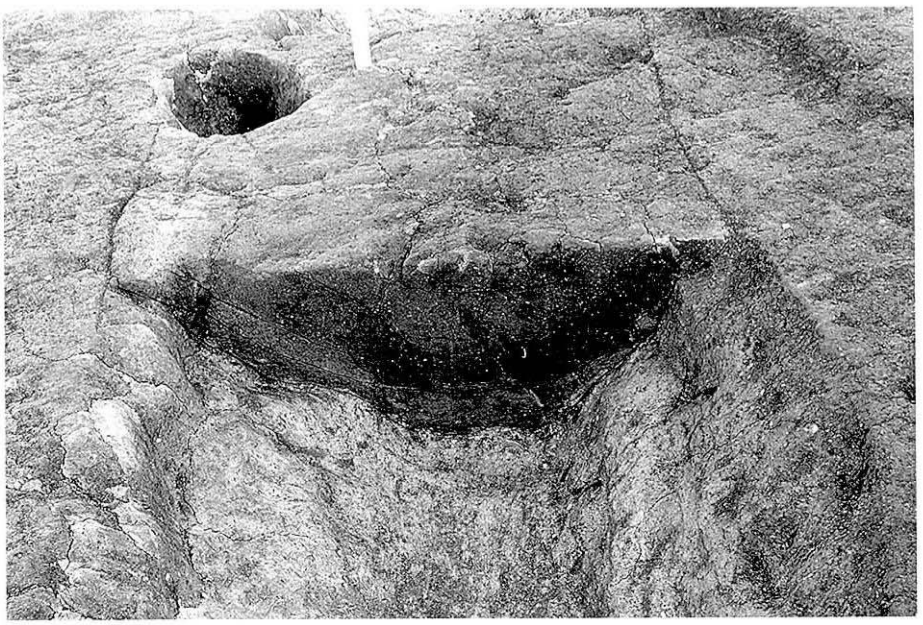


（3）５区　SD04
下駄出土状況
（北から）

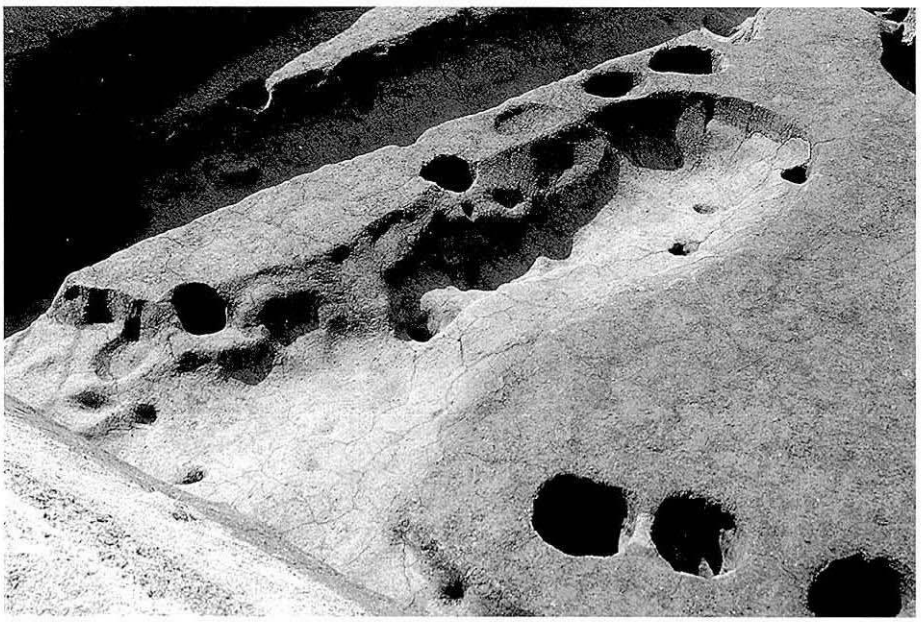
図版14



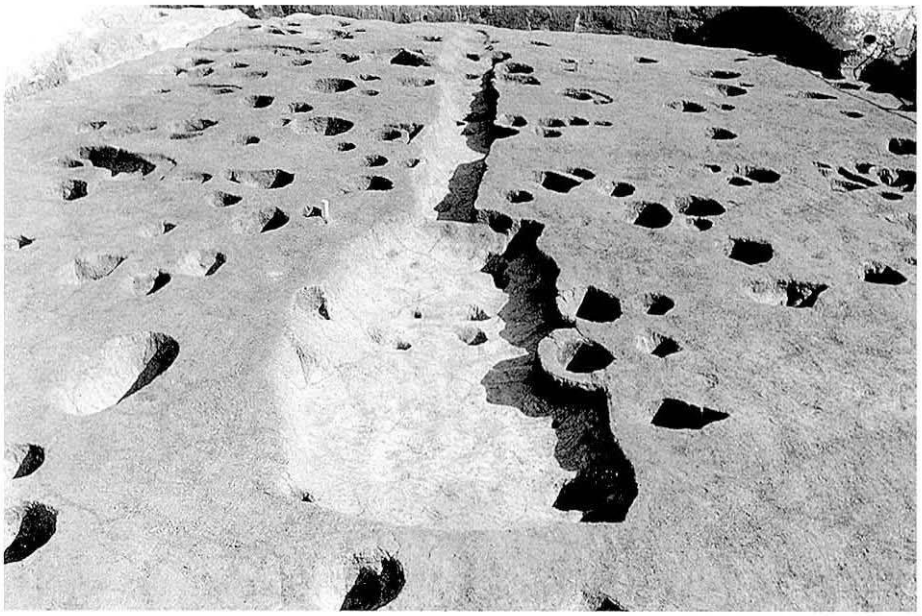
（1）５区　SD05
完掘状況
（東から）



（2）５区　SD05
土層堆積状況
（西から）



（1）５区　SD06
完掘状況
（北東から）



（2）５区　SD07
完掘状況
（南西から）

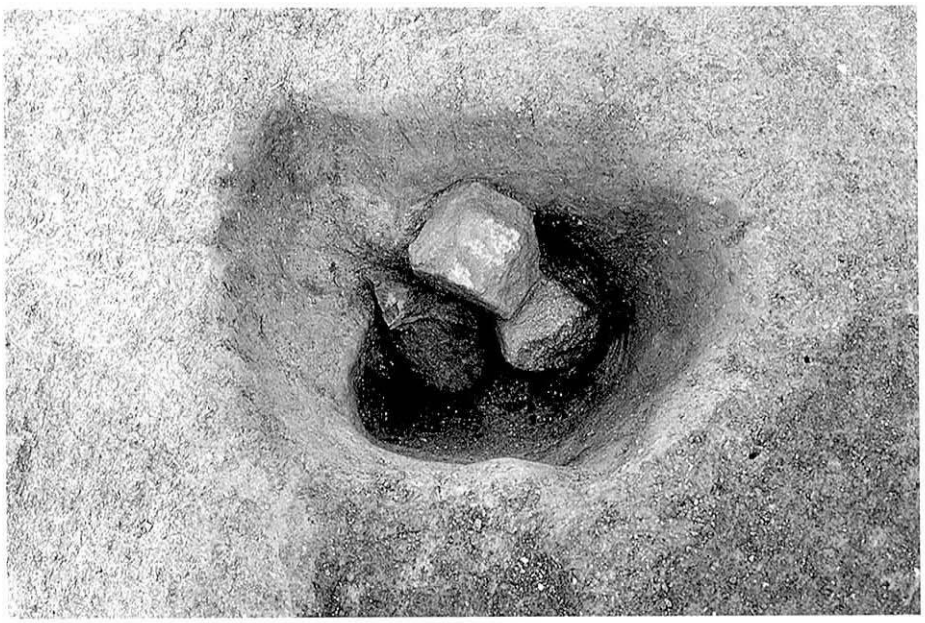


（3）５区　SP282
礫出土状況
（南西から）

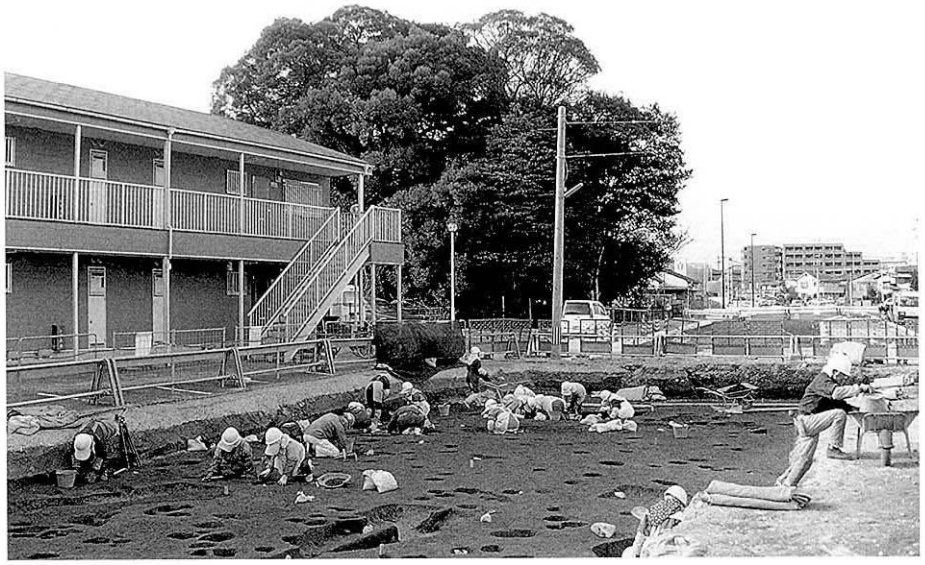
図版16



（1）5区　SP354
礫出土状況
（西から）



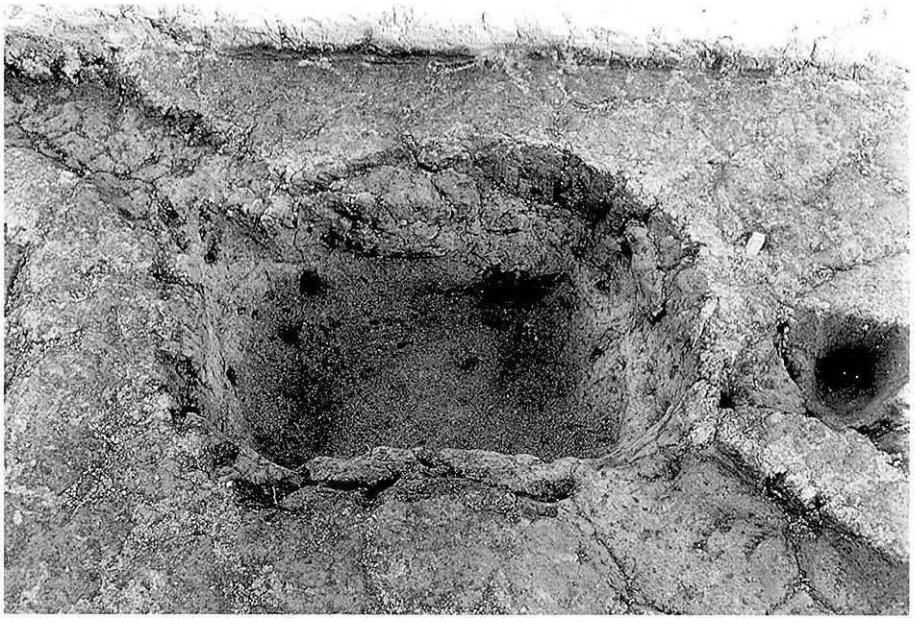
（2）5区　SP366
礫出土状況
（南西から）



（3）5区　調査風景
（北から）

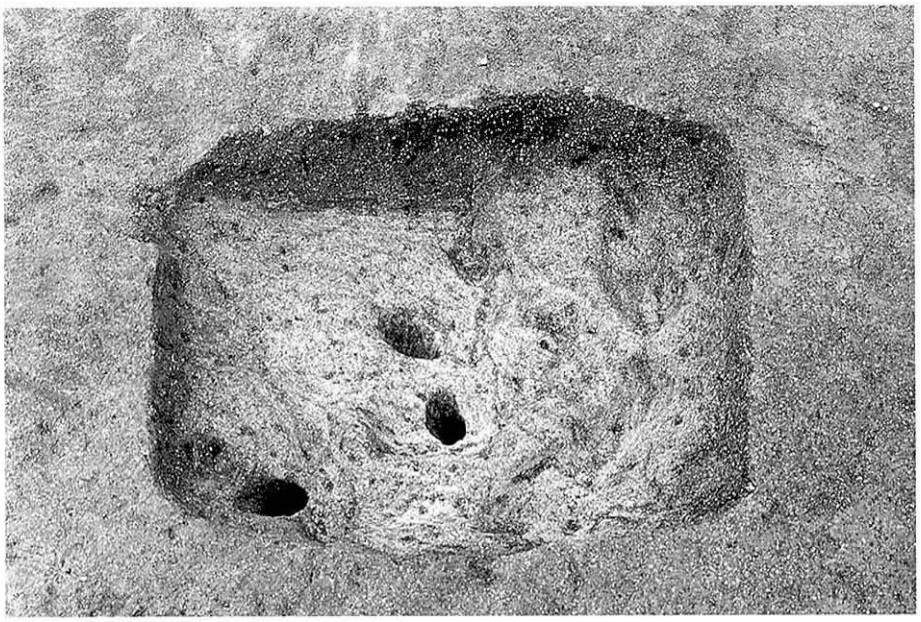


（1）６区から御笠川方向を眺む（南西から）

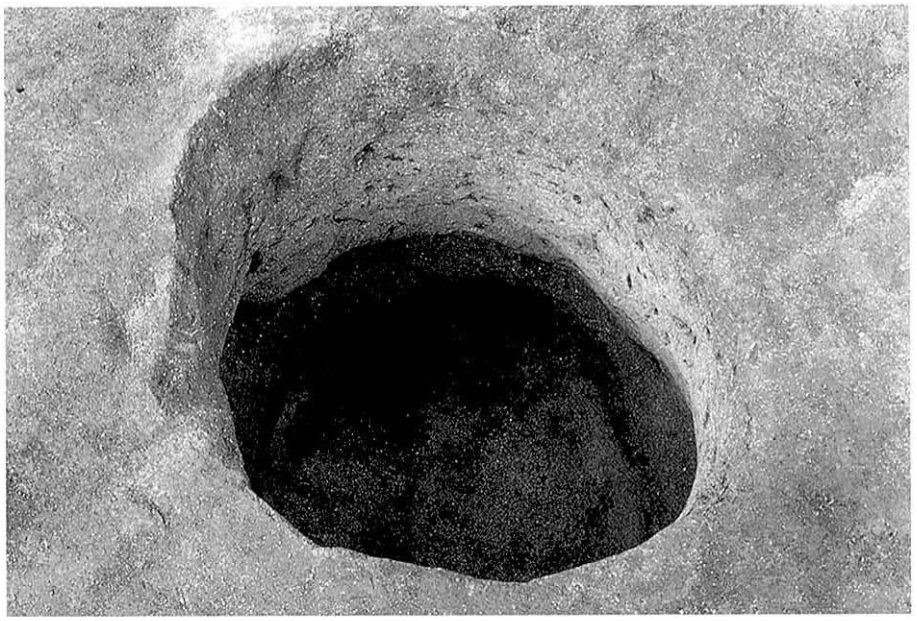


（2）６区　SX01 完掘状況（北東から）

図版18



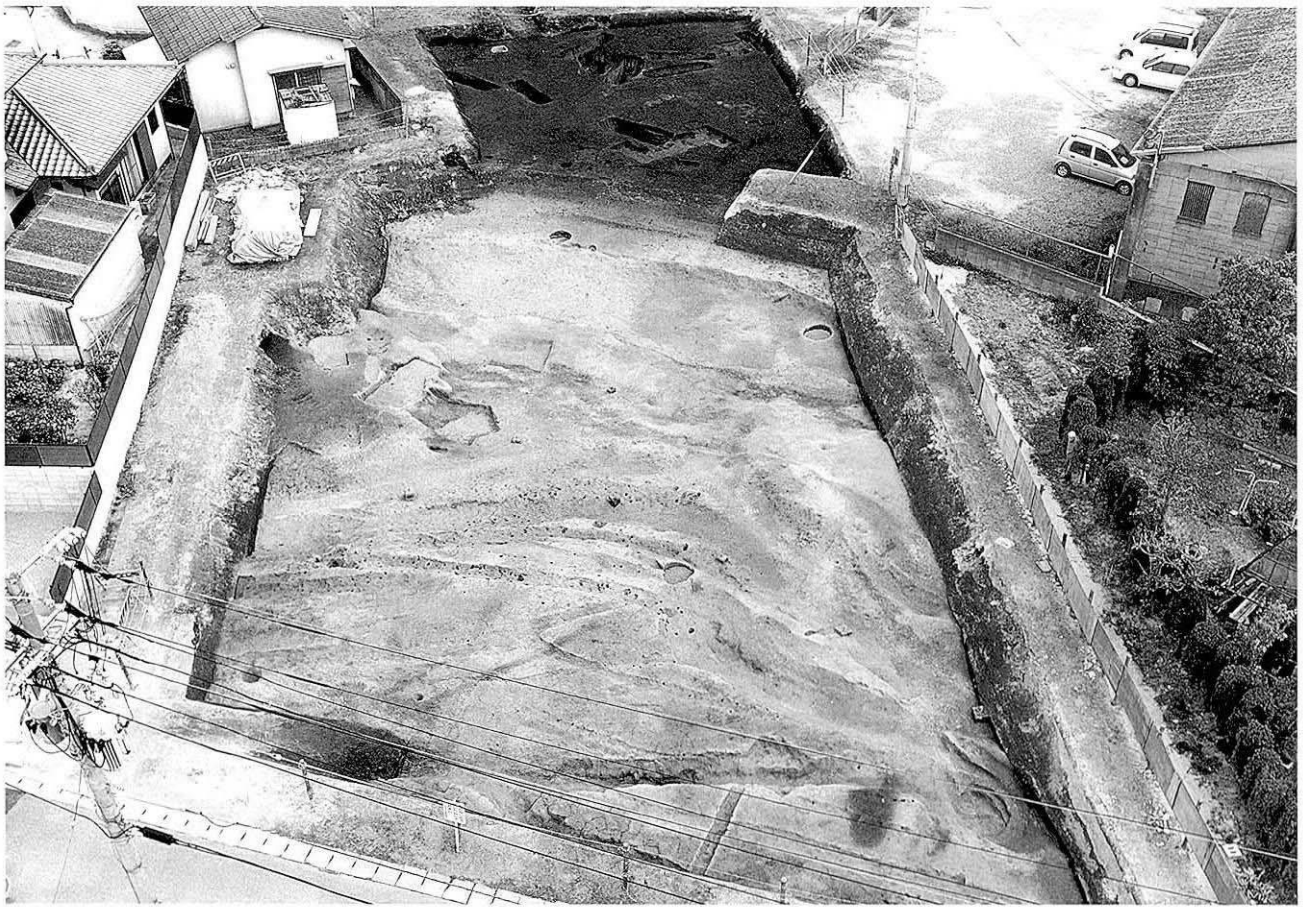
（1）6区　SX03
完掘状況
（南から）



（2）6区　SX04
完掘状況
（西から）



（3）6区　SD01
完掘状況
（北西から）



（1）7区　全景（北東から）



（2）7区　SD08～10周辺（南東から）

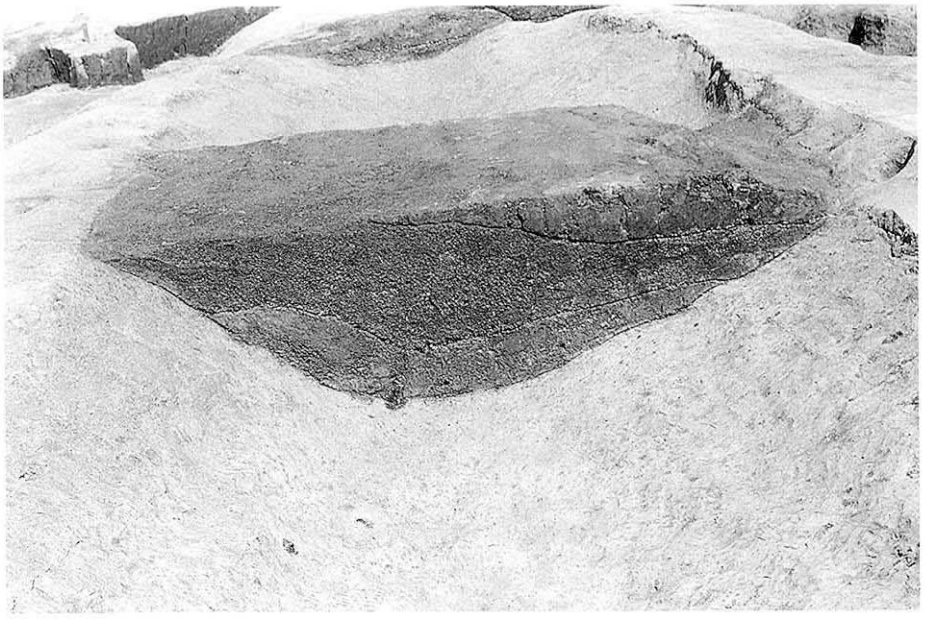
図版20



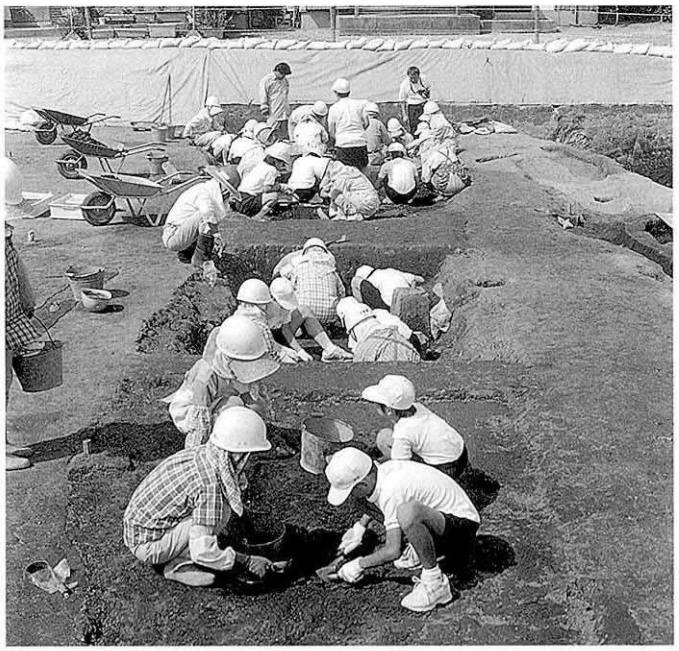
（1）7区　SD10
完掘状況
（北から）



（2）7区　SD10
完掘状況
（南から）



（3）7区　SD06
土層堆積状況
（南から）



（1）体験発掘風景1

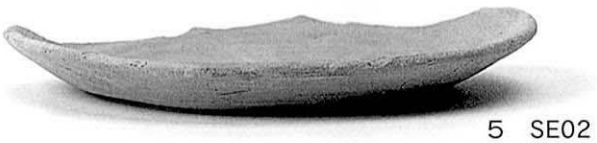


（2）体験発掘風景2



（3）体験発掘風景3


4　SE02


5　SE02


6　SE02


10　SE02



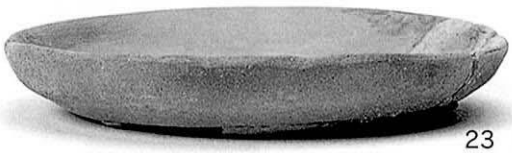

13　SE03


15　SE04

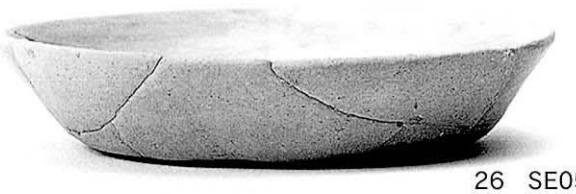

16　SE04

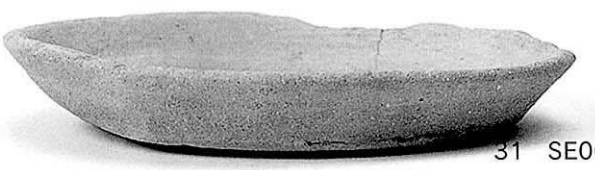

18　SE04


20　SE04


23　SE05


25　SE05


26　SE05


31　SE06



30　SE05



51　SX08



32　SE06

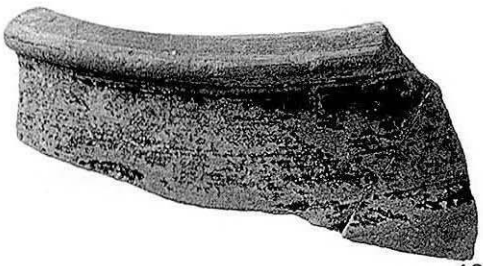




35　SE06



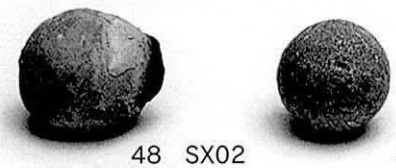
52　SX08



42　SX01



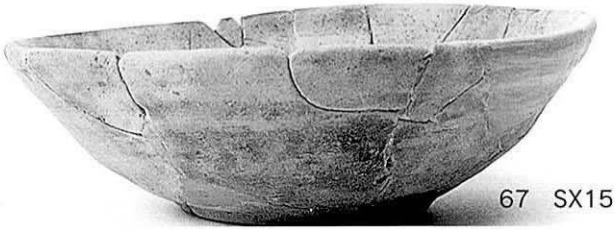
53　SX08



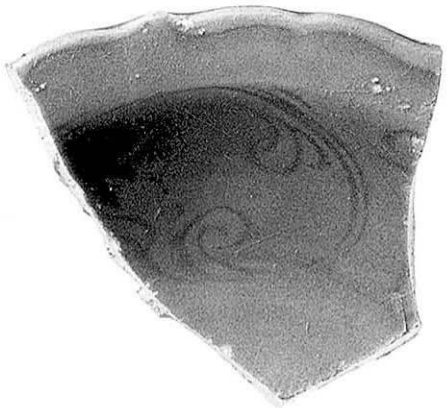
48　SX02　　3区　SD03



49　SX06

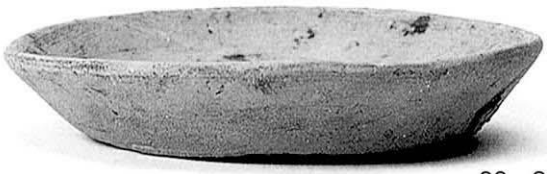


67　SX15





56　SX11



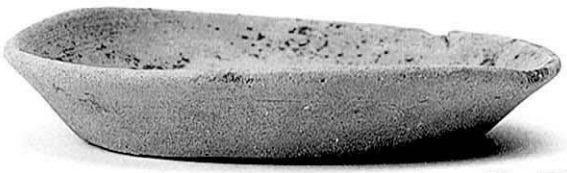
69　SX15



79　SX15



74　SX15



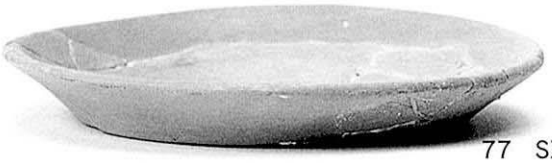
80　SX15



76　SX15



81　SX15



77　SX15



86　SX15



78　SX15



87　SX15



88　SX15



97　SX15



89　SX15



111　SX18



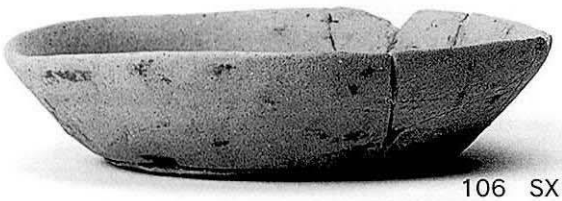
103　SX17



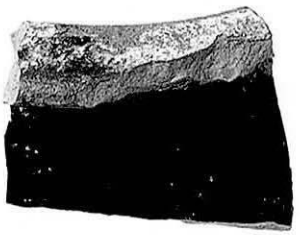
105　SX17



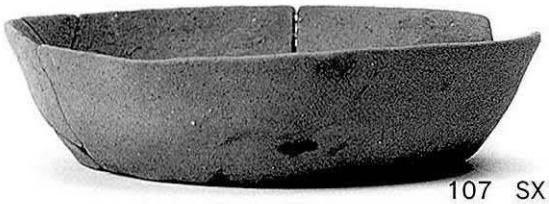
112　SX18



106　SX17



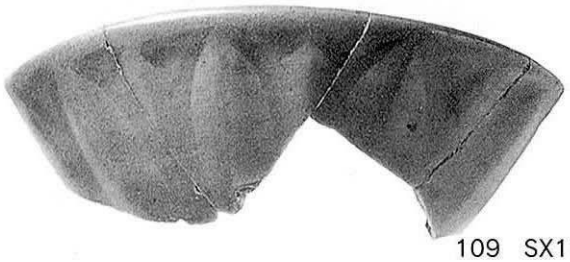
114　SX20



107　SX17



119　SX30



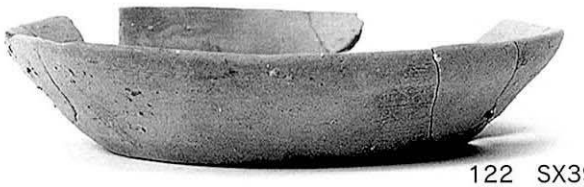
109　SX17



113　SX20



120　SX39


122　SX39


123　SX39


125　SX39


126　SX39

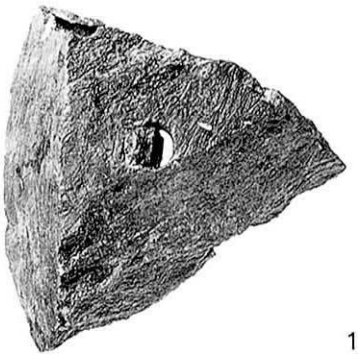

128　SX40


129　SX40


130　SX40


144　SX42

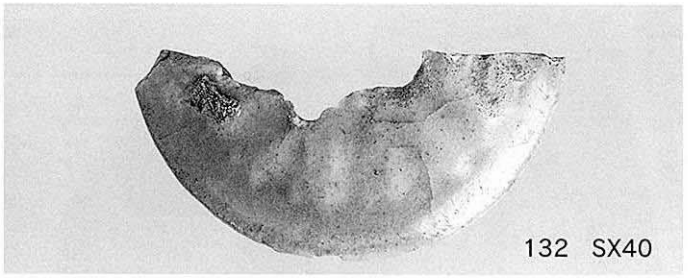


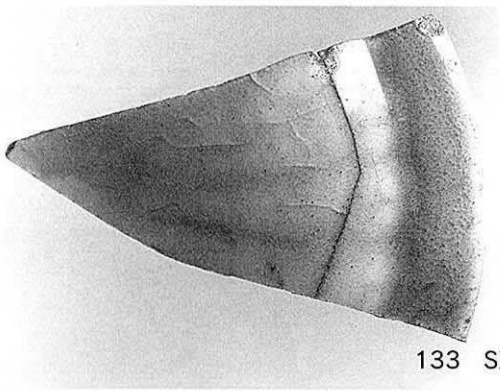

153　SX43


154　SX44


155　SX44


156　SX44

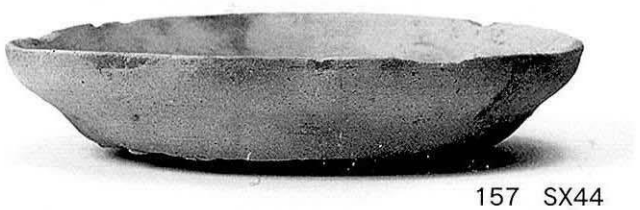

132　SX40

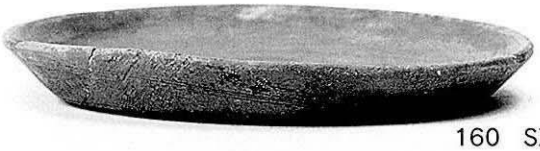

133　SX40


136　SX41


139　SX41


141　SX41

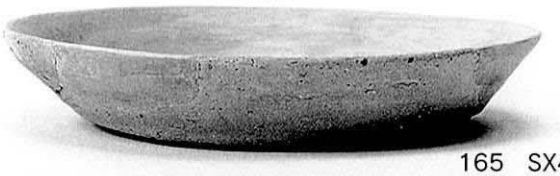

157　SX44

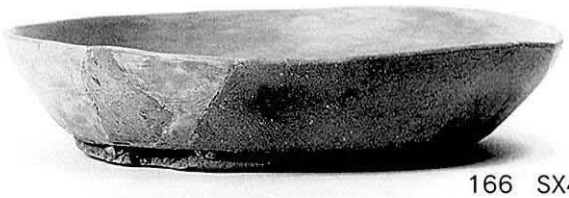

160　SX45


161　SX45


162　SX45


163　SX45


165　SX45


166　SX45


167　SX45


174　SX45



169　SX45





171　SX45



179　SX45







176　SX45



180　SX45



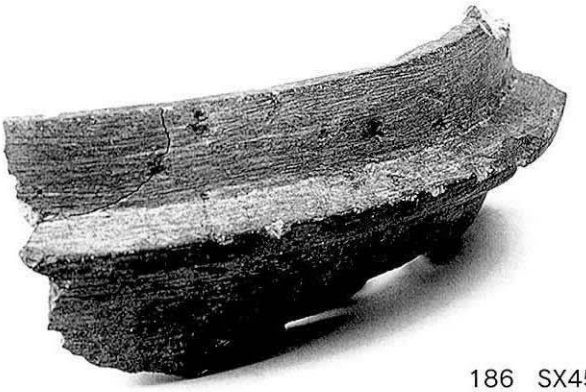
178　SX45



182　SX45



184　SX45

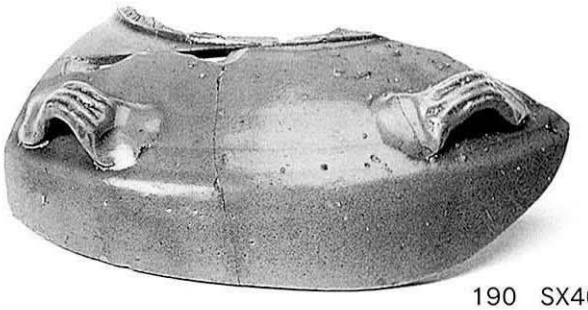


186　SX45



185　SX45





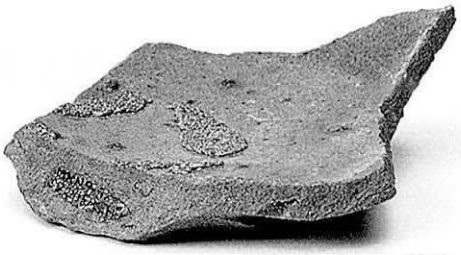
190　SX46



200　SD04



183　SX45



201　SD04

図版30



192　SD01



204　SD04



205　SD04



206　SD04



207　SD04



208　SD04



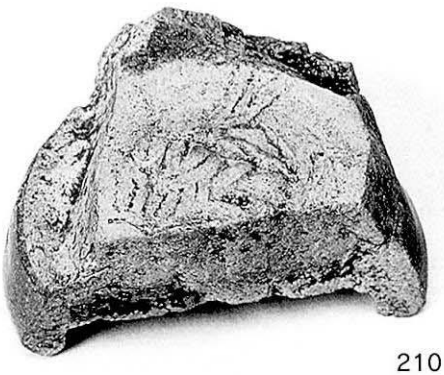
209　SD04



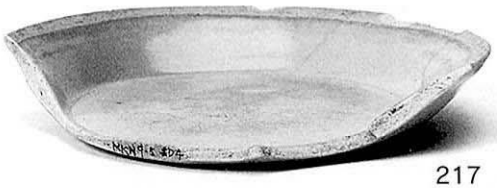
203　SD04



214　SD04



210　SD04



217　SD04

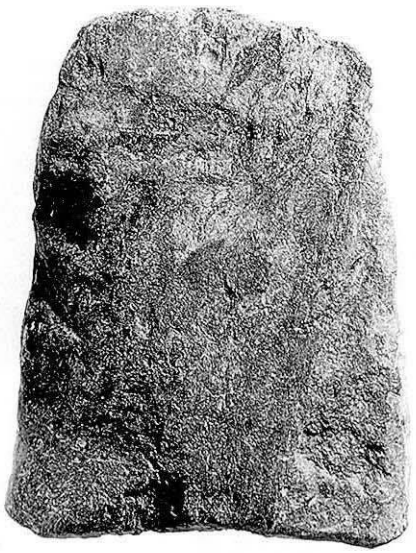


215　SD04



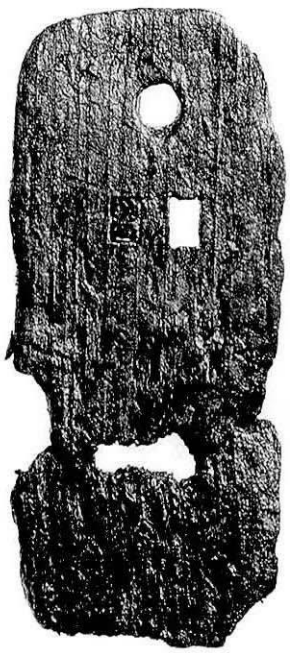
229　SD04

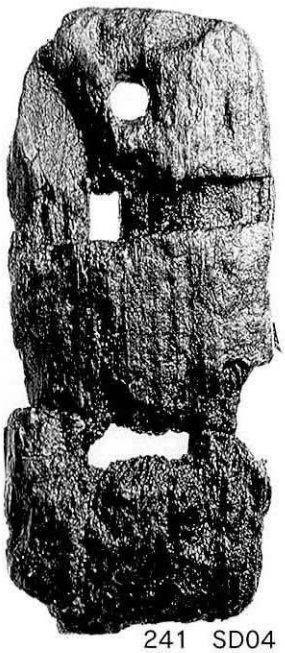
5区　出土遺物





230　SD04





241　SD04





228　SD04



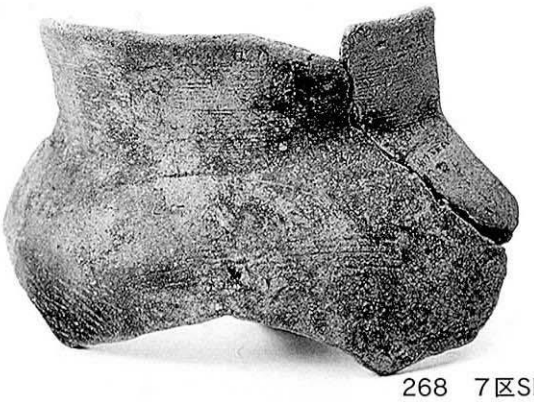


232　SD04

5区　出土遺物ほか



227　SD04



268　7区SD06



233　SD04





275　7区SD10



257　SP16



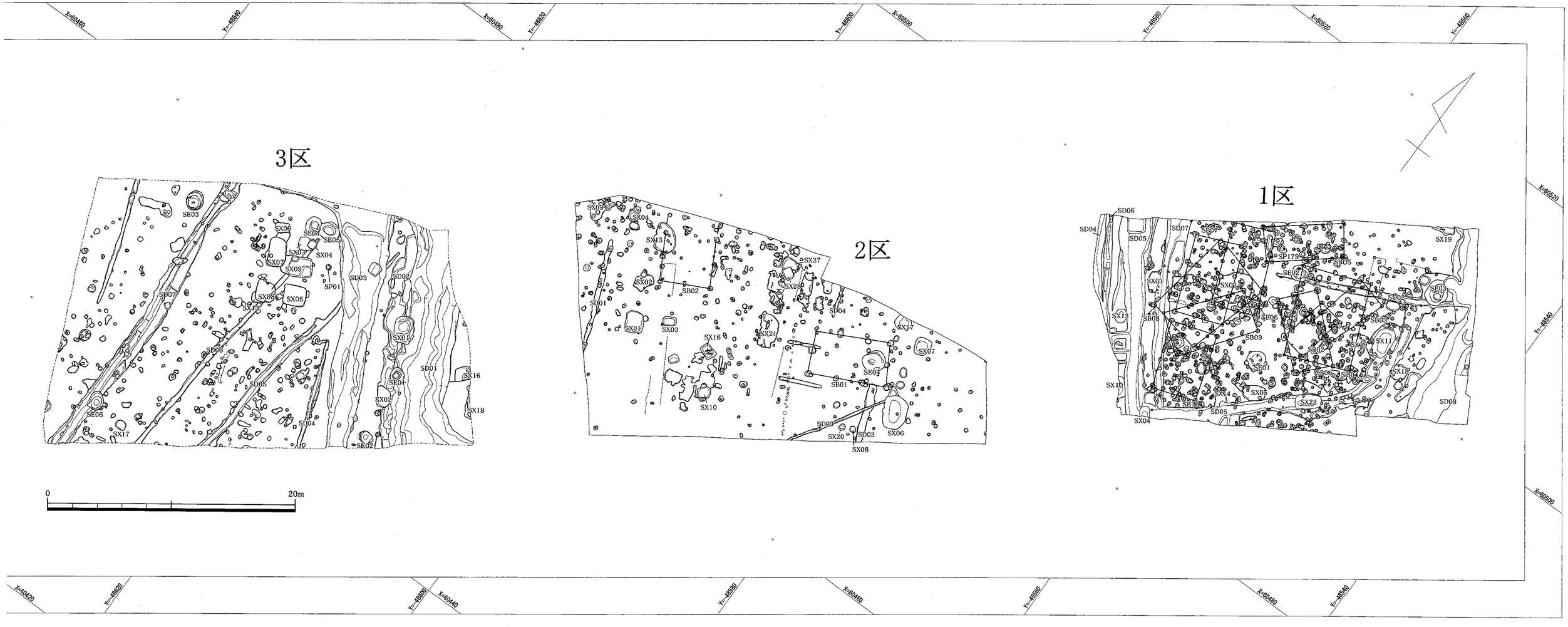
276　7区SD10



258　SP293



3区SD03



付図１　御笠の森遺跡第９次調査遺構配置図（１区～３区）（1/200）



付図２　御笠の森遺跡第９次調査遺構配置図（４区～６区）（1/200）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みかさのもりいせき
書 名	御笠の森遺跡Ⅱ
副 書 名	県道那珂川宇美線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻 次	2
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編 著 者 名	林　潤也・平島　義孝
編 集 機 関	大野城市教育委員会
所 在 地	〒816-0934　福岡県大野城市曙町2-2-1　ＴＥＬ 092-501-2211
発 行 年 月 日	西暦2005年2月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
御笠の森遺跡	福岡県 大野城市 山田2・ 3丁目			33°32′35″	130°28′32″	2001.10.1 ～ 2004.2.20	5152㎡	県道建設

所収遺跡名	種 名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御笠の森遺跡	集 落	平安 ～ 江戸	掘立柱建物跡 井戸跡 溝 土坑	須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石臼・下駄・鉛玉	古代末～近世前半期を主体とした集落遺跡。溝で囲まれた方形区画を多数確認。『筑前国続風土記』に記載のある「山田村」に相当。

大野城市文化財調査報告書

第65集

平成17年2月15日

発 行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷　株式会社　三光
福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4